

秋田県文化財調査報告書第233集

東北横断自動車道東和秋田線発掘調査報告書XIII

—— 茂竹沢遺跡 ——

1993・3

秋田県教育委員会

秋田県文化財センター

# 東北横断自動車道東和秋田線発掘調査報告書XIII

—— 茂竹沢遺跡 ——

1993・3

秋田県教育委員会

## 序

東北横断自動車道秋田線は、秋田県の高速度交通体系の根幹となるものです。すでに秋田市から横手市までの57.4kmは、平成3年7月に開通し供用されており、現在は横手市から岩手県湯田町までの区間15.8kmについての工事が、進められています。

しかし、本区間の路線には、多くの遺跡の存在することが確認されており、秋田県教育委員会では、平成2年から工事に先立って、遺跡の発掘調査を実施して、記録保存に努めております。

本報告書は、平成3年度に調査しました山内村茂竹沢遺跡の調査成果をまとめたものであります。

本書が、埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史や文化を研究する資料として、多くの方々に御利用いただければ幸に存じます。

最後に、本調査の実施及び本書の刊行に際し、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、山内村、山内村教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成5年3月25日

秋田県教育委員会

教育長 橋本 顕信

## 例 言

- 1 本書は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の13冊目の報告書である。
- 2 本書は、平成3年度に調査された山内村に所在する茂竹沢遺跡の調査結果を取めたものである。
- 3 調査内容については、すでにその一部が調査略報などによって公表されているが、本報告書の内容がそれらに優先する。
- 4 出土陶磁器の鑑定は佐賀県立九州陶磁文化館大橋康二学芸課長にお願いした。また、和田好史・仲野泰裕・藤沢良祐・服部郁の各氏より助言を得た。
- 5 第5章のうち放射性炭素年代測定は学習院大学年代測定室に、テフラ検出・材同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した報告である。
- 6 本書に使用した地図は、国土地理院発行の1/25,000『横手』『黒沢』、日本道路公団仙台建設局横手工事事務所提供の1/1000地形図である。
- 7 遺構土層図中の土色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』によった。なお、挿図中の注記で「炭」は炭化物の混入、「地」は地山粒子の混入を示す。
- 8 挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず、通し番号を付してある。その際の番号は、図版中の遺物番号と対応している。また遺物計測値の単位は、長さ・幅・厚さがcm、重さがgである。
- 9 発掘調査は、調査区をA～Cの3区域に分けて行ったが、各区は付図1のとおりである。
- 10 遺構番号は、その種類ごとに略号を付し、検出順に通し番号を付したが後に検討の結果遺構ではないと判断したものについては欠番とした。確認当初不明瞭な状態の遺構についてはSXとして精査し、後に略記号を修正した遺構もある。なお、中世から近世の柱穴については、整理段階で新たにP1からの通し番号を付け直し、発掘調査時に柱穴に付した番号も欠番とした。また、その柱穴による建物跡・柱穴列についても新しく01からの番号を付した。遺構に使用した略記号は以下のとおりである。

SI 竪穴住居跡 SK 土坑 SKP・P 柱穴 SB 建物跡 SA 柱穴列

SQ 組石遺構・石垣状遺構・集石遺構 SD 溝跡 SX 不明遺構

- 11 挿図に使用したスクリントーンは以下の通りである。



地 山



焼土塊



遺物(凹面)



濃く煤の付着する部分



焼土・遺物(磨り面)



火ばね



薄く煤の付着する部分

# 目 次

## 序

### 例 言

### 目 次

第1章 はじめに	1	1 検出遺構と出土遺物	17
第1節 調査に至るまで	1	2 遺構外の出土遺物	32
第2節 調査の組織と構成	4	第2節 中世～近世	39
第2章 遺跡の立地と環境	5	1 検出遺構	39
第1節 遺跡の立地	5	2 出土遺物	57
第2節 周辺の遺跡	8	第5章 自然科学的分析	63
第3章 発掘調査の概要	11	第1節 放射性炭素年代測定	63
第1節 遺跡の概観	11	第2節 指標テフラの検出	63
第2節 調査の方法	13	第3節 樹種の同定	66
第3節 調査経過	14	第6章 まとめ	69
第4章 調査の記録	17	写真図版	73
第1節 縄文時代	17		

## 挿 図 目 次

第1図 横手I.C以東の路線と遺跡	3	第14図 遺構外出土遺物(1) 土器	31
第2図 遺跡位置図	5	第15図 遺構外出土遺物(2) 石器	33
第3図 周辺の地形	6	第16図 遺構外出土遺物(3) 石器	34
第4図 周辺の遺跡	7	第17図 遺構外出土遺物(4) 石器	35
第5図 調査区の基本土層模式図	12	第18図 遺構外出土遺物(5) 石器	36
第6図 工事計画と調査範囲	16	第19図 遺構外出土遺物(6)	
第7図 SI06	19	石器・石製品	37
第8図 遺構内出土遺物(1) SI06	20	第20図 中世～近世の遺構から出土	
第9図 SI22	22	した縄文時代の遺物	38
第10図 遺構内出土遺物(2) SI22	23	第21図 SQ02・03・09・10・26・28	41・42
第11図 SK30～35・SQ01	25	第22図 溝跡土層図	44
第12図 遺構内出土遺物(3)		第23図 柱穴(1)	50
SK31・32・35・SX27	26	第24図 柱穴(2)	51
第13図 遺構内出土遺物(4)		第25図 SK16・18・19・45～47	53
SX27 接合資料	29・30	第26図 SQ08	55

第 27 図	SQ04	56	第 33 図	整地地業地の変遷	71・72
第 28 図	出土遺物 (1) 陶磁器・砥石	58	付図 1	遺構配置図	
第 29 図	出土遺物 (2) 杭・柱材	60	①	グリッド配置図と周辺の地形	
第 30 図	出土遺物 (3) 礎石 1	61	②	縄文土器出土重量分布図	
第 31 図	出土遺物 (4) 礎石 2	62	③	剥片(石核を含む)出土点数分布図	
第 32 図	LS53 グリッド杭付近テフラ検出 試料採取地点の模式柱状図	64	付図 2	A 区遺構配置図	

## 目 次

第 1 表	周辺の遺跡	10	第 5 表	柱穴 (4)	52
第 2 表	柱穴 (1)	47	第 6 表	陶磁器観察表	59
第 3 表	柱穴 (2)	48	第 7 表	材同定結果	66
第 4 表	柱穴 (3)	49			

## 図 版 目 次

図版 1	1 遺跡遠景 上空から(南→北)	73	6	SQ10 石垣状遺構 (北→南)	77
	2 調査区全景 上空から(南→北)	73	7	SD07 溝跡 (南西→北東)	77
図版 2	1 SI06 調査状況 (南西→北東)	74	8	SD13 溝跡土層断面 (南西→北東)	77
	2 SI06 完掘状況 (南西→北東)	74	図版 6	1 黒色土中での柱穴検出状況 (南東→北西)	78
	3 SI22 完掘状況 (南→北)	74		2 陶磁器出土状況 (南→北)	78
	4 SQ01 検出状況(南東→北西)	74		3 柱穴内の柱材出土状況(南→北)	78
	5 遺構内出土遺物 (1)	74		4 柱穴内の柱材出土状況(南→北)	78
図版 3	1 遺構内出土遺物 (2)	75		5 柱穴・溝跡の精査作業 (北西→南東)	78
	2 遺構内出土遺物 (3)	75		6 SQ08 石敷遺構 (南→北)	78
図版 4	1 遺構外出土遺物 (1)	76		7 SQ02・28 集石遺構 (南→北)	78
	2 遺構外出土遺物 (2)	76		8 SQ03 集石遺構 (南東→北西)	78
図版 5	1 石垣状遺構と整地地業地 (南東→北西)	77	図版 7	出土陶磁器	79
	2 整地地業地全景(南東→北西)	77	図版 8	遺材・礎石	80
	3 SQ09・26 石垣状遺構と SQ05 集石遺構 (南東→北西)	77	図版 9	テフラ検出試料・ 材の顕微鏡写真	81
	4 SQ09 出入り口部分(南東→北西)	77			
	5 SQ09・26 石垣状遺構 (北→南)	77			

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、首都圏への時間短縮と県内の陸上交通体系の改善など、地域の生産活動と住民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的に計画された高速道路である。道路は、東北自動車道から岩手県北上市で分岐し、横手市一大曲市を経て秋田市に至る総延長108Kmに達する。このうち、秋田－横手間57.4Kmについては、昭和53年11月の第8次施行命令によって具体化し、既に平成3年7月に供用が開始されている。

秋田－横手間の道路計画路線内に存在する埋蔵文化財包蔵地の扱いについては、昭和60年4月に日本道路公団と秋田県教育委員会との間で協議した結果、計画路線の変更が無理であることなどから、記録保存の措置を取ることで合意し、昭和60年の河辺郡河辺町七曲地区に所在する6遺跡を皮切りに平成元年度の仙北郡南外村の大畑潜沢Ⅱ遺跡まで、合計27遺跡の発掘調査が実施され、それぞれに報告書が刊行されている。<sup>(註1)</sup>

横手インター・チェンジ（I.C）以東の横手－湯田間19.7Kmについては昭和61年3月に第9次施工命令が下された。これに伴い昭和62年3月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、道路計画路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、昭和62年5月と同63年6月に遺跡分布調査を実施し、平鹿郡山内村の計画路線内に11遺跡が存在することを報告した。<sup>(註2)</sup> また、横手I.C以東の横手市分についての分布調査は、横手－秋田間の分布調査と同時に、昭和56年と同58年に実施され、4遺跡の存在することが報告されていた。<sup>(註3)</sup> これら計画路線上に存在する合計15遺跡の取り扱いについては、昭和60年の日本道路公団と秋田県教育委員会の合意を踏襲することとした。15遺跡は横手I.Cから北上市側に、柳田Ⅰ・柳田Ⅱ・小松原・新町遺跡（以上、横手市）、茂竹沢・小田Ⅲ・小田Ⅱ・小田Ⅰ・虫内Ⅱ・虫内Ⅰ・岩瀬・中島・相野々・上谷地・越上遺跡（以上、山内村）である。

発掘調査に先立って、横手市分として昭和62年には柳田Ⅰ・柳田Ⅱ遺跡、平成元年には小松原遺跡西半部、平成2年には小松原遺跡東半部と新町遺跡南半部、平成3年には新町遺跡北半部の範囲確認調査を実施した。その結果、柳田Ⅰ・柳田Ⅱ・小松原遺跡については遺跡の範囲が計画路線に及んでおらず、また新町遺跡北半部については宅地造成などによる攪乱が著しく遺構等が遺存していないため、これらは発掘調査の必要がないと判断された。<sup>(註4)</sup>

山内村分の遺跡範囲確認調査は、平成2年に虫内Ⅰ遺跡、平成3年に茂竹沢・虫内Ⅱ・岩瀬・

(註6)

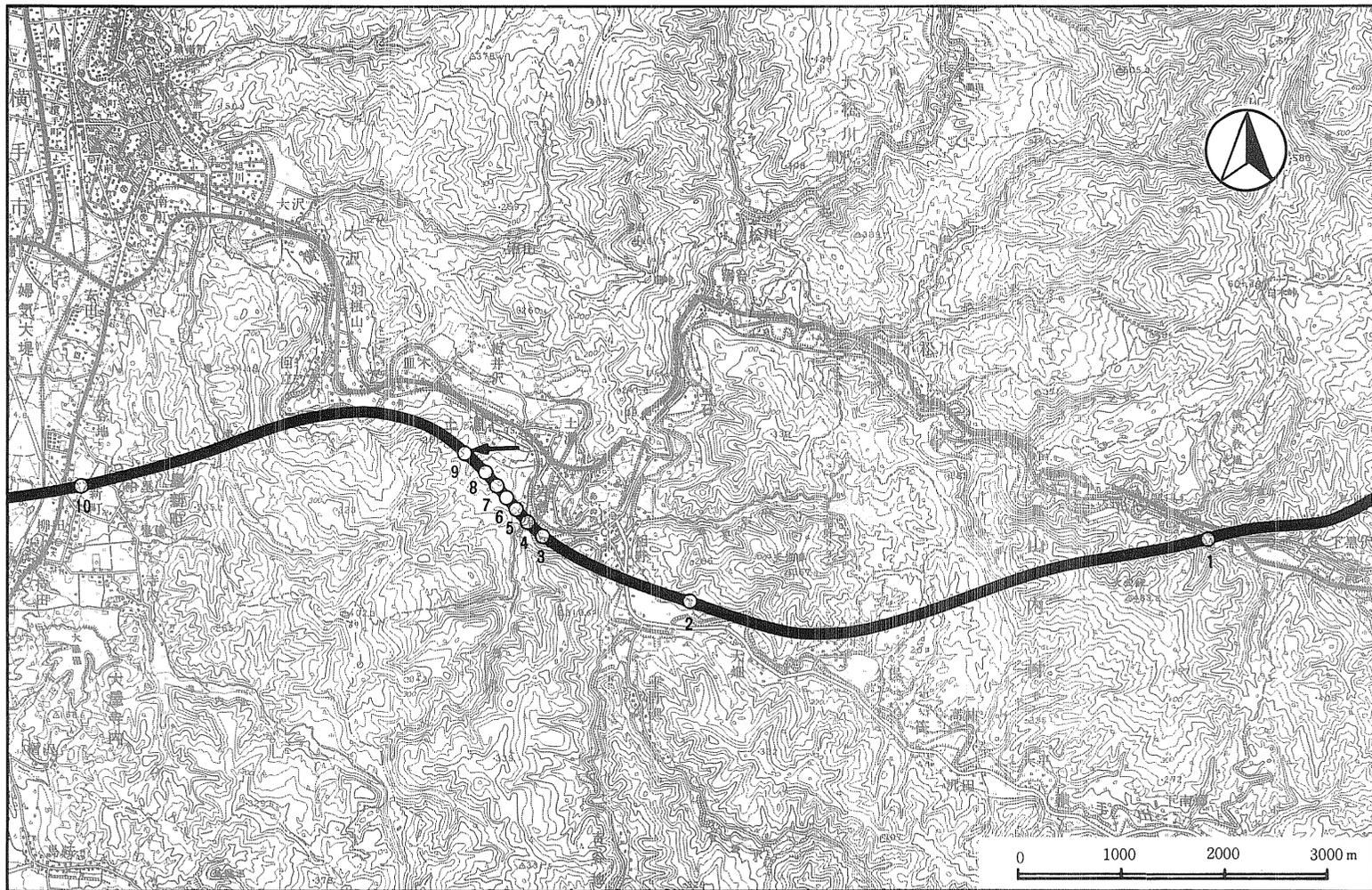
(註7)

中島・力石Ⅱ・越上遺跡、平成4年に小田Ⅴ・小田Ⅳ・虫内Ⅲ・相野々・上谷地遺跡について実施した。その結果、中島・相野々・力石Ⅱ遺跡については遺跡の範囲が計画路線内には及ばないことから調査が不要となった。なお平成2年に、虫内Ⅰ遺跡の南東側と虫内Ⅱ遺跡の西側、及び上谷地遺跡の東側で縄文時代の遺物が採集され、この3つの地点にも遺跡の存在することが判明したことから、各々を虫内Ⅲ遺跡・小田Ⅳ遺跡・力石Ⅱ遺跡として登録し、範囲確認調査を行っている。これらのことから、横断道山内村分の発掘調査対象遺跡は、岩手県側から順に越上・上谷地・岩瀬・虫内Ⅲ・虫内Ⅰ・虫内Ⅱ・小田Ⅳ・小田Ⅴ・茂竹沢遺跡の9遺跡となったのである。

横手市の1遺跡・山内村の9遺跡に対する発掘調査は、平成2年度の新町遺跡から開始され、平成3年には越上遺跡・岩瀬遺跡・虫内Ⅰ遺跡の一部・虫内Ⅱ遺跡・茂竹沢遺跡が、平成4年には上谷地遺跡・虫内Ⅲ遺跡・虫内Ⅰ遺跡の一部・小田Ⅳ遺跡が実施されている。

註

- 1 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ～Ⅺ』 秋田県文化財調査報告書第150・166・180・186・189・190・191・205・206・207・209集 1986～1991(昭和61～平成3年)
- 2 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第179集 1989(平成元年)
- 3 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第93集 1982(昭和57年)
- 4 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第201集 1990(平成2年)
- 5 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第217集 1991(平成3年)
- 6 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第226集 1992(平成4年)
- 7 前述の小田Ⅰ・小田Ⅱ・小田Ⅲ遺跡については、横断道の分布調査の際に付した遺跡名が、既に別の遺跡として遺跡地図に登録されていたことが判明したこと、地形的には1遺跡とするのが妥当であること等から、これをまとめて小田Ⅴ遺跡とした。



第1図 横手I.C以東の路線と遺跡 1 越上 2 上谷地 3 岩瀬 4 虫内Ⅲ 5 虫内Ⅰ  
6 虫内Ⅱ 7 小田Ⅳ 8 小田Ⅴ 9 茂竹沢 10 新町

## 第2節 調査の組織と構成

遺跡名	茂竹沢遺跡	
遺跡所在地	秋田県平鹿郡山内村土淵字茂竹沢12外	
調査期間	平成3年7月29日～10月31日	
調査面積	2,800m <sup>2</sup>	
調査主体者	秋田県教育委員会	
調査担当者	武藤 祐浩 (秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事) 栗澤 光男 (秋田県埋蔵文化財センター文化財主事)	
調査員	斎藤 典芳	
専門指導員	小林 達雄	国学院大学文学部教授
	林 謙作	北海道大学文学部助教授
	岡村 道雄	文化庁記念物課文化財調査官
	板垣 直俊	秋田県由利郡鳥海町立川内中学校教諭
総 務	佐田 茂	(秋田県埋蔵文化財センター 主査) (現 秋田県立農業科学館 主査)
	皆川 清	(秋田県埋蔵文化財センター 主査)
	佐々木 真	(秋田県埋蔵文化財センター 主任)
調査協力機関	日本道路公団仙台建設局横手工事事務所 山内村教育委員会	

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の立地

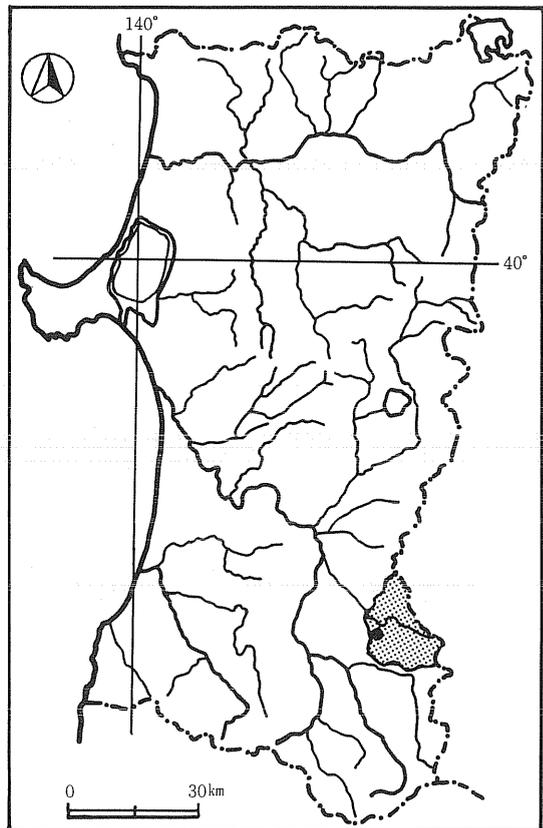
#### 1 遺跡の位置と立地

茂竹沢遺跡は東経 $140^{\circ}36'30''$ 、北緯 $39^{\circ}16'54''$ に位置する（第2図）。遺跡はJR北上線相野々駅の北西約1.3Km、平鹿郡山内村土淵字茂竹沢に所在する。

遺跡の所在する山内村は平鹿郡の南東端にあたる。奥羽背梁山地の西部にあって、山深く村域の約87%が山林と原野であり、集落が奥羽山系に源を発する横手川・黒沢川・松川・武道川の4河川の河岸段丘上に点在する峡谷型山村である。

村の大部分を占める山地は河川・沢筋に区画される御岳山山地・大穴嶺山地・金峰山山地・大日向山山地・大鈴森山地・三ツ森山地に地形区分されている。割倉山(770m)・南郷嶽(681m)・大鈴森(865m)・小鈴森(757m)・大日向山(780m)の比較的高い山は、早壮年期山地である。山地はさらに起伏量によって区分されているが、南郷嶽・大鈴森の周辺は、起伏量400m～800mの大起伏山地とされているほか、村域全体でも起伏量200m～400mの中起伏山地の占める割合が高い。

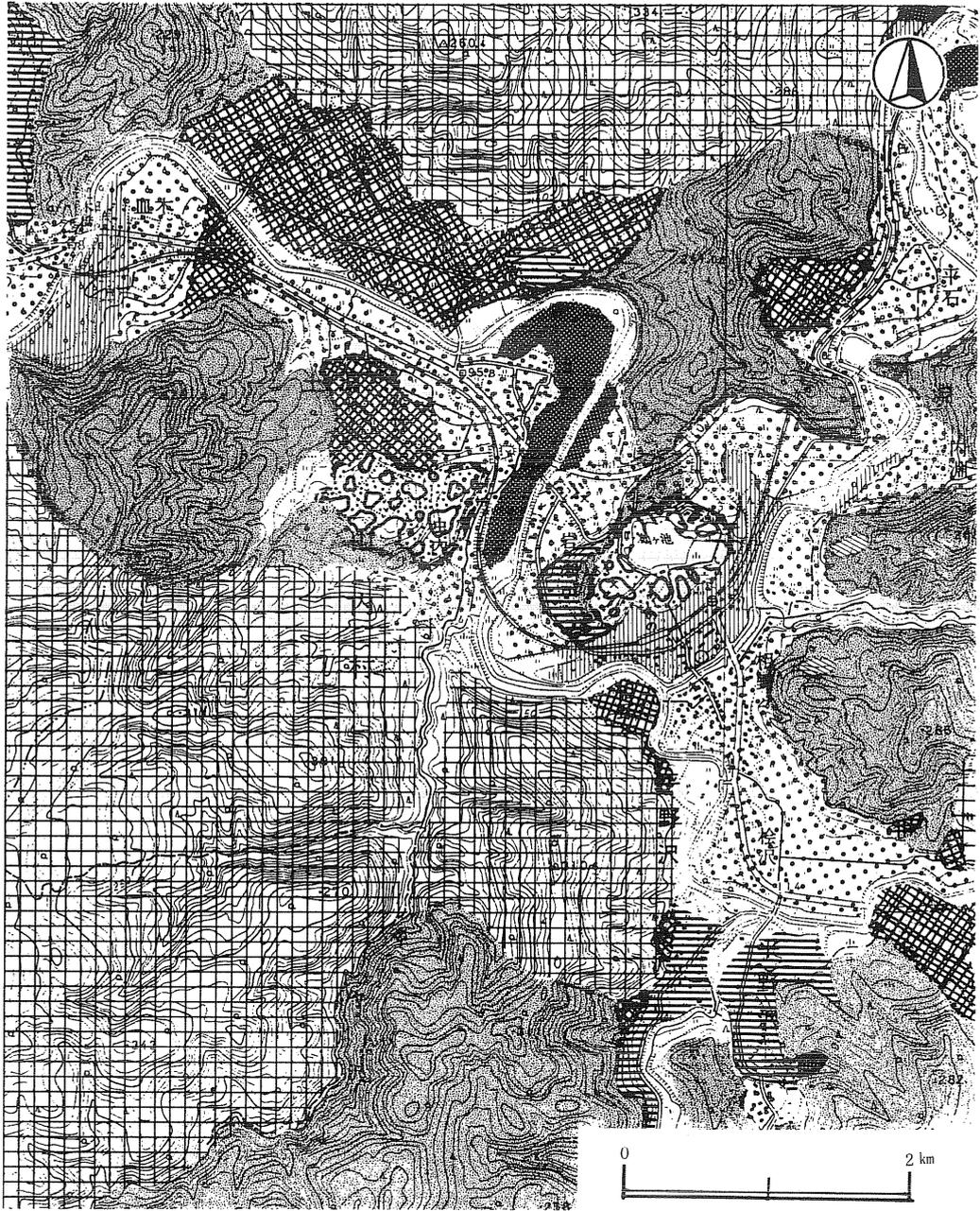
遺跡付近の地形区分は、奥羽背梁山地の東端にあたる金峰山山地に含まれている。南を成瀬川、東を武道川、北を横手川、西を横手盆地に囲まれるこの山地は、中央および南側が中起伏山地であるが、東・北・西側の縁辺に起伏量200m未満の小起伏山地が点在する。遺跡付近も標高261mの大館山を中心に、金峰山山地の北辺に張り出した小起伏山地と



第2図 遺跡位置図

■ 山内村

● 茂竹沢遺跡



- |   |  |  |
|---|--|--|
|  中起伏山地 |  砂礫段丘Ⅲ <sup>+</sup> |  砂礫段丘Ⅱ  |
|  砂礫段丘Ⅰ |  砂礫段丘Ⅳ <sup>+</sup> |  扇状地    |
|  砂礫段丘Ⅲ |  砂礫段丘Ⅳ              |  岩錐、土石流 |
|  小起伏山地 |  谷底平野・氾濫平野          |  |

第3図 周辺の地形



第4図 周辺の遺跡

して地形区分されている（第3図）。

大館山の東裾には遺跡名となっている茂竹沢がある。幅40m程のこの沢は、横手川が形成した高位段丘の北縁を北東から南西方向に開析したものである。沢の北側は大館山の斜面であるが、南側には小田遺跡群のある良好な台地が形成されている。

茂竹沢遺跡は大館山の東側斜面の下方に立地している。周辺では幾筋もの小さな沢が入り、尾根と沢が入り組んだ地形を呈している。また斜面末端には茂竹沢に面して狭小な平坦部分がある。

## 第2節 周辺の遺跡

山内村内の遺跡数は、秋田県教育委員会発行の「秋田県遺跡地図（県南版）」1987年12月段階で43遺跡である。その後、今回の横断自動車道の建設に伴って、新たに9遺跡が確認され、現在の遺跡総数は52である。時代の明確な遺跡では、縄文時代の遺跡が25、城館跡13であり、他に縄文時代と中世～近世・縄文時代と中世以降の複合遺跡が各1あるが、旧石器時代・弥生時代～古代の遺跡は確認されていない。時代の特定できない遺跡では、出土遺物として石器片・土器片があげられていることから、その大部分が縄文時代の可能性がある。

第4図には、国土地理院発行の1/25,000「横手」「羽後黒沢」から、土淵・平野沢地区を中心とした部分を切り取り、現在確認されている遺跡の推定範囲を示した。尚、図中の番号に対応する遺跡名を第1表に示したが、ともに「秋田県遺跡地図（県南版）」による遺跡の山内村内での遺跡登録番号を用いた。また、新しく確認した9遺跡については、発見順を考慮して、東側から順に44番以降の番号を付した。以下では山内村の遺跡について、縄文時代と城館跡の状況を中心に概観する。尚、（ ）内の番号は第4図及び第1表の番号である。

縄文時代で、時期を特定できる遺跡は13遺跡である。ただし、ほとんどが横断自動車道の建設に伴う発掘調査によって明確になってきたものである。草創期のものは確認できないが、早期の土器片が岩瀬遺跡（47）で出土している。前期前半の遺物は茂竹沢遺跡（本遺跡 50）・虫内Ⅱ遺跡（48）・虫内Ⅲ遺跡（51）・岩瀬遺跡（47）・上谷地遺跡（46）で出土している。土器片の出土は、いずれも少量である。これに対し石篋を中心に石器・剥片は多く出土している。また岩瀬遺跡では竪穴住居跡・集石遺構も検出されている。前期後半～中期前半の状況は不明瞭である。中期後半～後期初頭にかけては上谷地遺跡（46）・神成遺跡（9）・道地遺跡（14）・虫内Ⅲ遺跡（51）・小田Ⅳ遺跡（52）に集落が形成されている。なお、神成遺跡は昭和34年という早い時期に大和久震平氏によって発掘調査が行われたことが同年6月9日の「秋田魁新報」に報じられている。また、道地遺跡も、昭和59年山田貞吉氏により発掘調査が行われている。

後期前葉～中葉にかけては、第4図の範囲の東方にある、越上遺跡の捨て場から良好な土器群が出土している。また、後期中葉に位置付けられる竪穴住居跡が本遺跡で2軒検出されている。後期後半以降晩期の前半には、虫内Ⅰ遺跡を中心に虫内Ⅲ遺跡・虫内Ⅱ遺跡・小田Ⅳ遺跡を含む範囲の大きな墓域がつくられている。この墓域は主に土壙墓と土器埋設遺構から特徴づけられており、土壙墓の分布はそれぞれの遺跡内でいくつかのまとまりを示している。また虫内Ⅰ遺跡では広い範囲の捨て場が形成されており、膨大な量の遺物が出土している。これらの遺構・遺物を残した人々の集落・住居は、今のところ不明である。各遺跡の詳細については逐次刊行される予定の発掘調査報告書を参照していただきたい。

以上の縄文時代の遺跡の分布は、村内を流れる横手川・黒沢川・松川・武道川の4河川の河岸段丘上に点在している。今の所、時期的な特徴を明瞭には抽出できないが、中期～後期初頭の集落は上谷地遺跡や小田Ⅵ遺跡のように高い台地上に立地していることが指摘できる。

弥生時代以降の遺跡については、現在のところ城館跡以外には知られていない。しかし、西方の横手盆地では旧石器時代や弥生時代以降の各時代の遺跡が数多く存在しており、本村が山深くなる点で遺跡の立地については十分に検討しなくてはならないが、山内村内でも縄文時代の遺跡はもとより他の時代の遺跡も多く確認されていくものと考えられる。

中世以降には城館跡が村内で13確認されている。ほとんどが山頂や山の中腹、舌状台地先端部に立地している。また高位に小面積の郭が置かれ、前後に空堀や段を有するものが多い。和田城以西の3館はおよそ1Km間隔に分布し、増田町から横手市にかけての館の分布と共通した特徴である。また和田城より東側の館の分布は川筋毎に2～3館となっている。

皿木館(16)は別称大館といい、本遺跡の北西部にあたる大館山の山頂に構築されている。

築城時期・城主などについて、「秋田県の中世城館」では北館・寺館は保元・平治頃の伊藤采女との関連を指摘しており、古い時代のものの可能性がある。

このほか同報告では『小野寺興廃記』や『山内村郷土資料』・口承などから皿木館(16)の小田島大刀、和田城(17)の和田四郎、鎧倉館の佐々木某、黒沢館の黒沢長門、藤倉館の小田島大刀・黒沢長門を推定している。また黒沢館については天文年間(1532～1555年)の築城であるという。これらの館跡については戦国時代、平鹿・雄勝を支配した小野寺氏との関連が考えられる。

中世から近世の平鹿・雄勝の様子を知り得るてがかりには『奥羽永慶軍記』や『雪の出羽路』などの近世にまとめられた記録がある。『雪の出羽路』は菅江真澄が文政7年(1824年)8月から9年5月にかけての巡村調査をもとにまとめられたものである。山内村については14巻に記されている。記述は「土淵邑」の「横手山内郷」から始まる。そこでは「享保郡邑記ニ云ク」として「土淵ノ肝煎」が山内9村を治めること、その頃の肝煎小田島氏について「小野寺遠江守義

道の時世」から肝煎の職にかかわっているらしいことが述べられている。また、「茂竹邑」の所には「一前半省略一此茂竹に寺ノ跡あり、そこを古寺山といふ。そはいかなる寺とも古老の伝へもなしといふ。」と記されている。

引用・参考文献（文献の番号は、第1表の文献番号に対応する。）

- 1 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56年)
- 2 高橋則夫 「遺跡、ひとり歩き」 『山内村郷土史年報』 山内村郷土史編纂委員会 1983(昭和58年)
- 3 山田貞吉 「道地遺跡発掘調査調査報告」 『山内村郷土史年報』 山内村郷土史編纂委員会 1984(昭和59年)
- 4 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(県南版)』 1982年(昭和62年)
- 5 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第179集 1989(平成元年)
- 6 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第217集 1991(平成3年)
- 7 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第226集 1992(平成4年)
- 8 内田武志・宮本常一 『菅江真澄全集 第六巻 地誌Ⅱ』 未来社 1976(昭和51年)
- 9 秋田県農政部農地整備課 『雄平仙中核都市建設計画地域土地分類基本調査 横手』 1977(昭和52年)
- 10 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第239集 1993(平成5年)

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代など	文献番号
1	板屋沢	山内村土淵字板屋沢	縄文	2・4
2	谷地端	山内村土淵字小貝	縄文	2・4
3	赤濁	山内村土淵字板井沢	縄文(晩) 竪穴住居跡	2・4
4	虫内Ⅰ	山内村土淵字虫内	縄文(後・晩)	2・4・5・6
5	三明岡	山内村平野沢字三明岡	縄文(晩) 岩版	4
6	鶴ヶ池	山内村土淵字鶴ヶ池	縄文	4
7	二瀬	山内村土淵字二瀬	縄文	4
8	相野々	山内村平野沢字相野々	縄文(晩) 遮光器土偶	4・10
9	神成	山内村平野沢神成	縄文(中・後)	4
14	道地	山内村土淵字道地	縄文(中) 組石遺構	3・4
15	大沢館	山内村大沢字矢櫃	館跡 郭2 空堀	1・4
16	皿木館	山内村土淵字皿木上段	館跡 郭3 空堀 段	1・4・8
17	和田城	山内村土淵字鶴ヶ池	館跡 郭2 空堀	1・4
28	皿木	山内村土淵字君ヶ原	縄文	4
29	板屋沢Ⅱ	山内村土淵字板屋沢	縄文	4
30	板井沢	山内村土淵字板井沢	縄文	4
31	小田	山内村土淵字小田	石器片	4
32	小田Ⅱ	山内村土淵字小田	石器片	4
33	小田Ⅲ	山内村土淵字小田	石器片	4
34	中島	山内村土淵字中島	土器片・石器片	4
35	菅生	山内村土淵字菅生	石器片	4
36	平石	山内村土淵字菅生	石器片	4
38	桧沢	山内村平野沢字桧沢	土器片	4
39	力石	山内村筏字力石	石器片	4
46	上谷地	山内村平野沢字上谷地	縄文(前・中)	5・10
47	岩瀬	山内村土淵字岩瀬	縄文(早~中)	4・5・7
48	虫内Ⅱ	山内村土淵字虫内	縄文(前~晩)	4・5・7
49	小田Ⅴ	山内村土淵字小田	縄文(早~晩)	10
50	茂竹沢	山内村土淵字茂竹沢	縄文(前~晩)・中近世	4・5・7・8
51	虫内Ⅲ	山内村土淵字虫内	縄文(早~晩)	10
52	小田Ⅳ	山内村土淵字小田	縄文(前~晩)	10

第1表 周辺の遺跡

## 第3章 調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

山内村の中央部をほぼ東西に横断する国道107号線（平和街道）は、主として黒沢川の形成した河岸段丘上を通っている。横手市と北上市を結ぶこの国道を、横手市から東に向かうと、国道は長瀬付近で大きく左へカーブして跨線橋へさしかかるが、その右前方には大館山が見える。茂竹沢遺跡はこの大館山の東側である。跨線橋を越え、皿木橋を渡り、さらに国道を進むと、右側に茂竹集落に至る標識がある。ここで右折する。道は村道となり、緩やかな傾斜をもって国道より一段高い段丘に上り、踏切を越える。前方に水田があり、右手の道路沿いに茂竹集落がある。遺跡名となっている茂竹沢は、この集落の後方にある幅40m程の沢である。茂竹集落の東端を通る村道は、沢づたいに伸びている。水田として利用されてきたこの沢の谷底部分も、奥のほうでは減反の対象となっている。沢を臨んで右手は大館山の斜面であり、雑木林になっている。道の右端は幅1m程の水路となっており沢水が流れている。集落の端で舗装が切れて、砂利道をおよそ120m程進む。右手の斜面が傾斜の緩い平坦部となる。この付近が遺跡である。村道はこの先で緩くカーブし、二股に分かれている。左側はさらに沢の奥へ進み集落の小さな社である三吉神社の前を通り、行き止まりとなる。この奥の山頂には山神が祭られているという。もう一方の右側は緩れおりになりながら大館山へ登る道となる。

大館山の東斜面にあたるこの付近では幾筋もの小さな沢が入り、尾根と沢が入り組んだ地形を呈している。先の大館山頂へと続く道を登るとこの付近の起伏の様子がよく観察される。遺跡周辺では、痩せた尾根づたいにフレークの散布が認められる。大館山の東側斜面の裾のかなり広範囲にフレークが散布し、それが集中する部分が幾つか存在する可能性があることから、遺跡全体の広がりには南東方向にのびる東西250m、南北250mほどと推定される。

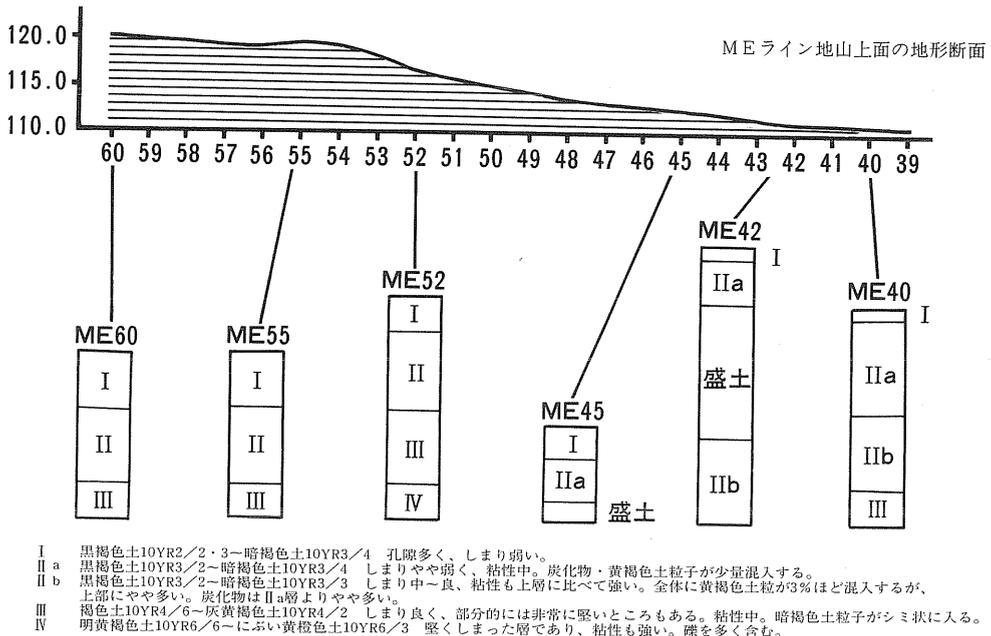
東北横断自動車道は、大館山の下をトンネル（土測トンネル）で通過する。茂竹沢遺跡の今回の調査区は、このトンネルの出入り口部分にあたっており、そこは大館山東側斜面の末端で、遺跡の東端部に当たるものと考えられる。調査区内の地形は、北東と南西側を小さな沢に挟まれた尾根と、この尾根の斜面下方の小さな平場から構成されている。標高142mのこの尾根の先端は、さらに南側から入り込んだ小さな沢によって画され、東西23m、南北15m程の広がりをもつ標高125mの高台となっている。またこの小さな沢の上端は、尾根と高台の間で痩せた尾根状を呈し、その北側で東西20m南北30m標高123m前後の平場となっている。さらに斜面下方の平場は、標高約115mで40m四方の広さであるが、この平場から尾根にかけては急激な斜面となって

いる（第6図）。調査は便宜上、南側で斜面下方の平坦部分を中心とするA区、調査区北東部の高台及び北側の斜面上部の平坦面をB区、A・B区の間をC区として行った。なお、C区については範囲確認調査結果から、グリッドを単位とした坪掘調査とした。

遺跡の現況は杉林と雑木林である。路線の範囲は春の範囲確認調査以前に伐採されていたが、調査区内はその枝や不要となった伐採木と腰の高さまでも茂った雑草で覆われていた。杉の切株にはその太さの違いに概ね3種類あった。太い古株は径1mを優に越えるものがあり、古い時代から植林された所であることをうかがわせていた。同時に、雑草に交じって茗荷が生えており、以前に人の住んだ形跡もあった。

A区の地形は急斜面の削平と低い部分への盛土によって造成されたものであり、調査開始時点で、急斜面を削平した部分の段は看取できたし、部分的に集石も見られた。調査では、中世末から近世にかけての整地地業を伴う建物跡・溝跡などが検出された。この整地地業や溝跡には少なくとも4時期の変遷が窺える。また、A区では縄文時代後期の竪穴住居跡2軒および縄文時代の土坑・柱穴跡など、B区では縄文時代の組石遺構1基と剥片集中カ所1カ所を検出し、調査した。縄文時代の遺物は全体から少量出土したが、土器片には前期～晩期のものがある。調査区の層位は調査時点でⅠ～Ⅳ層に分層した。但しⅡ層については層のしまり具合と混入物の状態からa・b層に分けたが、明瞭でない部分も多く、特にB区では全体をⅡ層として土層図を作成した。また、中世の整地地業により削平を受けたA区ではⅡb層～Ⅲ層がない部分もある。

Ⅰ層 表土。少量の剥片が拾える。また径30cm前後の円礫の露出する部分もある。



第5図 調査区の基本土層模式図

Ⅱ a層 近世以降、おもに建物が廃棄された後の堆積土に相当し、この層の下面が建物が存在し機能した時点の生活面にあたるものと考えられる。A区の削平部分の北端では、削平によって露出した地山面の上に黒色土を盛土し、生活面とした部分がある。A区南側ではⅡ a・Ⅱ b層間に中世の整地地業による盛土が認められる。この整地地業は、盛土層が2枚あることから少なくとも2回は盛土整地されている。概念的には、整地地業の変遷に対応する生活面が想定されるが、部分的な盛土を含めた分層と生活面との対応は明確にはできなかった。

Ⅱ b層 縄文時代以降、中世の遺構構築までの堆積層。縄文時代の遺物が少量出土している。遺構・遺物の時期を考慮すると前期・後期・晩期の3時期が包含されているが、それぞれの生活面などは明瞭ではない。

Ⅲ層 漸移層。ただしB区においては縄文時代の遺物を包含する部分がある。地山に近い色調の土から剥片が出土し、地山の特定が困難な部分があった。また、剥片のみの出土で土器が伴出しなかったため、この剥片群の位置付けが問題であったが、遺物自体の特徴から縄文時代のものと考えている。なお、この層以下についてテフラ検出を行っており、第5章に結果を掲載した。

#### Ⅳ層 地山。

検出した遺構のうち、現地表面に露出していた一部の集石遺構は、それをてがかりに遺構確認を行った。また、他の礫を伴う遺構についてもⅡ層の黒色土中で検出している。これらの遺構の確認は、整地地業の盛土部分の広がりを確認する際の手掛かりとなった。また柱材の裏込めに地山ブロックを多量に混入した柱穴も、Ⅱ層中でそのプランを検出した。ただしこうした柱穴は少なく、地面を掘り込んだ遺構の確認面は、多くの場合地山上面であった。

## 第2節 調査の方法

調査は、調査区の地形を考慮し調査区内をA～Cの3区に分割して行った（付図1）。

調査の方法はグリッド法を採用した。東北横断自動車道秋田線路線内には、20m毎に中心杭が打設されている。調査では、このうちのS T A 159+00を原点とし、国家座標第Ⅹ系の座標に合わせて一辺4mのグリッドを設定した。また、座標軸の南北方向に2桁の算用数字（・・・49・50・51・・・）、東西方向にアルファベット2文字の組み合わせ（L O・・・L T・M A・・・M K）を付し、この組み合わせを各グリッド杭の名称とした（例 M A 50）。各グリッドの呼称は、グリッドの南東隅の杭の名称を用いている。

範囲確認調査の結果、調査区内の遺物包含層は薄く、遺構確認面までも浅いことが予測されたため、掘り下げは表土から人力で行った。また杉の切株の除去についても同様の理由で重機

を用いなかった。遺構外出土遺物の取り上げは出土グリッド・出土層位・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。遺構内出土遺物については出土位置とレベルを記録して取り上げるようにしたが、覆土一括としたものもある。これら遺物の出土状況は必要に応じて適宜図面作製や写真撮影を行った。遺構の確認は掘り込み面で行うように努めたが、前述のとおり大半は地山上面で検出した。

遺構の精査は、対象となる遺構によって2分法・4分法を中心に、必要に応じて適宜ベルトの設定やサブトレンチを用いた。記録は主に図面と写真によった。図面は断面図と平面図を作成したが、遺構によってはエレベーション図を作成したものもある。また、作業手順の不手際により土層図の作成できなかったものもある。平面図はグリッド杭を利用した遣り方測量で作図した。各図の縮尺は基本的に1/20で作図したが、場合によっては1/10で行ったものもある。また黒色土中に検出した集石遺構・石垣状遺構や柱穴群などについては、グリッド杭を利用して1m間隔の対空標識を設置し、リフティングケーブルシステムによる写真撮影を行い、それを元にした1/40・1/100図化を委託した。遺構図面は、遺物出土状況・重複関係などから数回にわたる図面作製を行ったものもある。

写真は、基本的には35mmのモノクロとリバーサルフィルムを使用し、写真測量用の撮影と必要に応じてネガカラーフィルムを使用した。

この他、遺跡周辺の地形形成や遺構の年代把握などのために、試料のサンプリングを行い、分析を委託した。

室内における整理は、遺構については実測図より第2原図を作成し、これをトレースしている。また遺物については、洗浄・注記の後に実測図・拓影図の作成、写真撮影を行っている。

### 第3節 調査経過

調査は平成3年5月に範囲確認調査を行った後、平成3年7月29日(月)～10月31日(木)までの延65日を費やして行った。

7月29日から8月3日の第1週、週前半は調査区内の草刈及び杉枝の除去や範囲確認調査のトレンチ(A区)の排土移動の他、ベルトコンベアーの設置・排土置場の土留柵の設置や器材の整備を行う。この後諸準備の整った2日には、A区西側から表土除去を開始した。また、範囲確認調査で確認された集石遺構について、S Q01～S Q05の遺構番号を付している。この週は梅雨が長引き雨中の作業も多かった。第2週、8月6日にはB区のトレンチ排土移動を平行して行い、縄文時代前期前半の土器が出土。同9日、A区西側の急斜面下方で、深鉢形土器が押し潰された状態で出土し周囲に落ち込みがあることが予測されたためS X06とする。

お盆休みを挟んだ第3週。8月19日には、A区西側でS D07を検出。この溝跡の平面形が、A区の斜面裾部分に認められる段差の平面形と対応することから、A区の主体となる平坦面が人為的に造成されたものと判断する。また、S X06とした遺構は堅穴状を呈することが判明し、S I06と改める。この週は好天に恵まれ表土除去が進行した。これによって21日にはS Q08・09を検出した。前者はB区側からの沢筋で湧水のある付近の石敷であり、後者はA区南東側で石垣状の遺構である。この週は表土除去と平行して、A区のS Q02～05の検出作業を進めている。好天には恵まれたが、地山の露出した部分では乾きが著しく、遺構の検出が思うように進まない。第4週。S D07・S Q09及び斜面裾の削平からはこの部分に建物の存在が予測されたため、見通しを良くするために切株の除去を開始するが、数の多さとその大きさにより手間取り、このあとしばらくはこの作業に人手を割くことになる。この週は検出中の遺構精査と基本土層図の作成を進める。9月に入り、調査も第5週となる。6日にはB区の表土除去に着手。A区では柱穴・溝跡などの遺構が検出されはじめた。またS Q09の西側に最大厚70cmほどにもなる盛土整地部分があることを確認した。作業員が減少し、調査は遅れぎみである。第6週。A区ではS K・S D等の遺構の精査を行う。また、B区東側の高台から西に下る斜面部分の褐色土中に剥片が集中して出土し、S X27とする。B区では、S Q01につぐ2基目の遺構である。本週10日には林謙作先生が来跡された。

第7週以降はB区の掘り下げと平行して、A区の遺構群の精査に追われる。特に次々に検出される柱穴は無数にあるかのようである。第8週に入って、24日には黒色土中に残っていたS Q群に空中写真撮影を行い、礫の除去と下部の掘り下げに着手した。これに伴い縄文時代の堅穴住居跡を検出しS I22とした。この週末の28日には台風19号が秋田県を通過したが、幸にも本遺跡の調査に被害はなかった。第9週に入り、10月1日柱穴の一つから黄瀬戸と見られる端反皿が出土し、建物跡の時期を検討する手掛かりを得る。また、2日には小林達雄先生が来跡され、柱穴群の柱配置についてご教示いただく。第10週、B区の掘り下げにめどがつき、C区の掘り下げに着手。ME50グリッドに人為的に置かれたとみられる大きな礫が出土し、S Q08との関連が考えられた。7日岡村道雄先生が来跡される。第11週に入り、調査も最終段階に近付くがA区の遺構精査に追われる。16日には盛土層の下部からS Q09より古い石垣状の遺構がみつきS Q26とする。また柱穴については精査と遺構番号が追いつかず、所見をメモして次々に対応した。17日ME39グリッドの掘り下げで縄文土器がまとまって出土した。この付近でも柱穴が見つかったが、確認の状態からこの中には縄文時代のものもある。18日精査中の柱穴内から柱材が検出される。第12週柱穴群の平面図作成のため空中写真撮影を行う。また、23日にはテフラ検出の為のサンプルを採取。24日には遺跡航空写真の撮影を行った。調査では最終日まで柱穴の精査を行ったが、10月30日トラックにより器材を搬出し、屋外調査を終了した。

この後、埋蔵文化財センターにて遺物・図面類の整理作業を行い、報告書の作成を行った。



## 第4章 調査の記録

調査では竪穴住居跡2軒、土坑12基、組石遺構1基、剥片集中出土場所1カ所、石垣状遺構3基、溝跡14条、石敷遺構1基、集石遺構5基の他、斜面の削平・盛土による整地地業跡と453基の柱穴を検出した。出土遺物には縄文土器・石器・石製品・陶磁器・砥石・柱材・礎石などがあり、その総量はコンテナで15箱である。

検出した遺構及び出土した遺物には、縄文時代のものと、中世～近世のものがある。以下では第1節縄文時代、第2節中世～近世に分けて記述する。なお各遺構は、出土遺物や確認時の状況などによって時代を判断した。遺構は種類ごとに扱い、遺構番号順に記述する。

### 第1節 縄文時代

検出した遺構は、竪穴住居跡2軒、土坑6基、ピット2基、組石遺構1基、剥片集中出土場所1カ所の計13遺構である。遺構は、出土遺物から縄文時代後期に位置付けられるものもあるが、周辺の遺物出土状況から縄文時代の遺構と考えられるが時期の特定できないものもある。

遺構の多くはA区に分布し、B区では組石遺構1基と剥片集中出土場所1カ所を検出しただけである。遺構はⅡb層中で確認できたものは少なく、ほとんどがⅣ層（地山）上面での検出である。尚、A区中央部分では中世から近世期の大規模な整地地業により削平されており、その部分では縄文時代の遺構は検出できなかった。またA区南端で検出されたピット群は、周辺の遺物の散布状況から縄文時代のものを含んでいると考えられるが、ここでは出土遺物・検出状況から明確にこの時代のもの2基だけを扱った。

遺構内外から出土した土器は前期～晩期のもので、いずれも少量である。また、石器は石錐・石匙・石篋・凹石・磨石・石皿などがある。

遺物は主にⅡ層とした黒褐色～暗褐色土から出土した。全体的にⅡ層下部からの出土が多い。B区ではⅢ層の褐色土中からも剥片が出土している。なお、第2節で述べる集石遺構・柱穴・溝跡中には縄文時代の石器や剥片も含まれていたが、石器は本節の最後にまとめ、遺構外出土遺物中で記述した。

#### 1 検出遺構と遺構内出土遺物

##### (1) 竪穴住居跡

2軒検出された。ともに2時期あるものと考えられる。また出入り口施設と考えられる楕円

形のピットが検出されている。なお、出土遺物については各住居とも2時期に分けず、最後にまとめている。

#### S I 06 (第7・8図)

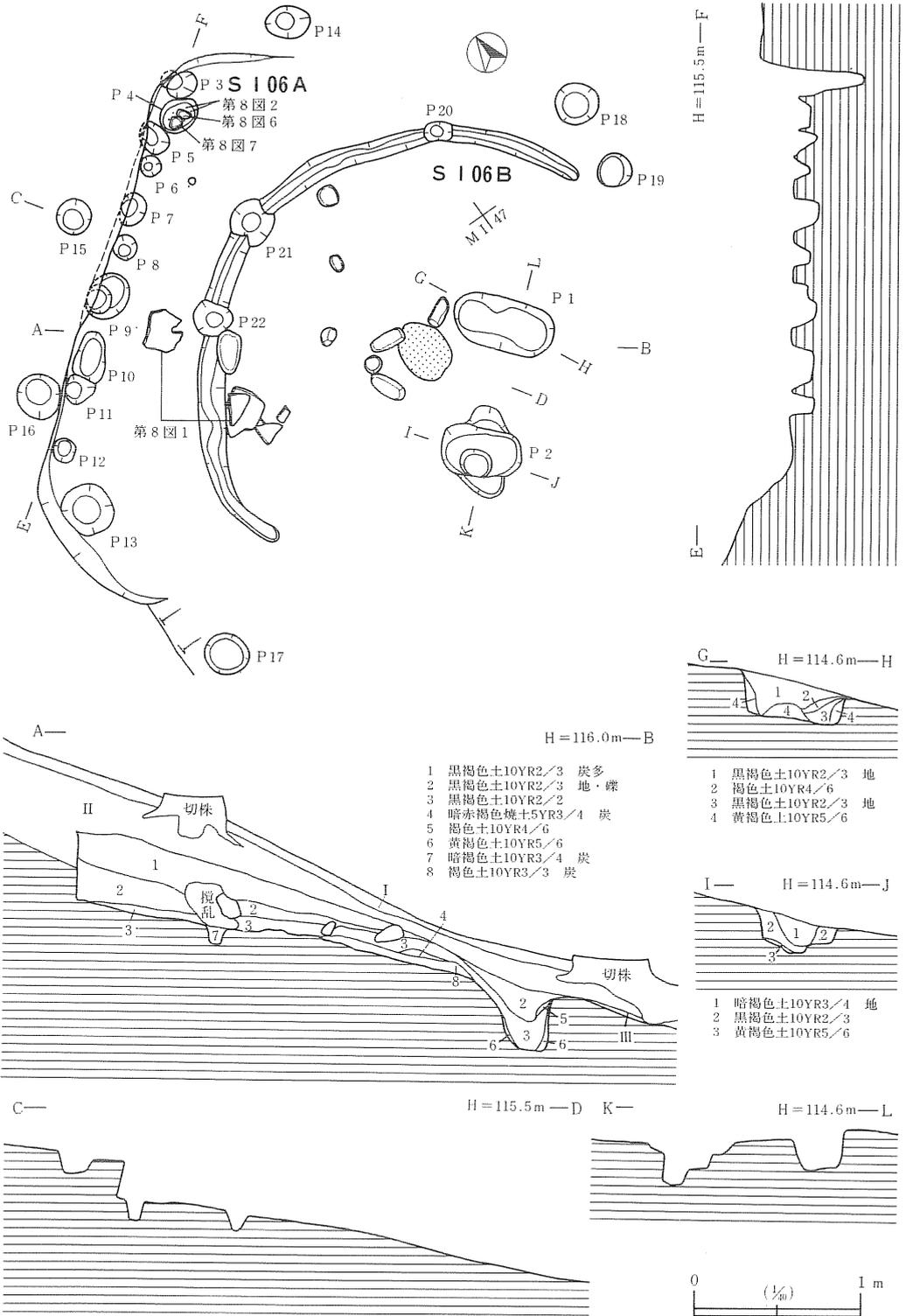
調査区南西部のMH・MI 46・47グリッドで検出された。遺構はやや急な斜面に作られている。この部分のII層掘り下げ中に、押し潰された状態の深鉢形土器と焼土面が検出され、その後、西側のIV層上面で略方形のプランが確認された。また、焼土面及び遺物出土レベルでは柱穴などは確認されなかったが、IV層上面で柱穴及び柱穴を伴う弧状の溝跡が検出された。この溝跡は当初確認された壁からは東側に離れており、またプランも異なる。このことから竪穴住居跡には2時期あるものと判断された。先に検出された西側をS I 06A、東側をS I 06Bとした。また、S I 06Aの覆土中にS I 06Bの溝跡に対応する壁の立ち上がりが観察されないことから、S I 06AがS I 06Bより新しい。

S I 06A 竪穴の東側は斜面の下方となる。このため、地山を掘り込んでいない東側のプランは不明である。壁が検出された西側の平面形は隅丸矩形を呈する。北東-南西方向の辺の長さは3.1m。北西-南東方向の長さは、後述する長楕円形のピットを含めると推定2.8mである。この場合の推定床面積は9.3㎡程である。

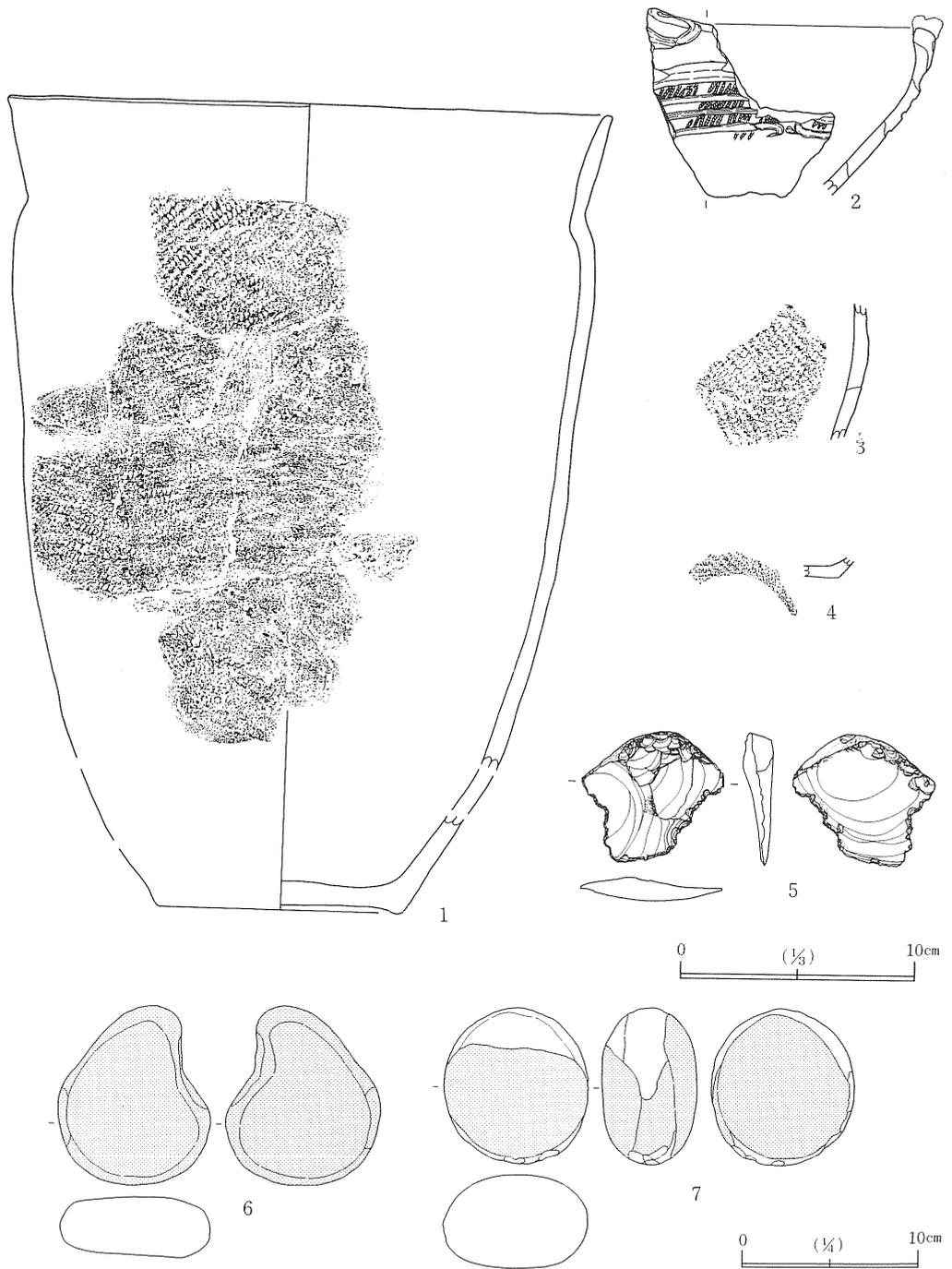
西側に遺存する壁は25~40cmで、ほぼ垂直に立ち上がるが、床面側が深くえぐられた部分もある。壁溝は認められない。床面は、土層の観察から遺構検出当初に確認した焼土面であったと考えられるが、この面は黒色土中にあり、全体に柔らかく、踏みしまった状態は観察されなかった。また床全体が傾斜しているが、西側の傾斜はゆるく、東側ほどきつくなる。覆土は4層に分けられる。

炉は床面中央東寄りに設けられた地床炉である。焼土が30cm前後の円形に広がる。掘り込みは認められない。ピットは床面下のIV層上面で検出した。竪穴内外合わせて19個ある。主柱穴は不明であるがP 3~P 13は壁柱穴であり、近接して壁際に並ぶ。径20cm前後の円形のものが多いが、長径20~30cm・短径20cm前後の楕円形のものもある。深さは10~40cmで、平面形の大きさのわりには深くしっかりしたものが多い。なお、P 4内からは第8図2・6・7の遺物がピットいっぱい詰められた状態で出土している。このため、P 4は壁柱穴とは別の性格を持つものとして考えるべきかもしれない。P 14~P 19は屋外柱穴であろうか。径25cm前後のほぼ円形で、深さは10~20cmである。P 1は65×32cm、P 2は48×30cmの楕円形を呈するピットである。住居平面プランの東辺にほぼ平行して並ぶ。このようなピットは従来出入口施設に伴うものと考えられている。深さはP 1で25cm。P 2は17cmで、底面には径15cm、深さ9cmのピットがある。またP 2には重複があり、ほぼ直角に交わっている古いピットは45×24cmの楕円形で、深さ9cmである。

S I 06B 床面下のIV層上面で検出した半円を描く溝跡は、S I 06Aの西壁から東に70cmほど



第7圖 S 106



番号	出土地区	層位	器種・部位	特徴	番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
1	S106	床直	深鉢 口縁部	4本の平行沈線による縄文帯	5	S106	フク土	不定形	5.7	7.0	1.2	30.0	頁岩
2	S106	P内	深鉢 体部		6	S106	P内	磨石	10.4	8.75	3.5	466	安山岩
3	S106	フク土	深鉢 底部		7	S106	P内	磨石	9.0	8.2	5.4	583	安山岩
4	S106	フク土	鉢										

第8図 遺構内出土遺物(1)S106

寄っている。上面幅15cm、底面幅5cm、長さ4.3mであり、S I 06 Aで遺存した壁よりも北東側に長い。半円から推定される直径は2.9mほどである。溝の途中に3個のピットがあり、位置的な対応から、溝とほぼ同時の一連の作業で掘られたものと考えられる。ピット（P 20～P 22）は径12～25cmの円形で、深さ10～25cmである。なお、溝の覆土は1層で、固くしまっており埋められたものである。床面及び炉は明確ではないが、S I 06 Aの東側床面と同一である可能性がある。

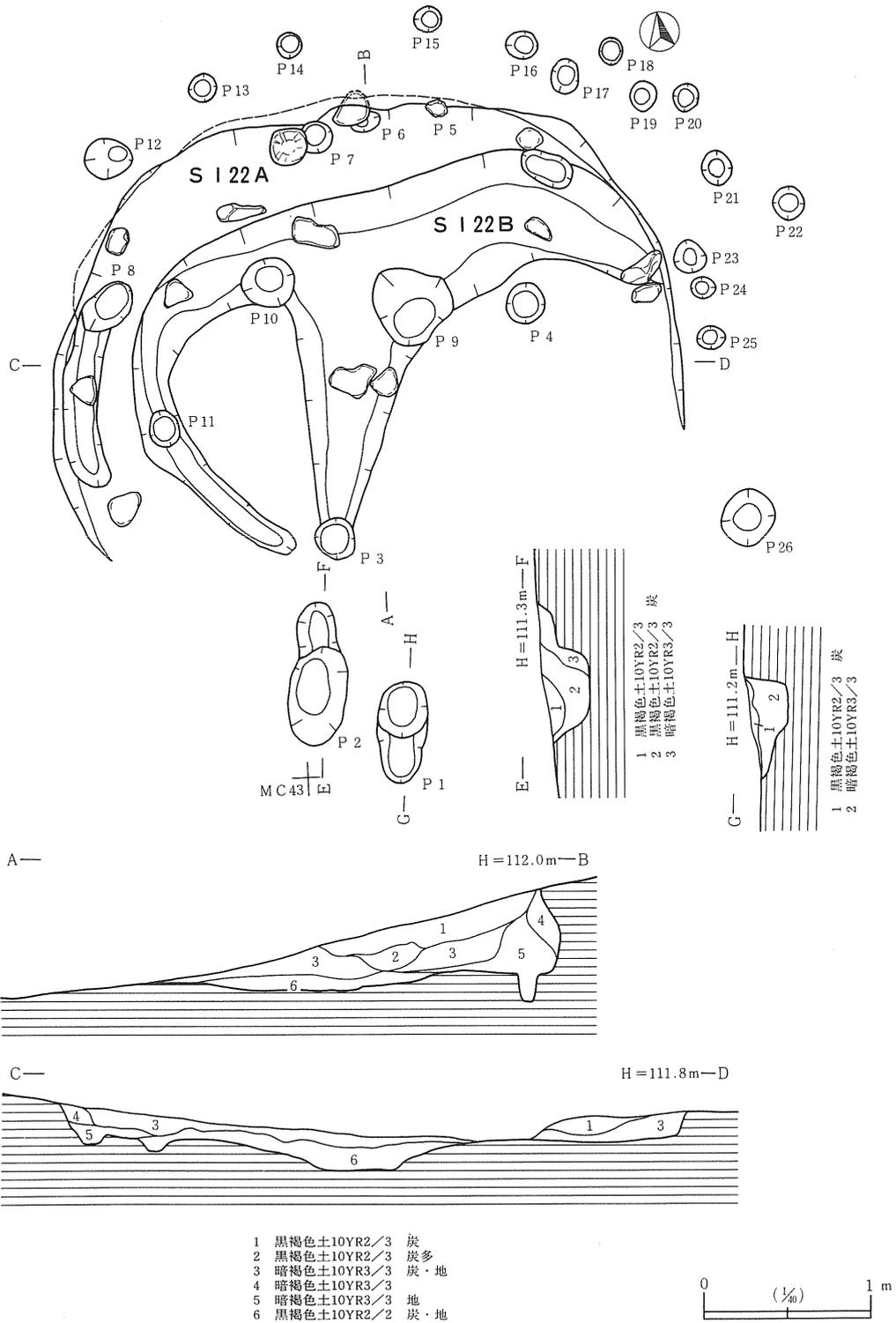
遺構内から出土した遺物は縄文土器 296 g・石器 3点である。1は、ほぼ床面に接して出土した粗製の深鉢形土器である。器形は、頸部で屈曲し口縁部が外傾する特徴がある。縄文はLRである。2はP 4内から出土した深鉢形土器の体部上半から口縁部の破片である。口縁部全体が比厚し、口唇部は丁寧に面取りされる。緩い波状口縁を呈するもので、波頂部に突起があり、この突起を巻くように沈線が施される。体部上半にはLR縄文が施された後に、4本の平行沈線がひかれている。沈線のうち最下線は反転しており、上の沈線につながって行く可能性がある。3は覆土中から出土した。粗製の深鉢形土器の体部破片で、縄文はRLである。胎土が1に類似している。1～3はそれぞれの特徴から縄文時代後期中葉に位置付けられる。4も覆土中から出土した。鉢形土器の底部付近の破片で、体部には細かいRL縄文が施されている。器面の調整が丁寧であり、晩期のものであろう。5は2次加工のある剥片石器である。2側面に曲線的な加工痕が認められる。また、剥片の末端部には連続する微小剥離痕が残る。6・7は磨石である。

#### S I 22（第9・10図）

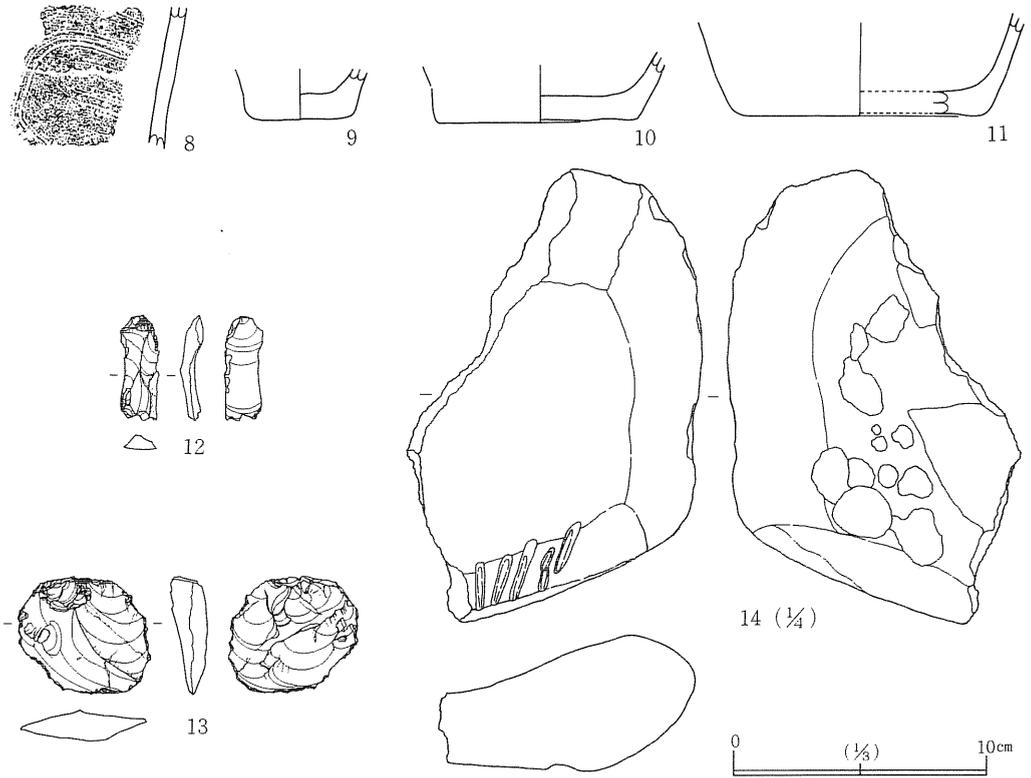
A区西端のMB・MC 43・44グリッドに位置する。IV層上面で黒色土のプランが検出された。地山面が南向きに緩く傾斜する部分にあたり、地山を掘り込んでいない南側の壁は遺存しない。また、床面の精査の結果、壁の内側で東寄りに壁溝とは別の溝跡が検出された。このことから、この竪穴住居跡にも2時期あることが判った。検出当初の竪穴住居跡がS I 22 A、内側に検出した溝跡を伴う竪穴住居跡がS I 22 Bである。また、S I 22 Aの覆土中にS I 22 Bの壁の立ち上がりが認められなかったことから、S I 22 Aが新しいものと判断した。

S I 22 A 平面形は、北側がやや直線的になるものの全体としてほぼ円形を呈するものと考えられる。遺存する壁から推定される竪穴の直径は3.5～3.8mで、推定床面積は10.6m<sup>2</sup>である。壁高は最大52cmである。東側・西側の壁は外傾して立ち上がるが、遺存の良い北側では床面側が深くえぐれ、断面形が下膨れとなっている。壁溝は西側から部分的に検出された。上面幅23cm、底面幅10cm、長さ1m程である。床面は、ほぼ平坦であるが北側が僅かに低くなる。南側の床面は堅くしまっているが、北側はやや柔らかい。覆土は5層に分けられる。炉は検出されなかった。

ピットはS I 22 Bも含めて、竪穴内外合わせて26個検出した。配置の点でP 4・P 10が支柱穴と考えられる。径25cm前後の円形で、床からの深さは27・15cmである。P 5～P 8は壁際のピット



第9図 S I 22



番号	出土地区	層位	器種・部位	特徴	番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
8	S I 22+M B 42	フク土+II	深鉢 体部		12	S I 22	フク土	微小剥離	4.7	5.2	1.0	28.0	頁岩
9	S I 22	床直	鉢 底部		13	S I 22	フク土	微小剥離	4.2	1.55	0.95	4.0	頁岩
10	S I 22	床直	深鉢 底部		14	S I 22	フク土	石	23.8	15.4	7.3	2,509	岩
11	S I 22	床直	深鉢 底部										

第10図 遺構内出土遺物(2) S I 22

トで径20cm前後の円形のもの、20×35cmの楕円形のものがある。深さは10～16cmである。

P 12～P 26は屋外で検出された。部分的にはS I 22 Bに対応するものも含まれている可能性がある。15～32cmの円形を呈し、深さ12～50cmである。全体が堅穴を取り囲むように配置されているが、P 18～P 22はP 15～17・23～25ラインよりも一回り大きい位置にずれている。P 1・P 2の平面形は楕円形である。P 1は85×37cm。深さは12cmであるが、南側が一段深く更に20cmほど掘られている。P 2は62×30cm。深さは16cmであるが、北側が8cmほど深い。P 1・2は堅穴の南辺の推定位置よりもやや外側にほぼ平行に並んでおり、S I 06同様に出入り口に関連する施設と考えられる。南側の壁が検出されていないが、遺存する壁から推定される堅穴のプランからは、堅穴の外側に取り付く可能性がある。

S I 22 B 部分的に残る溝跡の東側に緩くくぼむ部分があることから、楕円形ないしは略方形の平面形が予想される。東西の長さが3.2m程である。東側の壁はS I 22 Aと共通するが、北西側はS I 22 Aを作る際に削平されたものと考えられる。壁溝は、西側に部分的にあり、北側ほど溝

内の底面レベルが高くなっている。上面幅18cm、底面幅11cm、長さ1.7mである。床面は北側で緩くくぼみ、溝跡の底面と同じレベルである。また、中央部が溝状にくぼんでいる。幅25～70cm、長さ1.4mほどであり、底面のレベルは北側の低い床面と同じである。確認状態からP3・9・11は本遺構に伴うものと考えられる。径20～40cm前後の円形で、深さ10～21cmである。

遺物は縄文土器66g、石器3点が出土した。8は粗製深鉢形土器の体部破片である。覆土中から出土した。櫛歯状の工具で曲線的な文様を施している。9～11は北寄りの床付近より出土した。鉢・深鉢形土器の底部である。12・13は微小剝離痕のある剥片である。14は石皿の破片である。

## (2) 土坑

A区南半で6基検出された。確認面からの深さが深いものと浅いものがある。第2節で柱穴としたものの中には、縄文時代の土坑とすべきものを含む可能性があるが、地山まで削平された部分では識別できなかった。

### SK30 (第11図)

ME・MF41グリッドで検出された。平面形は径70cm前後のほぼ円形に近い。深さは20cmで、底面には地山中の礫が露出し凹凸があり、全体が僅かにくぼむ。壁は緩く外傾する。覆土は1層であるが、IIb層に由来する自然堆積層と考えられる。遺物は出土しなかった。

### SK31 (第11・12図)

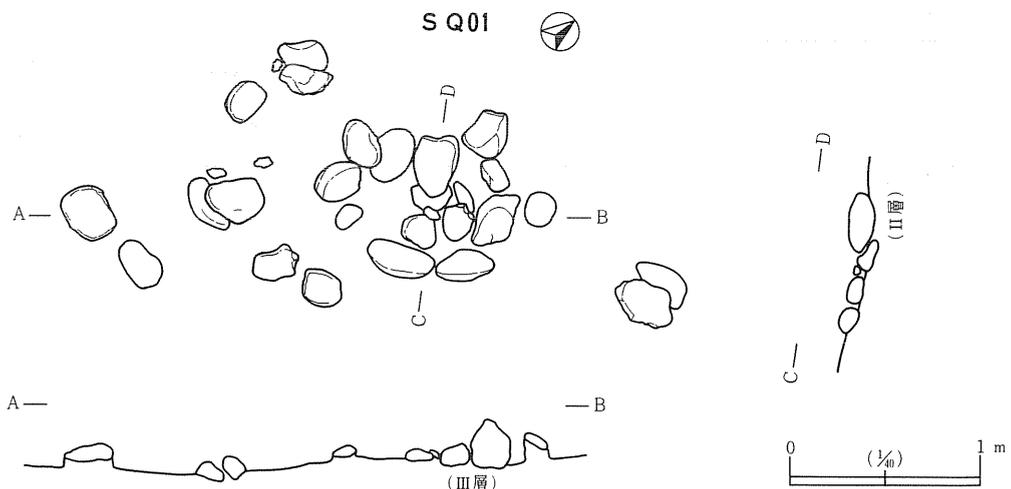
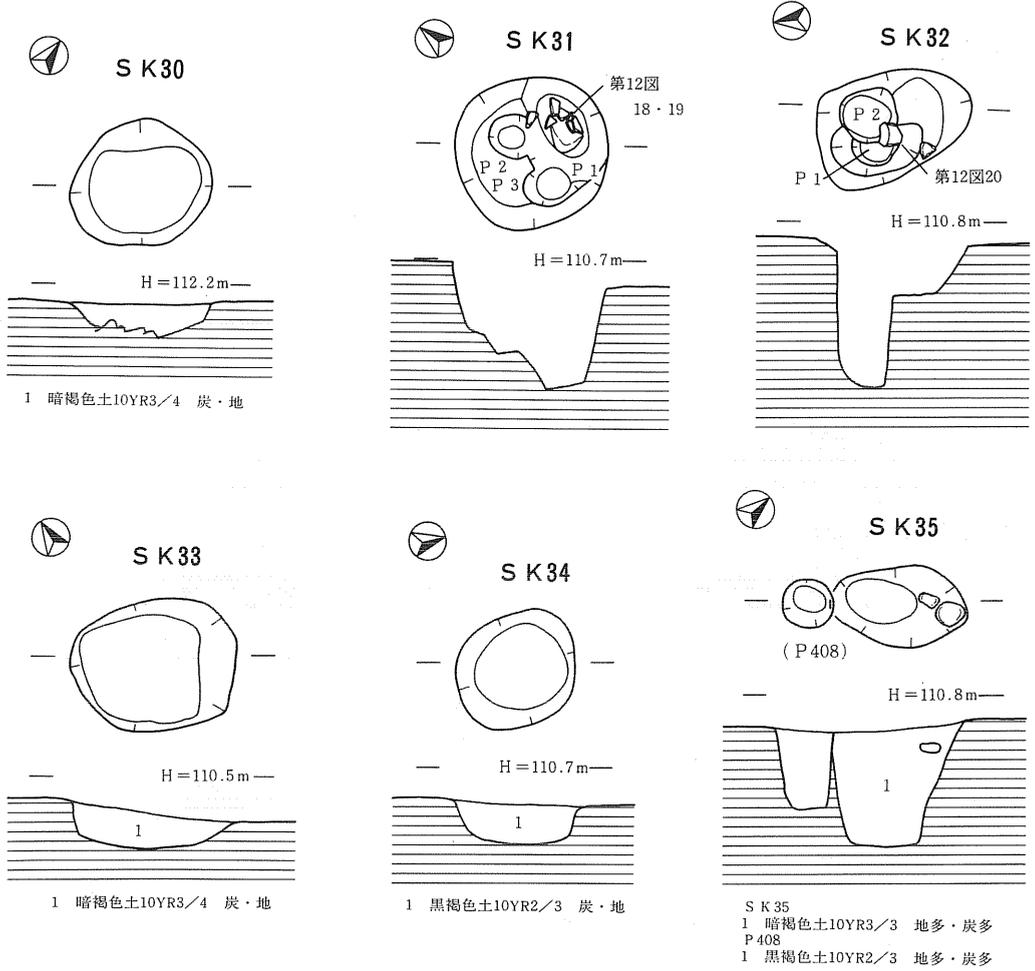
MD41グリッドで検出された。平面形は確認面での直径80cmの円形を呈する。深さは40cm。壁は急角度に立ち上がっている。底面には3個のピット(P1～P3)がある。ピットの開口部径はP1で60×40cm、P2・3で25cm前後である。土坑確認面からの深さは、南東側のP1が最も深く69cm、またP2で50cm、P3で51cmである。土層図は作成できなかったが、全体に地山粒子の混入が多く埋め戻された状態であった。また、P1部分の上部に遺物が多く混入していた。

遺構内から出土した遺物は縄文土器107gである。土器は3点を図示したが18・19は同一個体である。17～19は粗製深鉢形土器の体部破片である。共に断面形は直線的であり、僅かに外傾するところがある。17は無文、18・19の縄文はLRである。

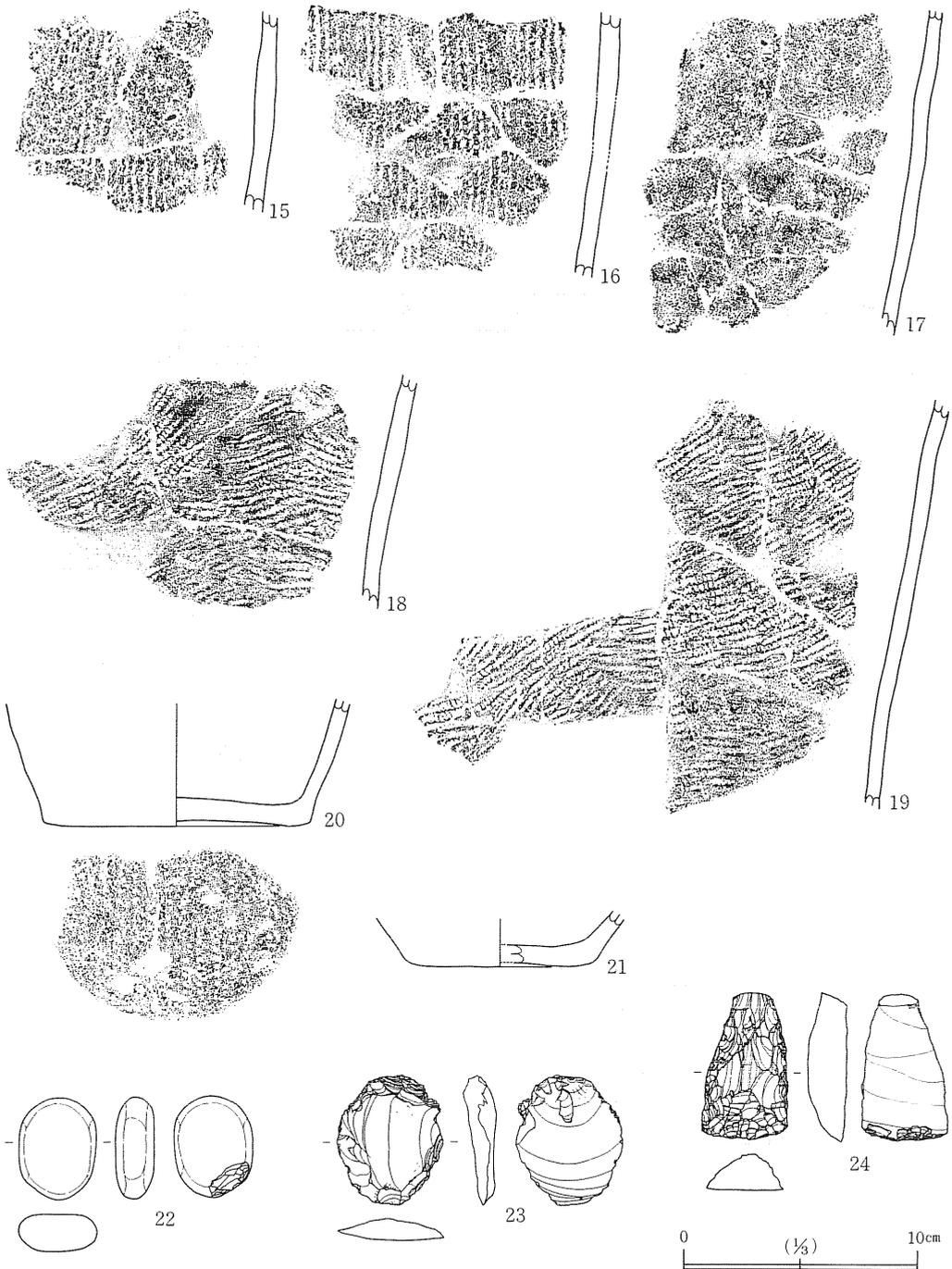
### SK32 (第11・12図)

MD41グリッドで検出された。平面形は長径83×短径56cmの楕円形を呈する。長軸方位はN-15°-W。深さは26cmである。底面には切り合いのある2個のピット(P1・2)があり、P1がP2を切っている。P1は径30cm、土坑確認面からの深さ80cm。P2は径24cm、深さ53cmである。土層図は作成できなかった。

出土した遺物は縄文土器60gと石製品1点である。20・21は深鉢形土器の底部である。20の底面には網代痕が明瞭である。22は瑪瑙製で全面に擦痕が著しい。



第11図 S K 30~35・S Q 01



番号	出土地区	層位	器種・部位	特徴
15	S K 35	フク土	深鉢 体部	無文
16	S K 35	フク土	15と同一固体	
17	S K 31	フク土	深鉢 体部	
18	S K 31	フク土	深鉢 体部	
19	S K 31	フク土	18と同一固体	
20	S X 32	フク土	深鉢 底部	

番号	出土地区	層位	器種・部位	特徴				
21	S X 32	フク土	深鉢 底部					
番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
22	S K 32	フク土	石製品	4.4	3.3	1.6	38.0	メノウ
23	S K P 48	フク土	微小刺維	5.6	4.1	1.4	29.0	ウツロ
24	S X 27	上部	石 鏡	6.4	3.7	1.6	38.0	頁岩

第12図 遺構内出土遺物(3) S K 31・32・35・S X 27

## S K 33 (第11図)

M C 40グリッドで検出された。平面形は楕円形を呈する。長径88×短径70cm、確認面からの深さは26cmである。底面はほぼ平坦である。壁は南側では緩く外傾するが、北側はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は1層で、S K 30と同様である。遺物は出土しなかった。

## S K 34 (第11図)

M C 41グリッドで検出された。平面形は円形に近く径60cm前後である。確認面からの深さは24cmである。底面は僅かにくぼみ、西側がやや角張っている。壁は西側で急角度に、東側で緩やかに立ち上がる。覆土は1層である。遺物は出土しなかった。

## S K 35 (第11・12図)

M D・M E 39グリッドのⅡ b層掘り下げ時点で、縄文土器片の集中する部分があった。遺構はこの下にあたり、Ⅲ層上面で確認されたが、南側のピットに切られている。平面形は長径70×短径34cmの楕円形を呈する。長軸方位はN-52°-Eである。深さ78cmで、底面は平坦である。壁は急角度で立ち上がり、東側は開口部にむけて外傾する。土層図は作成できなかったが、覆土は暗褐色を呈し、炭化物の混入が顕著であった。

遺物は縄文土器145gが出土した。15・16は同一個体である。深鉢形土器の体部破片で、L撚糸文が施されている。中期後葉～後期前葉に位置付けられる土器である。

## (3) ピット (付図2)

A区南端のピット群には縄文時代の遺構である可能性があるものも含まれている。この内、Ⅱ b層中から掘り込まれる事を確認できたピットが2基ある。S K P 36・48である。前者はM E 40、後者はM D 40グリッドで検出された。ともに径30cm前後で、Ⅳ層上面からの深さはS K P 36で47cm、S K P 48で35cmである。またS K P 48の覆土中からは微小剝離痕のある剥片が1点出土している。なお、S K P 36からは縄文土器破片が1点出土しているが摩滅著しく図示できなかった。

## (4) 組石遺構

## S Q 01 (第11図)

B区東側の高台の上、L S 51・52グリッドで検出された。Ⅱ層中にあり、礫群の底面はⅢ層上面であるが、Ⅱ層の土層観察でも掘り込みは確認できなかった。周囲に少量の縄文土器・剥片の散布があることから縄文時代の遺構と考えている。なお、図示した礫群の状態は一部範囲確認調査のトレンチによって抜き取られた礫もあり、完全ではない。

北側にも礫が続いているが、中心となるのは東よりの組まれた部分である。20～40cmの円礫16個が組まれており、北側の縁にある5個の礫は立てられている。この部分の平面形は北西-南東

90cm、北東—南西125cmの略方形を呈する。礫の間などからの出土遺物はない。

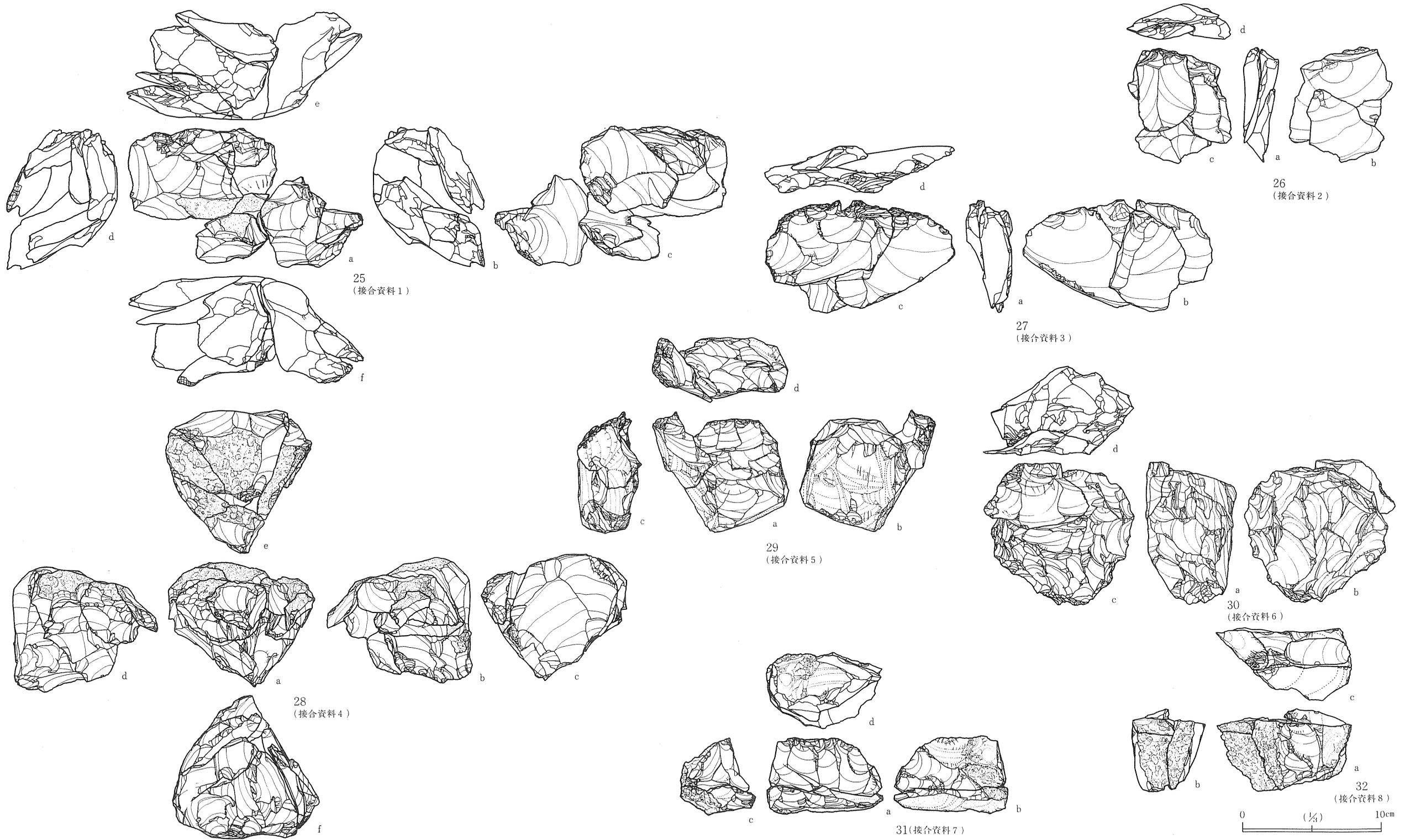
#### (5) 剥片集中出土場所

S X 27 (付図1・第12・13図)

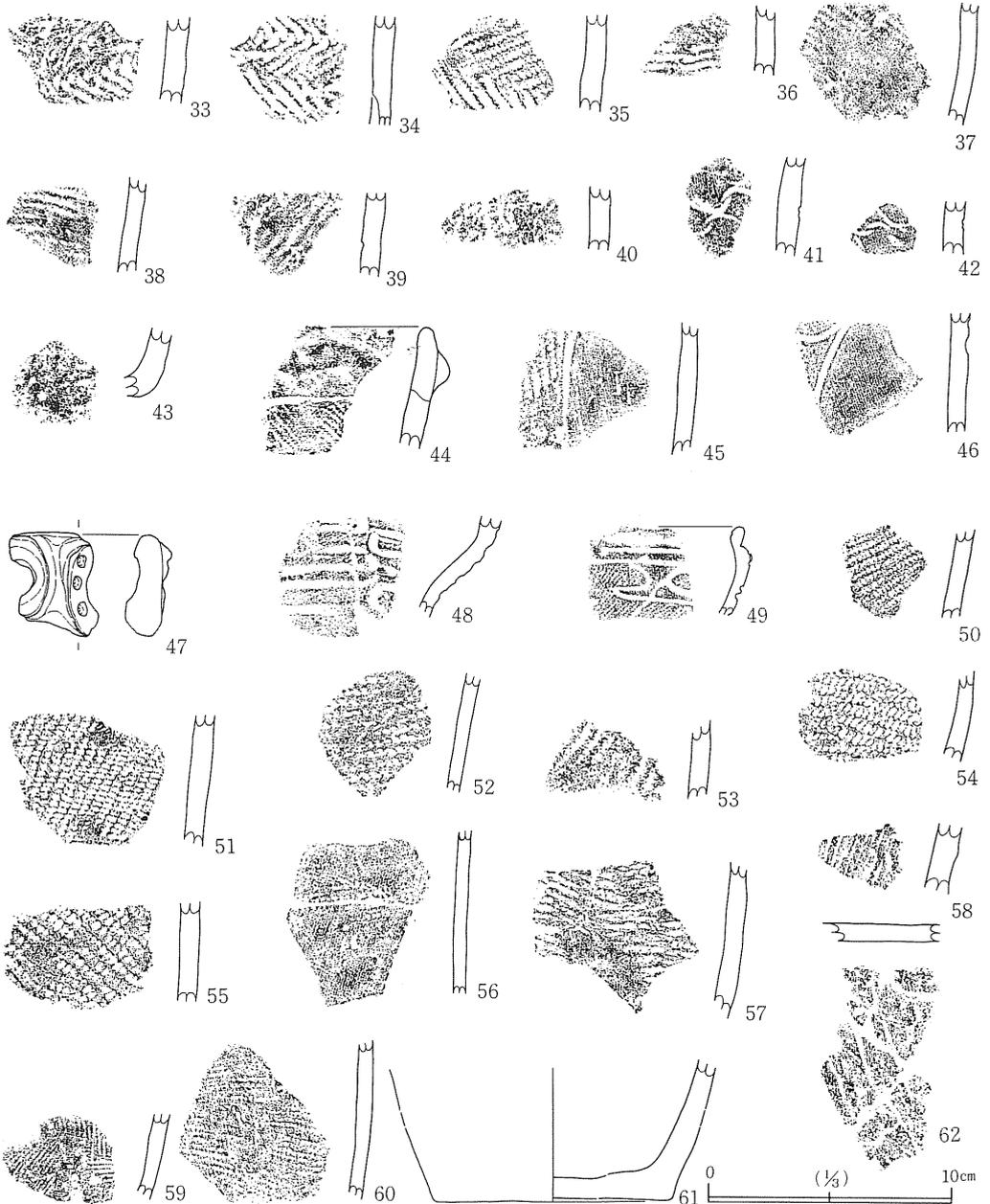
B区東側の高台から西側に下る斜面のⅡ・Ⅲ層中から、多くの剥片が出土した(付図1)。L T・M A 54・55の4グリッドほどの広がりである。調査区全体の遺物散布状況に照らし、遺物の集中が著しいことから遺構と判断した。4グリッドから出土した剥片(石核を少量含む)の数は144点である。土器は出土していないが、L T 54グリッドⅡ層から石籠が1点出土している(第12図24)。

周辺グリッドを含めて、剥片および石核の中には接合するものがある。接合資料は全部で23点ある。2つの剥片間での接合9例、3つの剥片間での接合6例、石核と1つの剥片の接合4例、石核と2つの剥片間の接合2例、8つの剥片間の接合1例、石核と8つの剥片間の接合1例である。このうち、多く接合したものの8例を図示した(第13図)。

接合資料1は、剥片集中地点であるM A 54・55グリッド出土剥片8点の接合である。剥片は幅8cm前後、長さ5cm前後の横長剥片が多い。打点の向きは一定ではなく、石核を大きく回転させながら剥ぎ取ったものと考えられる。接合資料2は、M A 54グリッド出土の3剥片の接合である。接合した剥片は長さ6cm前後、幅4cm前後の剥片2点、幅8.4cm、長さ5.3cmの剥片1点である。接合資料3は、M A 54・53グリッド出土の3点の接合である。接合した剥片の大きさは、幅9cm前後、長さ5.5cm前後の剥片が2点である。もう1点は折れているが、長さ6.5cm、残存幅4.7cmである。なお接合資料1～3は、同一の母岩である。接合資料4は、M A 54出土の石核にM A 54・55グリッド出土の剥片が8点接合している。接合した剥片には長さ6～8cm、幅4cm前後のものが多い。接合資料4の剥片剥離は、接合資料1が頻繁に打面転移を行っているのに対し、1つの打面から連続して剥片剥離作業を行っており、打面転移が少ない。接合資料5は、M A 53グリッド出土の石核に、同グリッド出土の剥片が接合している。剥片はa面左側からの加撃によって剥ぎ取られたものであるが、幅5.5cm、長さ4.5cmで厚さ2cmと分厚い。接合資料6は、L S 52グリッド出土の石核と剥片の接合である。剥片は幅7.5cm、長さ4.6cmの横長である。石核からの剥片剥離方向はおおよそ3方向認められ、3方向とも打面を90°転移している。接合資料7は、M A 54グリッド出土の石核と剥片との接合である。剥片は自然面を大きく残し、分厚い。石核からは、a面上側を打面とする小型の縦長剥片が連続して、剥ぎ取られている。接合資料8は、M A 54グリッドから出土した4点の接合である。長さ4cm前後、幅2cm前後の剥片が石核に接合している。また石核はc面右側からの加撃によって二つに割れている。



第13図 遺構内出土遺物(4)S X 27接合資料



番号	出土地区	層位	器種・部位	特徴	番号	出土地区	層位	器種・部位	特徴
33	M F 43	II	深鉢 体部	羽状縄文 胎土に繊維含む	48	M E 39	III	深鉢 頸部	反転して連結する平行沈線
34	M E 43	II	深鉢 体部	羽状縄文 胎土に繊維含む	49	M F 41	III	鉢 胴体上部	縄文はL R
35	M F 48	II	深鉢 体部	羽状縄文 胎土に繊維含む	50	M E 39	III	深鉢 体部	縄文はR L
36	M B 54	II	深鉢 体部	縄文はL R 胎土に繊維含む	51	M E 39	III	深鉢 体部	縄文はR L R
37	M B 54	II	深鉢 体部	羽状縄文 胎土に繊維含む	52	M E 39	III	深鉢 体部	縄文はL R R
38	M B 54	II	深鉢 体部	縄文はR L 胎土に繊維含む	53	M D 40	III	深鉢 体部	縄文はL R
39	M B 54	II	深鉢 体部	縄文はR L 胎土に繊維含む	54	M F 44	I	深鉢 体部	縄文はL R
40	M E 48	II	深鉢 体部	胎土に繊維含む	55	M E 39	III	深鉢 体部	縄文はL R
41	M B 54	II	深鉢 体部	連結S 胎土に繊維含む	56	M D 41	III	深鉢 体部	縄文はL R
42	M B 54	II	深鉢 体部	縄文はL R	57	M E 39	III	深鉢 体部	縄文はR
43	M B 54	II	深鉢 底部	胎土に繊維含む	58	M E 39	III	深鉢 体部	縄文はR 燃糸文
44	L T 51	II	深鉢 口縁部	縄文はL R	59	M F 40	I・III	深鉢 体部	縄文はL R・R L
45	M E 39	III	深鉢 体部	縄文はR L	60	M D 41	III	深鉢 体部	縄文はR L
46	M E 39	III	深鉢 体部		61	M E 39	II	深鉢 底部	
47	M D 39	II	深鉢 突起	円形突起	62	M E 39	I	深鉢 底部	

第14図 遺構外出土遺物(1) 土器

## 2 遺構外の出土遺物

### (1) 縄文土器 (第14図)

33～43は胎土に繊維を含んでおり前期に位置付けられる。いずれも深鉢形土器の体部破片で、43は底部に近い。33～35・37は羽状縄文が施され、33・34の原体は結束されている。36の縄文はL R、38・39はR Lである。41・42は連結S字状文が施されている。44は中期前葉に位置付けられる。口縁部の直下に幅の広い波状の隆帯をめぐらし、その下にL R縄文が施される。45～47は中期末葉～後期初頭に位置付けられる。45・46は沈線と磨消縄文による文様が施される。器面は丁寧に仕上げられている。47は土器の把手であろう。図の上方が土器の口縁部に対応するものと考えられ、隆帯によって円を描くように作られている。円形の刺突が施される面が正面となるかもしれない。48は深鉢形土器の体部上半と考えられる。底部から直線的に立ち上り、体部上半で屈曲して丸味を帯び、口縁部が更に外傾する器形となるものであろう。第8図2の土器と類似し、縄文施文部に平行する沈線をひき、平行する縄文帯を表出している。後期中葉に位置付けられる。49は鉢形土器の体部上半から口縁部で、晩期に位置付けられる。直立する口縁部下端と体部上端には沈線が施される。2本の沈線間には小さな瘤が付され、その瘤からさらに1本の沈線がひかされている。体上半には磨消縄文による文様が表出されている。54～60は縄文だけの土器である。また61・62は底部であり、62には網代痕が見られる。いずれも時期の特定は困難であるが、50・51は胎土や器面の状態が45・46と類似しており中期末～後期初頭のものである可能性がある。

### (2) 石器

#### 石錐 (第15図63・64)

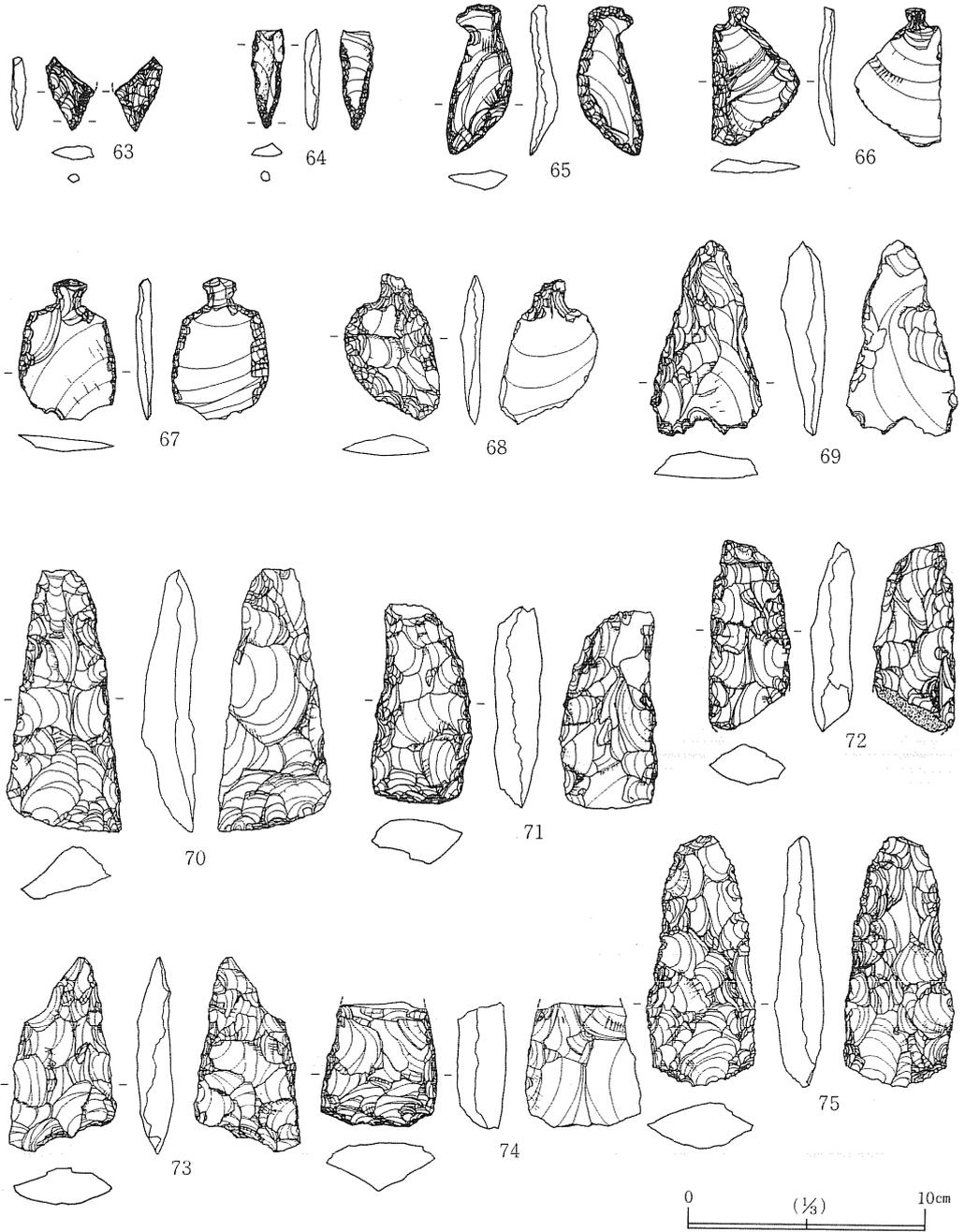
2点出土した。63は両面を加工している。左右対象に整形したのと考えられるがつまみ部側を欠損している。錐部の断面形が菱形を呈する。64は幅の狭い剥片の打点側に錐部を作出している。錐部は使用により摩滅しており、断面形は丸い。

#### 石匙 (第15図65～68)

4点出土した。すべて縦型の石匙である。66～68は縦長の剥片を素材としているが、65は横長の剥片を素材としている。67は下端を欠損しているため不明であるが、いずれも剥片の全周に2次加工を施している。2次加工は65・67で両面に、66・68では片面にのみ施される。

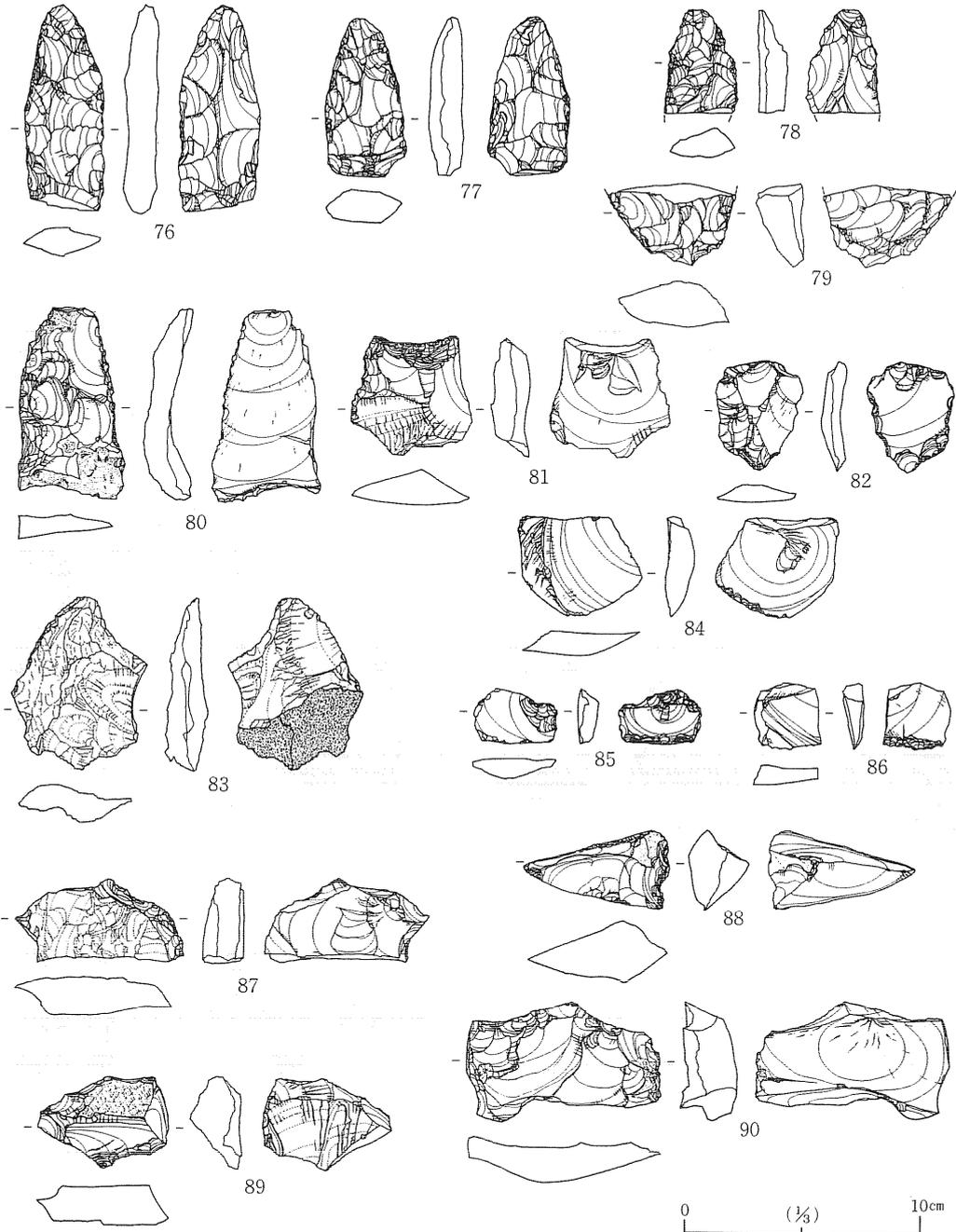
#### 石鏡 (第15図69～75・第20図111)

8点出土した。111はS Q02出土である。69は片面加工で主要剝離面を残し、111は半両面加工であるが、他は両面加工である。側面から見た刃部の形態は、75が両刃であり、他は片刃である。なお、72は全体に火熱を受けている。また、73は基部・刃部とも欠損した後に再調整している。



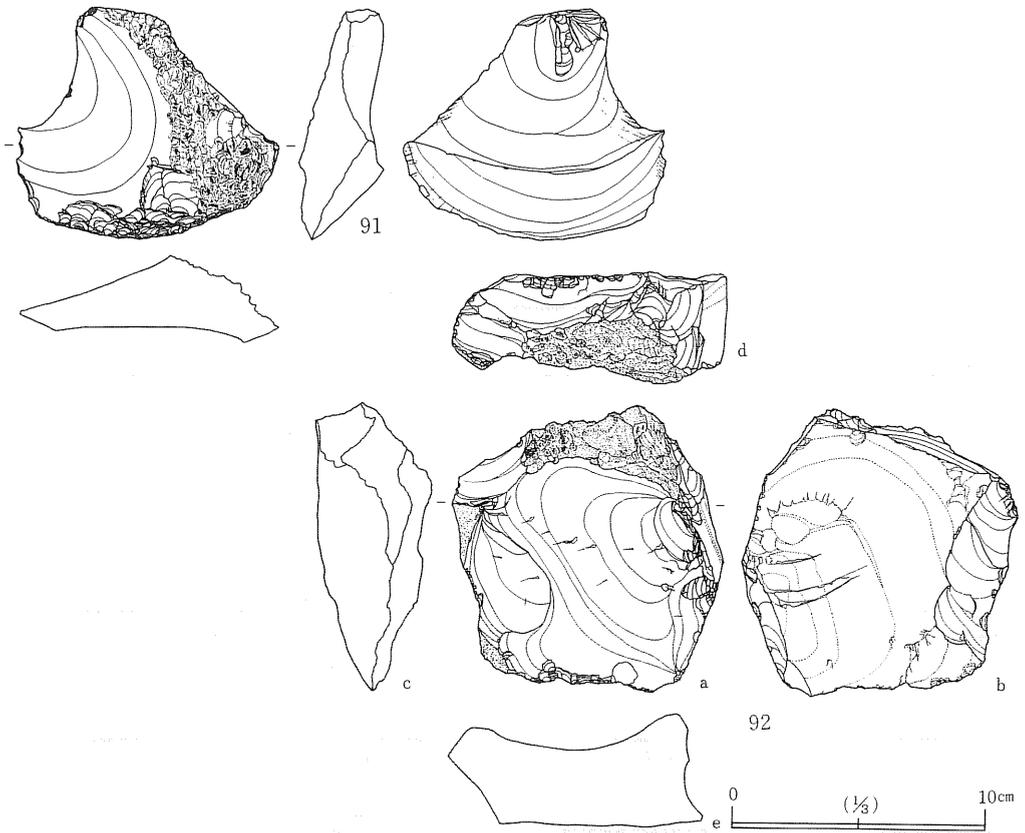
番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石	材	番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石	材
63	MC42	II	石	3.1	2.0	0.6	2.0	真	70	MC54	II	石	11.2	4.8	2.4	91.0	真	岩	
64	MB54	II	石	4.3	1.4	0.7	3.0	真	71	MF40	II	石	8.5	4.25	2.1	76.0	真	岩	
65	MG57	I	石	6.3	2.8	0.6	10.0	真	72	MD55	II	石	8.0	3.5	1.8	41.0	真	岩	
66	ME39	II	石	5.9	3.6	0.7	11.0	真	73	MF44	II	石	8.4	4.6	1.6	44.0	真	岩	
67	ME41	盛土	石	6.0	4.0	0.8	13.0	真	74	MF54	III	石	5.3	4.9	2.1	59.0	真	岩	
68	ME45	II	石	6.2	4.0	0.9	18.0	真	75	MA53	II b	石	10.7	4.6	2.05	85.0	真	岩	
69	MC42	I	石	8.3	4.2	1.9	53.0	真											

第15図 遺構外出土遺物(2)石器



番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石質
76	MF54	II	石楯	8.8	3.4	1.5	40.0	頁岩	84	MF42	III	不定形	4.3	5.2	1.3	22.0	頁岩
77	MF54	II	石楯	6.7	3.5	1.45	34.0	頁岩	85	MG43	III	不定形	2.3	3.5	0.8	7.0	頁岩
78	ME54	I	石楯	4.4	3.15	1.3	17.0	頁岩	86	ME39	III	不定形	2.8	2.9	0.95	8.0	頁岩
79	MB55	II	石楯	3.5	5.4	2.1	33.0	頁岩	87	MD55	II	不定形	3.55	7.15	1.8	51.0	頁岩
80	MF45	II	不定形	8.2	5.3	1.95	52.0	頁岩	88	MD41	III	不定形	6.2	3.4	2.2	32.0	頁岩
81	MH46	I	不定形	5.1	5.1	1.6	36.0	頁岩	89	MF43	I	不定形	4.0	5.6	2.3	40.0	頁岩
82	MC42	I	不定形	4.7	3.7	1.0	13.0	頁岩	90	ME43	II	不定形	5.0	8.2	2.4	74.0	頁岩
83	MG42	II	不定形	7.3	5.7	1.8	43.0	頁岩									

第16図 遺構外出土遺物(3)石器



番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
91	LR51	II	不定形	9.2	10.4	3.3	179.0	頁岩	92	ME57	I	不定形	11.5	10.8	4.6	465.0	頁岩

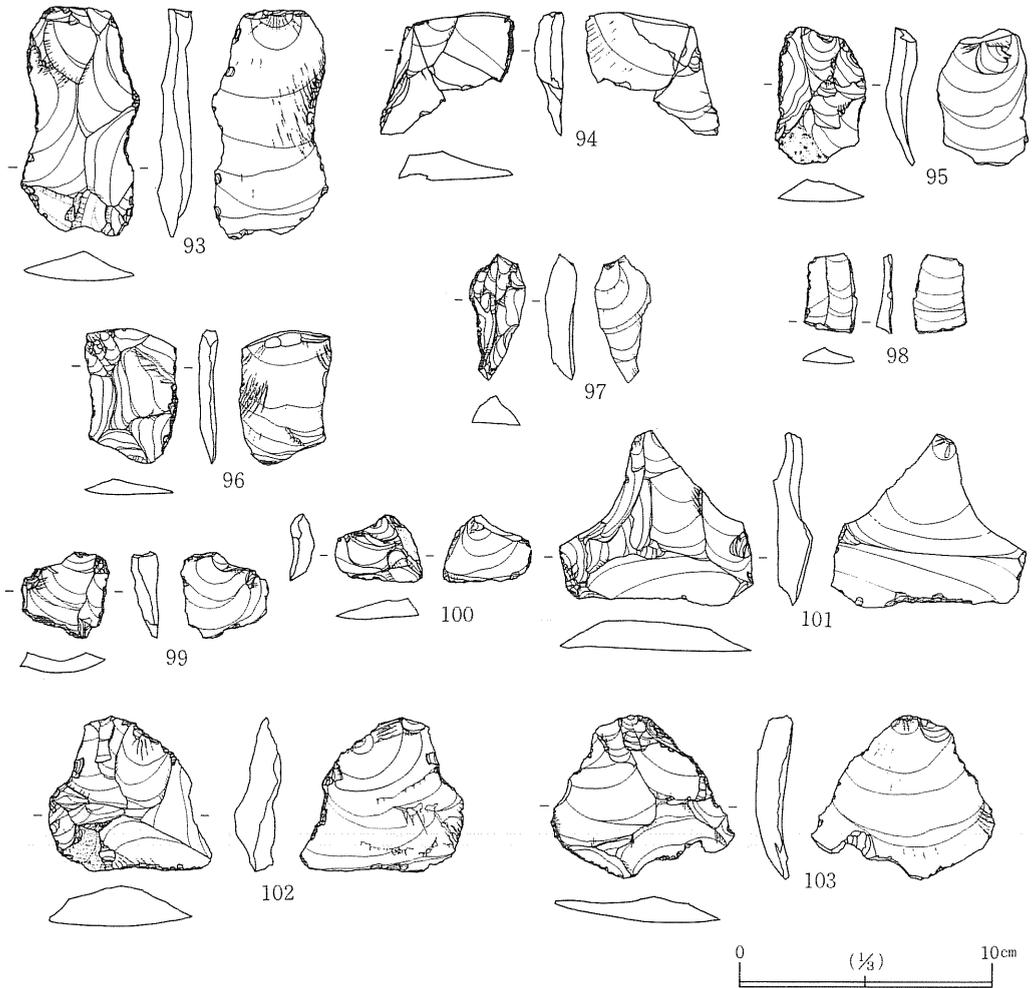
第17図 遺構外出土遺物(4)石器

石槍 (第16図76~79)

4点出土した。76・78は基部を、79は刃部を欠損している。すべて両面に2次加工を施しており、断面形は凸レンズ状を呈している。

不定形石器 (第16図80~90・第17図91・92)

17点出土し、13点を図示した。すべて片面にのみ2次加工を施したものである。80~84は縦長の剥片を素材としている。80・81は側面に2次加工を施し、刃部としたものである。なお81は背面の打面側にも2次加工が施されている。82は剥片の縁面に2次加工を施しており、打痕も背面側からの剥離により取り除かれている。83・84は剥片の縁面に部分的な2次加工を施したものである。85~87は横長の剥片を素材とし、2次加工を施したものである。比較的厚い素材を選んでおり、角度のある刃部となっている。88~90は厚手の素材を選び、剥片の湾曲した部分に2次加工を施したものである。91は大きい剥片を素材としている。弧状を呈する背面末端側の縁面に2次加工を施し、刃部としている。92は転石に近い礫に、粗い剥離を加えて厚みのある方形に形を整え、a面側下端とd面側上端に部分的な2次加工を施している。a面末端の剥離部分は鋭角となるが、d面の剥離部分はほぼ直角である。

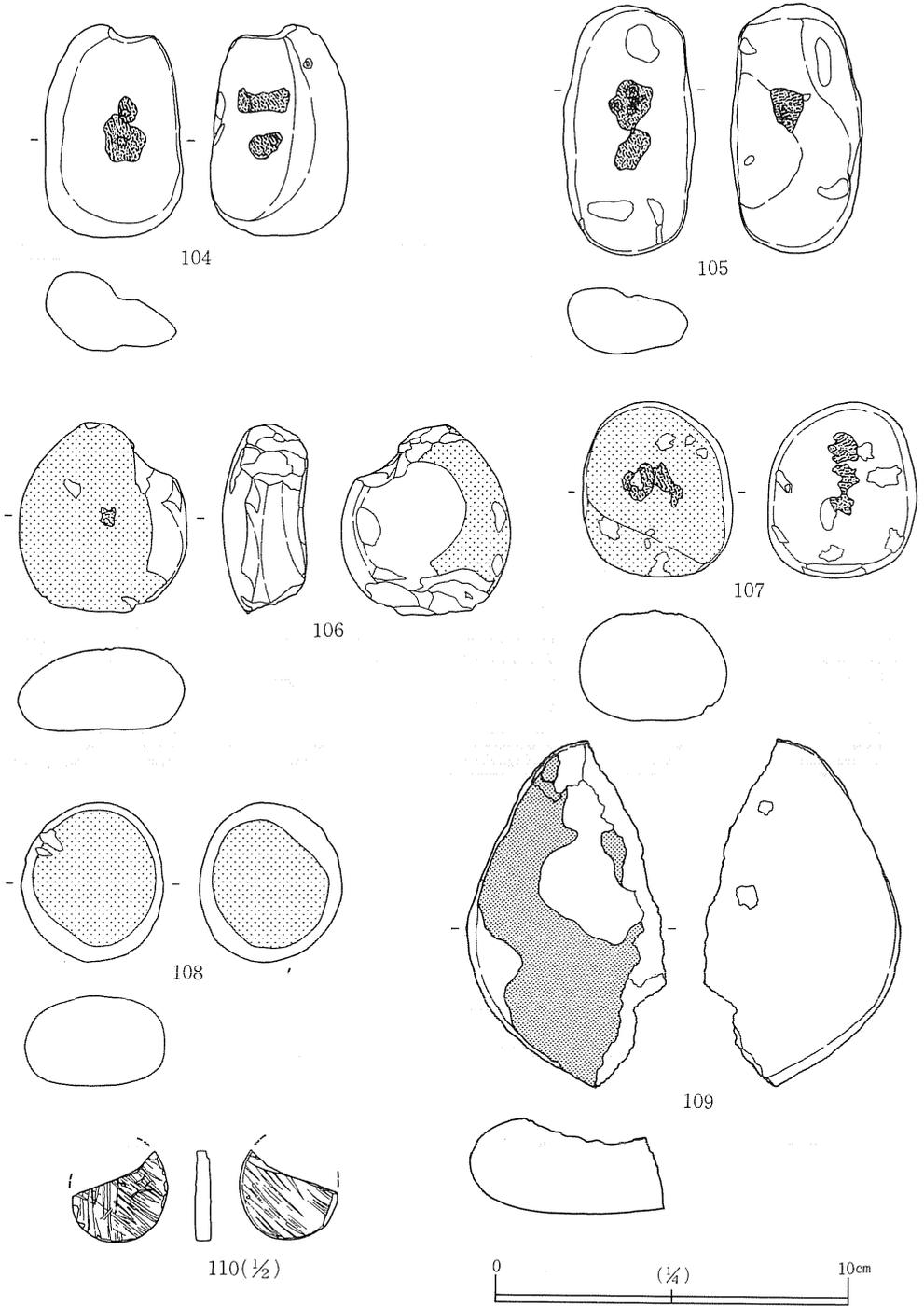


番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
93	MF45	I	微小剥離	9.15	4.65	1.25	45.0	頁岩	99	ME42	II b	微小剥離	3.4	3.5	1.1	8.0	頁岩
94	MD55	I	微小剥離	4.9	5.3	1.2	20.0	頁岩	100	MD41	II	微小剥離	2.8	3.5	0.9	6.0	頁岩
95	LS51	II	微小剥離	5.5	3.5	1.2	17.0	頁岩	101	MD42	III	微小剥離	7.1	7.2	1.65	50.0	頁岩
96	MD55	I	微小剥離	5.4	3.7	0.7	13.0	頁岩	102	MF54	II	微小剥離	6.1	6.5	1.7	42.0	頁岩
97	MH42	I	微小剥離	5.5	2.2	1.1	9.0	頁岩	103	MC42	II	微小剥離	7.0	5.2	1.4	37.0	頁岩
98	ME40	II	微小剥離	3.1	2.1	0.6	4.0	頁岩									

第18図 遺構外出土遺物(5)石器

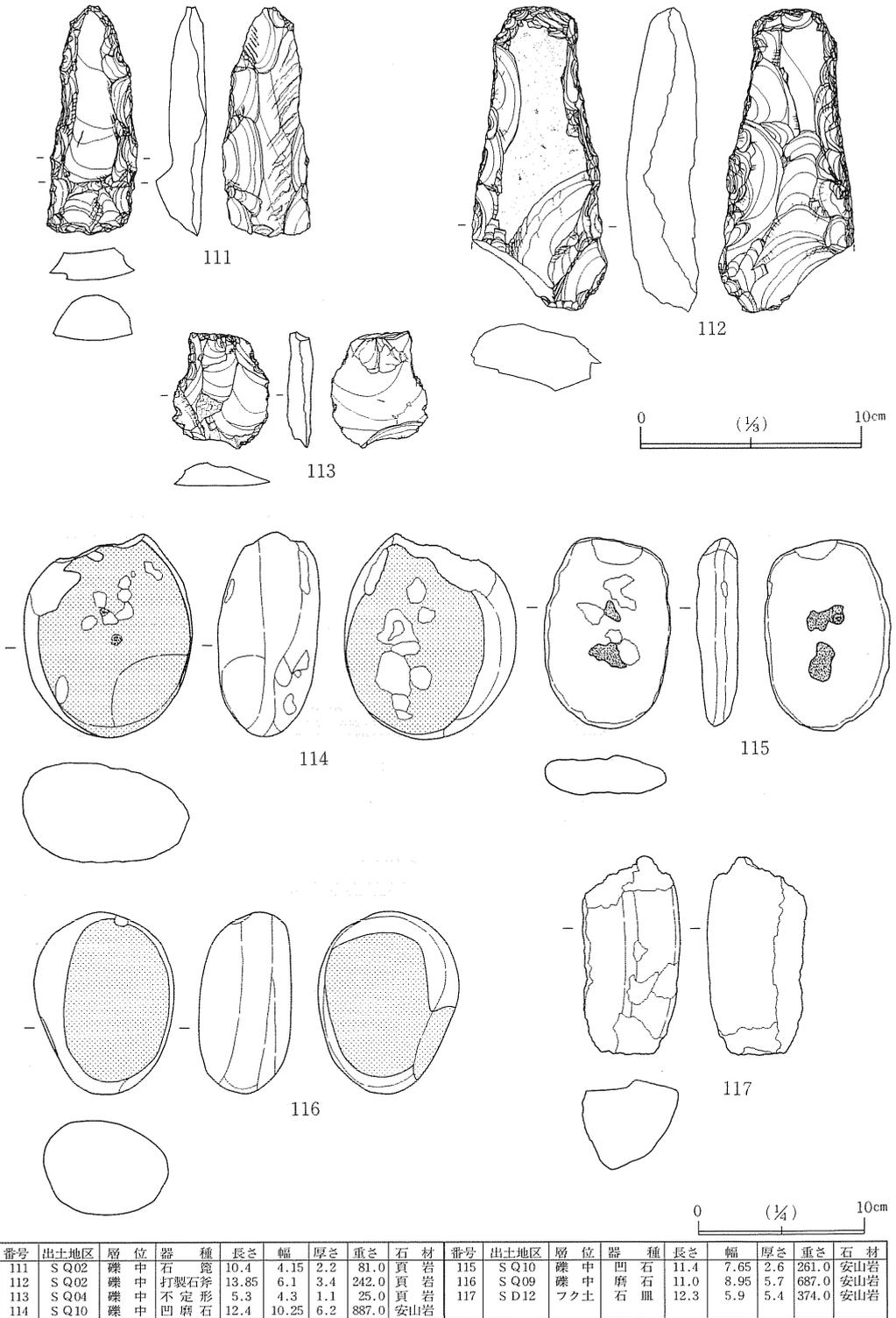
微小剥離痕のある剥片 (第18図93~103)

19点出土し、11点を図示した。93~98は縦長の剥片である。93は背面の両側縁に、94・96は背面の右側縁に、95・97・98は背面の左側縁に剥離痕が認められる。99~103は横長剥片を素材としている。剥離痕は、101で打点と反対側の直線的な縁辺の主要剥離面側に、99・102は背面の側縁の一部と打点の反対側の縁辺の2カ所認められる。また、100・103では背面側の周囲に連続する微小剥離痕が認められる。



番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
104	MF48	Ⅱb	凹石	12.0	7.85	4.6	424.0	安山岩	108	MG51	Ⅲ	磨石	9.0	8.0	5.1	509.0	安山岩
105	MC42	Ⅱ	凹石	14.1	7.5	4.0	550.0	安山岩	109	排土		磨石	19.8	11.0	5.41	319.0	安山岩
106	MF50	Ⅱ	凹磨石	10.75	9.6	4.8	702.0	安山岩	110	MC42	I	石製品	2.55	2.7	4.5	3.0	泥
107	MD42	Ⅱ	凹磨石	9.9	8.45	6.3	698.0	安山岩									

第19図 遺構外出土遺物(6)石器・石製品



第20図 中世～近世の遺構から出土した縄文時代の遺物

### 打製石斧（第20図112）

112はS Q02中より出土した。全体を粗い剝離によって撥形に整形した後、基部側の両側縁は敲打され、平滑にされている。使用により刃部の半分を欠損している。

### 凹石・磨石（第19図104～109・第20図114～116）

114・115はS Q10に、116はSQ09に用いられていた。9個出土したが、凹石3個（104・105・115）、凹石兼磨石3個（106・107・114）、磨石3個（108・109・116）である。凹石では表裏の2面に凹部が認められる。またその凹部は2～3箇所認められるものが多い。また磨石でも両面を磨面とするものが多い。なお、109は火熱を受けており、片面が石皿状にくぼめられている。

### 石皿（第20図117）

S D12の縁から出土した。外堤があることから石皿と判断したが、大部分を欠損しており大きさや形は不明である。硯の陸にあたると考えられる部分は平坦である。

### 石製品（第19図110）

110は薄い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

111は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

112は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

113は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

114は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

115は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

116は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

117は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

118は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

119は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

120は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

121は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

122は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

123は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

124は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

125は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

126は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

127は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

128は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

129は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

130は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

131は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

132は厚い板状の石を円形に整形したもので、一部欠損している。両面に擦痕が著しい。

## 第2節 中世～近世

検出した遺構には削平・盛土による整地地業跡と、石垣状遺構・溝跡、整地された部分に建てられた建物の柱穴、その他に土坑・石敷遺構・集石遺構がある。

遺構内外から出土した遺物には陶磁器・砥石・柱材・礎石がある。

### 1 検出遺構

#### (1) 整地地業

A区には中世から近世期と考えられる建物跡がある。この建物を建てるために斜面の北西側を削り、その土を南東側に盛る整地地業が行われ、敷地を造成している。整地地業はMH47グリッドを頂点として南西のMJ44、南東のMA44を結ぶラインから南側で行われており、およそMB44・MG44・MH42を結ぶ線を境に北側では削平が、南側では盛土が行われている。削平によって生じた段差はMH46グリッドで最大1.8mである。盛土には黒褐色土を基調とするものと、黄褐色の地山土を多く混入したものがある。明瞭に盛土の観察されたME40グリッド付近では最大70cmほどの厚さとなっており、土層の観察から少なくとも2回の盛土地業が行われている。また、削平された所でも、SQ08の南側やSK19の南東側のように、溝の縁石の出土状況から黒色土を薄く盛って、生活面としたと考えられる所もある。整地された範囲は全体が略方形を呈するものと考えられるが、北東辺の中央は沢の開口部にあたり、SQ08が取り付け

くために張り出している。この整地面の広がりには南東側は石垣状遺構までの約32m、南西側は調査部分が約26mで、調査区外にも続いている。

盛土に2時期確認されたように、この整地地業にも変遷がある。この変遷については関連の深い石垣状遺構や溝跡の変遷とともに検討しなければならないが、整地地業地の北東辺が4カ所で僅かに膨らむのは削平範囲の変遷と対応したものである可能性がある。

## (2) 石垣状遺構

A区南東側で3基検出した。盛土地業に対応して敷地南端部の土留用に作られたものと考えられる。

### S Q 09 (第21図・付図2)

M C 42～M E 40に設置されており、Ⅱ層掘り下げ中に礫の上面が検出された。この遺構の西側には地山土を多量に含む盛土が幅4～5m前後広がっている。遺構はa～cの3つの部分からなり、全長15mである。

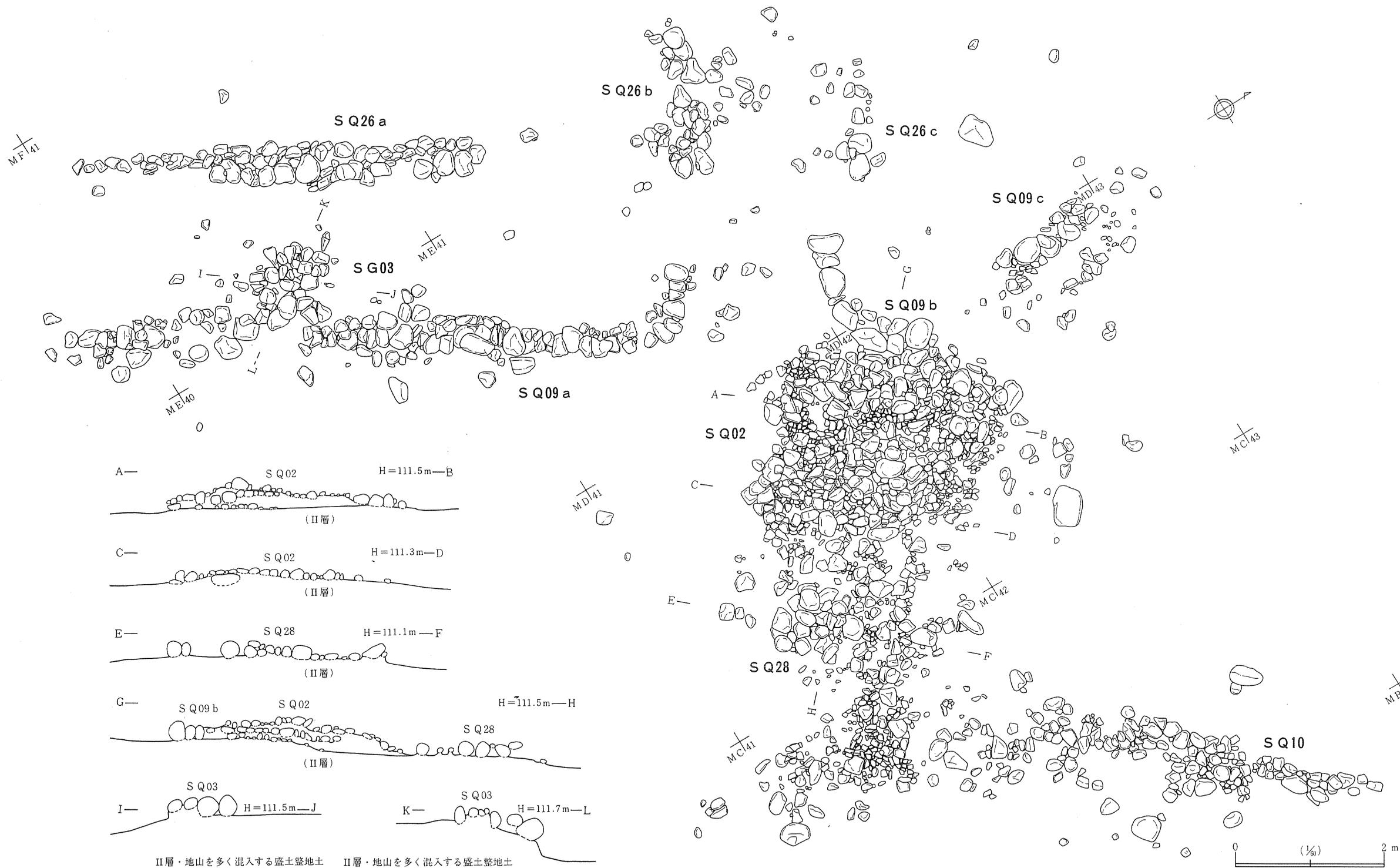
S Q 09 aは15～40cm前後の河原石を30～40cm程に積み上げており、北端が西側に曲がっている。基底幅40～75cm、長さ9.5mである。基底部側の礫は中央に立て掛けている。S Q 03の部分では礫が少なくなっている。S Q 09 bは35～50cm前後の大きい河原石を用いている。aの屈曲部と対応して、弧状に並べられている。用いた礫が大きい積み上げられず、礫が2列になる部分もある。幅30～50cm、高さ35cm前後、長さ2.2mである。a・b間は1.7～2.3mほど空いて両者でS B 02に向かって、「八」字状になっており、出入り口と考えられる。この間は緩い斜面となっているが石段などの施設は検出されなかった。S Q 09 cはbの北西側に1.2m程離れている。a同様に15～40cmの河原石を積み上げている。幅50cm前後、高さ20cm前後、長さ1.8mで、直線的である。S Q 09 cはこれを南東側に延長してもbとはスムーズにつながらず、より西側にずれた位置にあるため、時期差がある可能性がある。

第20図116は石組みに用いられていた磨石である。また、S Q 03の東側で、本遺構の礫上面よりやや上から第28図124が出土している。

### S Q 10 (第21図・付図2)

M A 42～M B 41に設置されている。径20cm前後の河原石を多く用いている。途中、部分的に重ねられている礫もあるが、基本的には2～3列に並べたものである。幅30～50cm、高さ15cm。南側に崩れたとも考えられる礫が続いているが、明確にとらえられる部分の長さは4.8mである。緩い斜面の下側にあり、礫自体の積上が低く、縁石状である。

第19図114・115は石組みに用いられていた磨石・凹石である。



第21図 SQ 02・03・09・10・26・28

## S Q 26 (第21図・付図2)

MD41～ME42に設置されている。S Q 09の西側2.4mで、盛土層の下部で検出した。このため本遺構がS Q 09より古い。本遺構の西側にも幅2～3m程の地山土を多く混入した盛土層がある。この盛土層は西側で、S Q 05とした礫群を含む黒色盛土層に移行するものと考えられる。本遺構もa～cの3部分からなり、全長11mであり、S Q 26 aはS Q 09 aと平行する。10～40cmの河原石を組み上げているが、礫の組み方はS Q 09より丁寧で、しっかりとした作りである。北半の幅が広がっているが、基底幅25～50cm、高さ20～40cm、長さ5.6mである。S Q 26 bはaの北端から2.2m離れている。aとほぼ直行する向きになっており、幅40～60cm、高さ20～40cm、長さ2.1mである。S Q 26 cはbと平行し幅30～40cm、高さ30～40cm、長さ1.7m。b・cともに礫を組み上げているがaに比べ著しく崩れている。b・c間が出入り口と考えられる。S Q 09が「八」字形を呈していたのに比べ直線的である。礫に混じって剥片が1点出土している。

## (3) 溝跡

14条検出された。整地地業地の西～北側縁辺部にあるものが多く、整地地業と建物跡に関連した遺構である。また北西側斜面上方にあるS D 07も整地地業地に対応した平面形を呈することから、同様の遺構と考えられる。

第22図に溝の断面図を示したが、セクションポイントは付図2中のものに対応する。

## S D 07 (第22図・付図2)

A区斜面途中のME48～MH48～MI47グリッドで検出された。平面形が鍵の手状となり、整地地業地の北西側と対応する。上面幅28～90cm、底面幅16～32cm、深さ20～65cm。全長15.9mである。東側はS Q 08に続く小さな沢に抜ける。

## S D 11 (第25図・付図2)

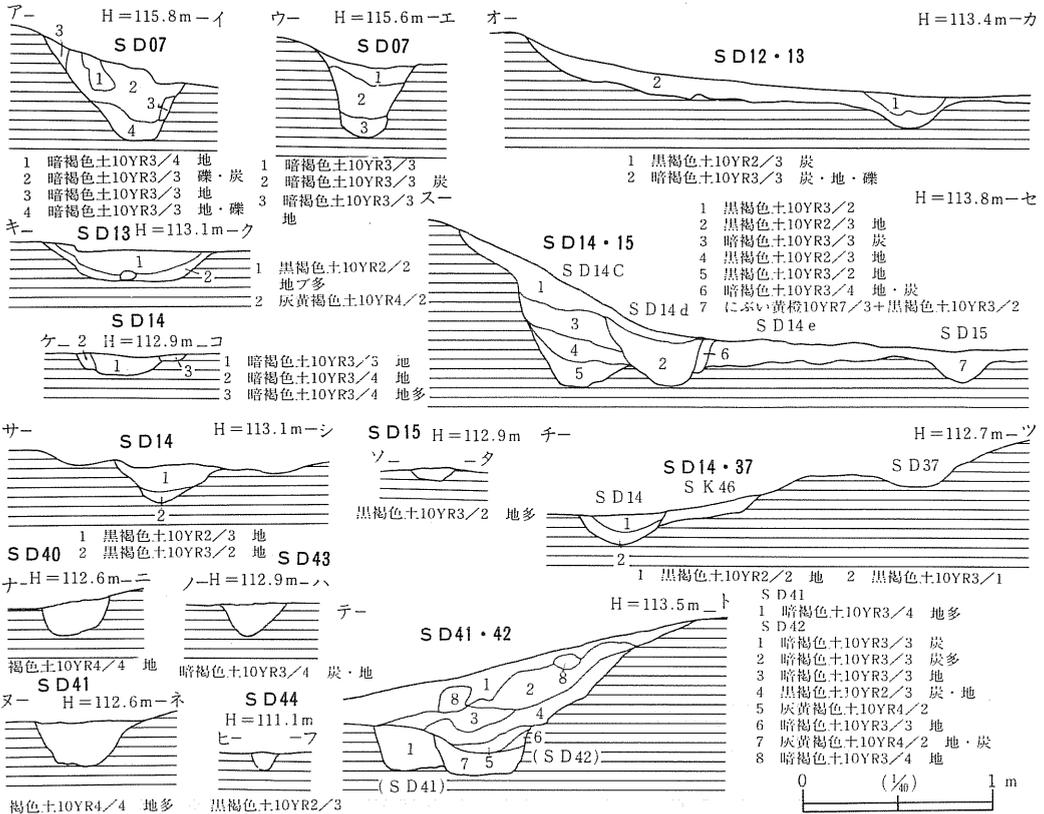
整地地業地西端のMG46～MH47～MI44グリッドで検出された。表土・黒色盛土層下のIV層上面で確認できた。平面形は北西端で東に直角に折れる鍵の手状を呈するが、東側が短い。上面幅10～30cm、底面幅10～18cm、深さ20cm、全長12.4mである。MH45グリッドでSK18を切っており、西端はP1に、東側はMG46グリッドでSD14に接する。

## S D 12 (第22図・付図2)

SD11の東側1mのMH45～MI44グリッドで検出された。南端は直線的であるが途中で屈曲し、北端が弧状となる。上面幅40～50cm、底面幅30cm、深さ15～20cm、長さ6.6mである。本遺構の南端はSD13と重なるが、北端でSD13を切っている。

## S D 13 (第22図・付図2)

SD12とほぼ同位置で部分的に重複するが、本遺構が古い。ほぼ直線的な溝跡で、北端はSK45



第22図 溝跡土層図 (平面ポイントは付図2中に示す)

に取り付いている。上面幅60～80cm、底面幅20～30cm、深さ18cm、長さ9.3m。土層の観察では地山土を多量に混入した整地土によって埋め戻された状況が明らかであった。

SD14 (第22図・付図2)

SD11～13の南東側にこれらと平行する形で検出された。南西側は調査区外へ続いているが、調査部分の長さは30.5mである。平面形は北西辺16.5m、北東辺14mの鍵の手状を呈し、整地地業地に対し北西側では4m前後東側、北東側では一部その裾に沿い、SQ08に伴う張り出し部分ではその南側を通してSD41に接している。上面幅48～72cm、底面幅18～30cm、深さ12～26cmである。全体を通じて規模は変わらないが、MI43グリッドで2条 (SD14a・b)、ME～MG46グリッドで3条 (SD14c～e) 検出されている。a・bの新旧関係は把握できなかったが、c～eについてはe→c→dの順に新しい。また、MH46グリッドのSK19とつながる部分、ME46グリッドには溝の縁に礫が敷かれている (第25・26図)。

SD15 (第22図・付図2)

SD14の北西屈曲部の2m内側の、IV層上面で検出された。平面形は鍵の手状を呈するが全体に曲線的である。上面幅20～35cm、底面幅8～16cm、深さ6～14cm、長さ7.3mである。

## S D 37 (第22図・付図2)

S D 14北西辺北側のS Q 08に接する位置にある。整地のために削平された範囲が大きく北側に張り出す所の、北端に掘られた溝である。西端はS D 14に接し、東端はS D 38に切られている。上面幅22～38cm、底面幅10～18cm、深さ15cm、長さ3.7mである。

## S D 38 (第22図・付図2)

S D 37と同様にS Q 08に接する位置にあるが、S D 37とは角度が違ってS Q 08にほぼ直角に接している。また西端はS K 46を切って、S D 14に接している。上面幅30cm、底面幅10cm、深さ12cm、長さ2.5mである。

## S D 39 (第22図・付図2)

S D 14の東端付近の1m程南側にあり、S D 14にほぼ平行している。西端はS D 42に切られている。上面幅18～30cm、底面幅8～22cm、深さ10cm、長さ2.5mである。

## S D 40 (第22図・付図2)

S D 39のさらに南側で検出された。S D 15の東側延長線に対応する位置である。北西端が北側に向かうが、その部分でS D 42に切られている。上面幅16～32cm、底面幅8～26cm、深さ20cm、長さ6mである。

## S D 41 (第22図・付図2)

整地地業地北辺中央が北側に大きく張り出す部分で検出された。北端はS D 42に切られているが、S Q 08の東端付近から南側に伸びる溝であり、旧地形の沢筋にあたる。上面幅36～68cm、底面幅18～40cm、深さ24cm、長さ7.4mである。S D 14の東端と接するが、その部分の北側で若干幅が狭くなっている。またその部分で覆土も異なり、南側の覆土はS D 14側の覆土と類似し一連の埋め戻しによるものである可能性があり、北側の覆土はS D 43同様に地山土が多く混入している。またP 341に切られている。

## S D 42 (第22図・付図2)

S Q 08を含む整地範囲の北東辺の裾にある溝跡である。東端は削平部分の裾に沿って未調査部分に伸びるが、溝の掘り方としては東側ほど不明瞭になる。調査部分の長さは19.8mであり、上面幅50～80cm、底面幅10～24cm、深さ8～30cmである。S Q 08と接するM D・M E 46グリッドでは、溝の縁に礫が敷かれていた(第26図)。また、S D 39～41・43を切っており、本遺構がそれらよりも新しい。

## S D 43 (第22図・付図2)

S D 42の内側にあるが、南北両端共にS D 42につながっている。多量の地山土を含む土によって埋められており、S D 42の古い段階のものと考えられる。上面幅30～50cm、底面幅18～25cm、深さ16cm、長さ5.0mである。

S D44 (第22図・付図2)

A区南端中央部で検出された。S Q26に伴う盛土整地土下のⅡb層付近から遺構の存在が予測されたが、プランが明確になったのはⅣ層上面である。S Q09・26と平行し、直線的である。南側は調査区外に伸びている。上面幅12～25cm、底面幅5～8cm、地山上面からの深さ12cm、調査部分の長さ4.3mであり、途中に2個のピットがある。

(4) 柱穴群と建物跡

整地地業地内で総数453の柱穴が検出された。これらは一応中世～近世のものとして記述するが、前述のとおり、特に南端のものについては縄文時代のものも含んでいる可能性がある。数が著しく多いため整理作業時に、P番号を振り直し、各ピットのデーターについては表にした。また、土層図の作成できたものについては第23・24図に掲載した。

全体に掘り方が大きく、その平面形が方形に近いものと、掘り方の規模の小さいものがある。土層断面に柱の痕跡を残すものでは、その柱の径が20～40cm程である。またP44・198からは柱材(第29図137・138)が出土している。P106からは第28図120の皿が、またP190からはそれと同一個体の可能性がある小破片が出土したが、掘り方内から遺物を出土したものは少ない。

これらの柱穴による建物については、その変遷などを含めて十分な検討を行うことができなかった。ここでは柱穴の配列等から推定される4棟の建物跡と柱穴列について記述するが、特にS B04建物の柱列と平行もしくは直交する柱列が複数存在することから、S B04のような建物が数期にわたって建て替えられたと考えられる。

S B01 整地範囲の中央東端に位置する。S Q09とS Q10の間にあたる。P446～449の4本からなる1間×1間の建物である。築行方向の柱間隔1.6m、桁行方向の柱間隔3.2mである。

S B02 S B01の北西3.4mにあたり、S Q09の出入り口部分に取り付く位置にある。P385～387・389の4本からなる、1間×1間の建物である。柱配置は台形となっており、柱間隔は北側の築行方向で1.5mであるが、他はすべて2.1mである。

S B03 整地範囲の北東端に位置する。P106・109・146・147・190・198・249・252・295・298・323・325の柱穴からなる北東－南西方向(築行方向)1間、北西－南東方向(桁行方向)5間の建物である。築行方向の柱間隔は1.7m、桁行方向の柱間隔は南端が1.7mでその他は2.3mである。

S B04 整地範囲の中央西側に位置し、遺構群の中心となる建物である。S B03とは4.9m程の間隔があるが建物の向きは平行する。南西側が調査区外へ続くものと考えられる、北東－南西方向(桁行方向)5間、北西－南東方向4間を中心とし、北東・北西側に1間づつ広がる廂状の部分を取り付く建物と考えられる。柱間隔は中心となる部分では2.1mとなっているところが多く、廂状の部分では1.8mとなる所が多い。

柱穴	位置	規模	深さ①	深さ②	備考
1	MH45	46 × (34)			礎石あり
2	MI44	(36) × 31			
3	MH45	66 × 48			上部に礫あり
4	MI43	43 × 38	8.7	25.6	> SD14
5	MI43	44 × 38			≧ SD14
6	MI43	(41) × 40			> SD14
7	MI43	18 × 2			
8	MI43	11 × 11			
9	MI43	24 × 21	47.8	63.0	
10	MH43	23 × 16	34.9	51.1	
11	MI43	16 × 14	15.5	33.2	
12	MH43	41 × 53	22.9	39.1	< P13
13	MI43	〃	33.4	49.3	> P12
14	MH・MI43	30 × 21	19.7	34.9	
15	MH43	39 × (44)	34.0	47.9	< P16
16	MH43	42 × 44	42.8	56.2	> P15
17	MH43	27 × 42	54.4	68.1	第23図
18	MH44	16 × 20	29.7	51.6	< P19
19	MH44	39 × 44	26.3	45.5	> P18
20	MH44	33 × 19			
21	MH44	41 × 46			
22	MH44	34 × 30	14.9	26.8	
23	MH44	26 × 15			
24	MH44	35 × 30	14.1	26.6	
25	MH44	10 × 10			
26	MH44	9 × 7			
27	MH44	30 × 29	35.8	50.1	
28	MH44・45	23 × 25	35.3	47.5	
29	MH44	23 × 24	14.1	45.3	
30	MH45	25 × 26	21.3	35.8	
31	MH45	24 × 18			
32	MG45	22 × 24	36.7	52.5	
33	MG45	13 × 13			
34	MG45	17 × 13			
35	MG45	23 × 22	30.7	43.5	
36	MG45	20 × 12	25.1	36.8	
37	MG45	19 × 14	19.2	49.9	
38	MG46	18 × 18	23.4	33.1	
39	MG46	18 × 19	39.0	50.0	
40	MG46	27 × 33	31.1	37.9	
41	MG45・46	38 × 38	48.1	56.9	
42	MG45・46	39 × 32	40.1	47.5	
43	MG46	31 × 25			
44	MG46	60 × 50	63.3	71.0	第23図
45	MI43	26 × 26	26.6	47.1	
46	MH・MI43	29 × 22	33.9	50.2	
47	MH43	27 × 26	19.1	36.7	
48	MH43	23 × 26			< P49
49	MH43	26 × 27			> P48
50	MH43	32 × 31	27.8	43.6	
51	MH43	26 × 27	29.7	44.0	
52	MH43・44	22 × 41	56.4	71.0	
53	MH44	22 × 36			
54	MH44	11 × 10			
55	MH44	8 × 9			
56	MH44	20 × 15	20.2	37.1	
57	MH44	8 × 9			
58	MH44	18 × 14			
59	MH44	31 × 27	7.1	25.7	
60	MH44	29 × 36	25.1	35.7	
61	MH44	18 × 23	7.1	25.7	
62	MG・MH44	23 × 26			
63	MG44	36 × 40	53.0	70.7	
64	MG45	46 × 43	45.6	65.9	
65	MG45	36 × 54	50.3	69.2	
66	MG45	23 × 22	26.4	41.5	

柱穴	位置	規模	深さ①	深さ②	備考
67	MG45	50 × (30)	52.4	66.6	
68	MG45	18 × 24	48.0	56.7	
69	MG45・46	32 × 27	37.4	51.4	
70	MI52	(70) × 69			
71	MH42	53 × 56	87.1	116.5	> P72 第23図
72	MH・MI42	62 × 68			< P71・73
73	MH42	39 × 45	46.0	74.1	> P72
74	MH42	17 × 24	11.2	36.4	
75	MH43	21 × 21			
76	MH43	31 × 30	31.1	50.4	
77	MH43	51 × 50	36.2	59.9	第23図
78	MH43	38 × 22	53.2	75.1	
79	MH43	18 × 18	27.8	43.6	
80	MH43	50 × (72)	58.3	78.8	< P81 第23図
81	MH43	62 × 52	80.2	101.4	> P80 第23図
82	MH43	42 × 38	51.8	81.0	第23図
83	MH43	50 × 48	54.3	78.0	第23図
84	MH43・44	(40) × 44	52.4	71.0	第23図
85	MH44	36 × 50	68.4	85.2	
86	MG・MH44	54 × 52	78.7	97.9	第23図
87	MG44	23 × 26	36.0	59.4	
88	MG44	36 × 40	49.2	68.9	
89	MG45	24 × 20	39.8	63.0	
90	MH42	32 × 34	21.2	54.4	
91	MH42	32 × 26	17.1	47.4	
92	MH42	20 × 24	21.8	55.9	
93	MH42・43	48 × 67	42.6	70.0	第23図
94	MH43	31 × 32	24.0	55.9	
95	MH43	58 × 44	56.4	85.0	第23図
96	MG・MH43	49 × 46	61.9	83.7	第23図
97	MH43・44	20 × 14			
98	MH44	31 × 30	33.4	51.2	
99	MG44	37 × 28	45.0	58.0	
100	MG44	31 × 46			
101	MG44	39 × 45	44.2	68.9	
102	MG44	22 × 15	14.8	38.3	
103	MG45	39 × 34	7.1	29.3	
104	MG45	22 × 43	24.5	46.2	
105	MG45	50 × 54	37.0	56.1	
106	MF・MG45	38 × 38	34.0	44.7	
107	MF・MG46	32 × 32	45.9	55.8	
108	MF46	34 × 31	30.7	42.2	
109	MF46	38 × 26	43.1	53.8	
110	MH42	36 × 38	21.1	55.8	
111	MH42	30 × 36	44.5	80.9	
112	MG・MH43	66 × 67	43.9	81.0	第23図
113	MG43	46 × 35	38.2	61.2	
114	MG43	30 × 32	22.9	52.0	> P115
115	MG・MH43	(32) × 31	28.0	54.8	< P114
116	MG43	88 × 54	50.6	84.3	第24図
117	MG43・44	47 × 31	45.0	75.8	
118	MG43・44	36 × 24			
119	MG44	90 × 64	43.6	75.5	< P120
120	MG44	64 × 92	33.3	65.2	> P119
121	MG44	67 × 80	70.1	93.8	第24図
122	MG44	58 × 41	38.3	73.7	
123	MG44	35 × 42	26.8	54.5	
124	MG45	23 × 21	14.8	43.2	
125	MG45	34 × 33			
126	MF46	16 × 14			< SD14d
127	MH42	36 × 38			
128	MG43	54 × 66	24.2	59.5	
129	MG44	52 × 48	34.0	68.0	第24図
130	MG44	34 × 34	13.3	43.8	
131	MF45	38 × 34	32.5	59.3	
132	MF45	20 × 18	26.9	38.8	

第2表 柱穴(1)

(深さ①は地山上面から。  
深さ②は標高113.0mからの深さ。)

第4章 調査の記録

柱穴	位置	規模	深さ①	深さ②	備考
133	MH42	20×20			
134	MH42	32×33			
135	MG・MH42	24×21	29.2	81.2	
136	MG43	37×21			
137	MG43	42×(31)	10.8	60.4	< P138
138	MG43	38×44	26.2	72.4	> P137
139	MG44	26×26	24.0	60.0	
140	MG44	31×27	35.4	73.7	
141	MG44	33×31	33.0	7.9	
142	MF44	28×23	30.3	61.4	
143	MF44	31×34	9.2	44.1	
144	MF44	9×16			
145	MF45	30×16	45.5	71.0	
146	MF45	52×74	39.0	61.2	
147	MF45	26×43	60.1	72.5	
148	MF46	15×16	16.0	27.7	
149	MF46	13×17	26.8	39.1	
150	MH41・42	67×47			
151	MG・MH42	31×25			
152	MG42	31×39	29.2	82.4	
153	MG42	45×48	24.1	79.1	
154	MG42・43	41×34	26.8	89.3	> P155
155	MG42	44×40	24.2	90.9	< P154
156	MG43・44	36×38			
157	MF44	21×11			
158	MF44	40×38	18.8	56.1	< P160
159	MF44	29×28	41.6	77.4	
160	MF44	29×34	37.5	73.9	> P158
161	MF45	43×43	8.6	38.0	
162	MF45	26×26	28.8	57.4	
163	MF45	18×26			> P164
164	MF45	35×46	12.8	30.1	< P163
165	MF46	27×38	45.7	66.3	
166	MG42	26×27	27.1	110.9	
167	MG42	37×36	15.9	102.9	
168	MG42	24×24	4.1	91.2	
169	MG42	22×24	10.5	87.6	
170	MG42	16×17	19.6	99.4	
171	MG42	23×20	23.9	106.8	
172	MG42・43	49×48	54.1	124.8	第24図
173	MG43	14×12			
174	MG43	13×12			
175	MF43	18×21			
176	MF43	(30)×44			< P177
177	MF43	56×63	26.8	90.0	> P176 第24図
178	MF44	26×16	11.4	69.3	
179	MF44	47×50	30.9	88.9	
180	MF44	21×20	18.0	74.2	
181	MF44	44×39	35.0	97.2	
182	MF44	45×41	40.4	91.0	
183	MF44	14×11	13.4	56.9	
184	MF44	26×22	12.7	57.4	
185	MF44	35×43	23.4	63.9	
186	MF44	41×47	37.8	88.2	
187	MF44	15×28	22.4	68.0	
188	MF44・45	41×43	64.9	98.2	
189	MF45	12×14			
190	MF45	54×50	53.8	84.0	
191	MF45	27×31	11.5	47.0	
192	MF45	27×25	19.8	53.8	
193	MF45	62×30	41.0	69.1	
194	MF45	22×18	27.8	55.6	
195	ME45	36×18	24.9	52.7	
196	ME45	28×24	18.5	53.4	
197	ME45	23×31			
198	ME45	(48)×40		76.0	> P199 第24図

柱穴	位置	規模	深さ①	深さ②	備考
199	ME45	25×33		71.0	< P198 第24図
200	ME45	27×28	33.1	66.4	
201	ME45	10×10			
202	MG41	19×24			
203	MG41	78×56	41.8	110.1	
204	MG41	19×38			
205	MG42	32×39	46.0	107.5	> P206 第24図
206	MG42	42×38	42.5	104.0	< P205 第24図
207	MG42	46×38	34.2	95.3	
208	MG42	32×38	34.2	95.3	
209	MG42	64×40	30.0	82.0	第24図
210	MG42	34×56	41.2	96.9	第24図
211	MG42	34×32	55.4	114.5	第24図
212	MF42	17×15	9.4	100.7	
213	MF42	20×12	9.0	103.5	
214	MF43	60×52	22.4	115.3	第24図
215	MF・MG43	50×54			
216	MF43	47×38			
217	MF43	16×12			
218	MF43	23×21			
219	MF43	28×24	13.3	97.2	
220	MF43	42×52	10.6	91.8	
221	MF43	26×18			< P222
222	MF43	11×18	12.1	85.3	> P221
223	MF43	19×28	14.9	90.8	
224	MF44	8×6	28.9	92.1	
225	MF44	10×8	28.3	92.2	
226	MF44	13×18	9.5	75.7	
227	MF44	8×13	16.8	83.6	
228	MF44	28×32	11.1	75.0	
229	MF44	26×24	20.3	69.4	
230	ME45	38×36	31.7	65.4	
231	ME45	11×12			
232	ME45	17×16	16.6	48.2	
233	ME45	15×10			
234	ME45	21×24			
235	ME45・46	17×15	19.2	49.9	
236	ME46	12×10			
237	MG41	18×26			
238	MF42	48×48	16.7	92.2	
239	MF43	36×37	9.5	93.8	第24図
240	MF43	30×33	13.1	88.9	
241	MF43	18×11			
242	ME45	18×17			
243	ME45	17×19			
244	ME45	27×34			
245	ME45	11×18			
246	MF43	44×26	9.8	94.7	
247	ME44	25×31	12.3	86.4	
248	ME44	33×40	25.1	78.2	
249	ME44・45	32×54	42.6	88.0	
250	ME45	23×21	2.6	38.2	
251	ME45	40×46	49.2	81.8	
252	MG41	50×66			
253	MG41	19×20			
254	MG41	24×18			
255	MG46	56×59			
256	MF42	24×32			
257	MF42	27×28	15.7	117.2	
258	MF42	36×36	11.5	100.2	
259	MF43	32×26	20.8	115.0	
260	MF43	17×13			
261	ME44	27×26	16.9	78.4	> P262
262	ME44	24×32	18.0	82.0	< P261
263	ME44	25×19	23.8	79.1	
264	ME44	22×20	20.5	74.1	

第3表 柱穴(2)

(深さ①は地山上面から。  
深さ②は標高113.0mからの深さ。)

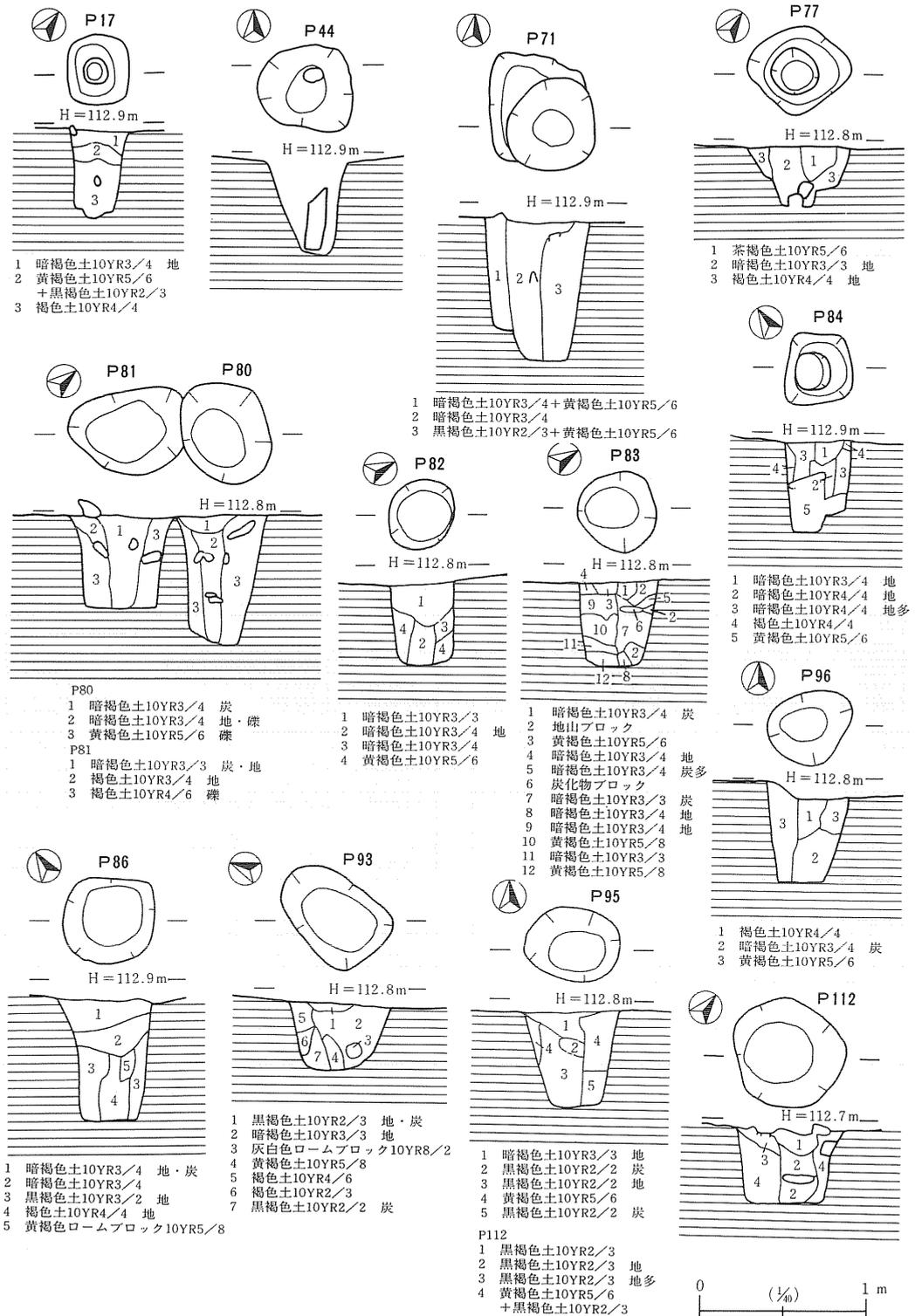
柱穴	位置	規模	深さ①	深さ②	備考
265	ME44	32×34	27.1	76.9	
266	ME44	25×24			
267	ME45	28×36	33.0	80.3	
268	ME44・45	32×47			
269	MD・ME45	26×22	19.3	43.6	
270	MF41	14×16	22.7	140.0	< P271
271	MF41	30×31	23.4	151.9	> P270
272	MF42	41×36	55.2	153.4	
273	ME・MF43	75×44			
274	ME43	22×20	8.9	94.3	
275	ME43	16×17	8.3	94.4	
276	ME44	22×26	35.2	90.7	
277	ME45	26×30	7.6	68.4	
278	ME44	42×50	19.9	82.5	
279	ME44	33×34	23.1	78.9	
280	ME44	39×42	23.1	80.0	
281	ME44	26×18			
282	ME44・45	38×34	38.7	87.2	
283	ME45	32×24	33.9	74.1	
284	MD45	24×16	10.0	33.6	
285	ME44	32×28	23.2	92.7	
286	ME44	32×22	15.8	88.7	
287	ME44	18×23	7.6	68.4	
288	ME44	25×23	17.5	69.4	
289	MF41	24×27			
290	MF41	25×22	40.1	184.5	
291	ME43	18×28	6.8	105.6	
292	ME43	22×22	16.7	110.1	
293	ME43	44×50	14.8	100.0	
294	ME44	22×21			
295	ME44	40×47	52.6	108.9	
296	MD44	23×24	33.1	83.8	
297	MD44	20×26	21.5	69.9	
298	MD45	40×40	40.0	82.3	
299	MD45	30×21	8.4	41.3	
300	MD45	23×24	35.6	60.1	
301	MF41	22×19	11.9	165.3	
302	MF41	28×31	11.0	157.0	
303	ME42	20×18	16.7	139.5	
304	ME43	19×23	7.3	106.5	
305	ME43	54×54	32.6	102.0	
306	ME43	19×30	21.0	105.5	
307	ME44	29×21	16.1	87.9	
308	ME44	29×21			
309	MD45	31×30			
310	ME42	38×29	25.5	159.4	
311	ME42・43	46×42	22.6	143.4	
312	ME43	36×31	35.3	140.0	
313	ME43	33×37	30.0	127.4	
314	ME43	23×29	22.1	114.8	
315	MD・ME44	23×17	24.9	105.7	> P316
316	MD・ME44	36×34	21.5	101.5	< P315
317	MD44	34×44			
318	MD45	26×17	6.3	43.8	
319	MD45	21×21	26.3	56.7	
320	MD45	38×39			
321	MD45	18×24			
322	ME43	37×36	55.3	141.0	
323	MD44	50×53	44.8	119.0	
324	MD44	34×37	41.7	190.5	
325	MD44	58×42	43.0	90.6	
326	MD45	16×12			
327	ME43	30×26	8.3	125.4	
328	ME43	56×62	18.8	124.8	
329	MD43	38×34	21.4	111.8	
330	MD44	30×22	12.5	95.9	

柱穴	位置	規模	深さ①	深さ②	備考
331	MD44・45	22×37	24.7	71.6	
332	MF40	27×28			
333	ME43	56×44	23.0	144.8	
334	MD・ME43	26×30	18.8	124.8	
335	MD43	21×26	21.4	111.8	
336	MD43	56×60	10.0	96.4	
337	MD44	20×26	15.5	106.5	
338	MD44	28×30	23.0	144.8	
339	MD44	19×13	18.8	124.8	
340	MD44	15×40	21.4	111.8	
341	MD44	38×68	29.4	119.0	
342	MC45	46×30	70.6	91.3	
343	MF39	45×34	34.6	236.0	
344	MF39	45×36	22.9	221.0	
345	MF40	32×26			
346	MF40	34×36	12.5	208.7	
347	MF40	17×16	11.6	206.7	
348	MF40	34×48	10.7	199.5	
349	MD43	10×14			
350	MD43	34×28	20.0	123.4	
351	MD43	38×43	18.9	111.9	> P352
352	MD43	(28)×38	11.7	106.9	< P351
353	MD44	32×34	6.0	92.7	
354	MD44	21×14	18.0	87.9	
355	MC44	27×22	11.4	61.1	
356	MC44・45	52×45	56.5	100.2	
357	MC45	24×20	21.5	48.8	
358	MC45	20×18	79.4	105.0	
359	MF40	28×28	24.3	224.3	
360	ME40	36×28	64.9	263.2	
361	ME40	34×42	11.8	209.0	
362	ME41	19×18	8.1	203.1	
363	ME41	17×22	11.3	204.5	
364	ME41	10×12			
365	ME41	13×13			
366	ME42	18×14			
367	MD43	14×14	14.5	126.7	
368	MD43	13×9	19.4	131.7	
369	MD43	21×38	18.1	124.2	
370	MD43	31×30	31.4	138.9	
371	MC・MD44	37×47	40.1	114.6	
372	MC44	38×26	20.5	88.8	
373	MC44	40×38	22.2	84.7	
374	MC44	28×28	23.5	74.6	
375	MF39	30×29	23.0	227.9	
376	MF39	28×18	11.2	217.1	
377	ME39	37×39	34.8	242.3	
378	ME40	22×24	46.1	249.2	
379	ME40	32×29	37.5	238.3	
380	ME40	25×25	47.6	246.5	
381	ME40	21×16	24.2	226.0	
382	ME40	36×28	49.0	252.2	
383	ME41	19×27	6.0	207.0	
384	ME41	24×21	23.1	215.4	
385	ME41	46×34	17.5	203.5	
386	MD42	42×50	15.1	167.0	
387	MD42	26×60	25.5	220.9	> P388
388	MD42	(30)×49			< P387
389	MD41	38×50	11.8	214.0	
390	MD41・42	31×28	24.7	215.6	
391	MD42	60×56	19.5	188.8	
392	MD42	23×21	30.4	210.8	
393	MD43	14×15	15.9	165.4	
394	MD43	21×16	9.3	157.2	
395	MD43	54×58	31.1	156.5	
396	MD43	41×27	10.9	153.4	

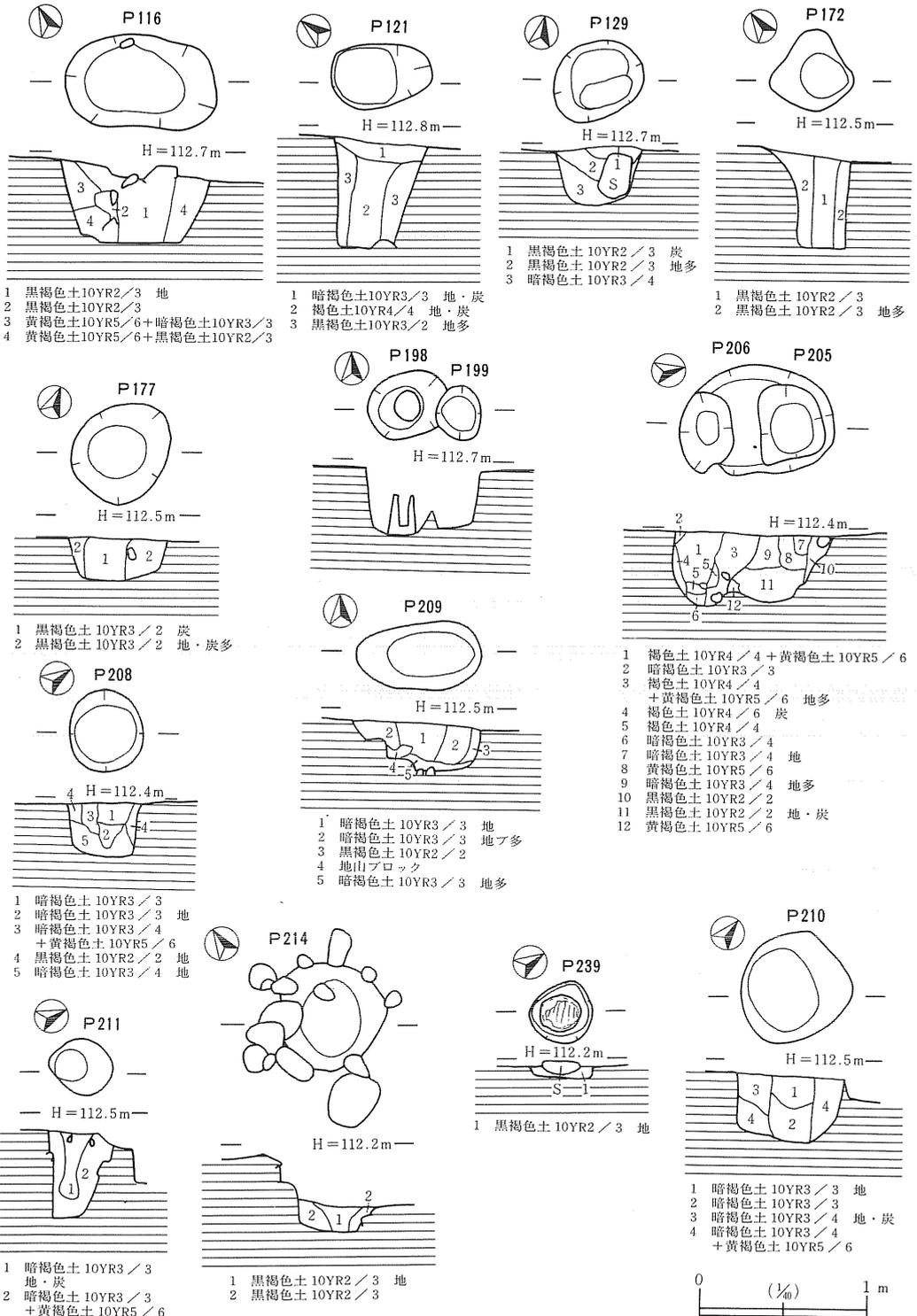
第4表 柱穴(3)

(深さ①は地山上面から。  
深さ②は標高113.0mからの深さ。)

第4章 調査の記録



第23図 柱穴(1)



第24図 柱穴(2)

第4章 調査の記録

柱穴	位置	規模	深さ①	深さ②	備考
397	MC45	20×28	29.1	74.0	
398	MC44	30×32	12.5	63.8	
399	ME39	31×34			
400	ME39	25×25	28.5	233.2	
401	ME40	23×23	21.0	224.7	
402	ME40	21×18	15.1	228.0	
403	ME39	28×28	25.4	241.9	
404	ME39	20×21			
405	ME39	36×40	44.2	258.6	
406	ME39	28×25	19.9	230.3	
407	ME39	30×33	29.8	253.4	
408	ME39	28×24	46.6	79.6	
409	ME39	34×28	29.7	250.8	
410	ME39	20×20	23.5	249.7	
411	ME39	34×40	66.7	280.4	
412	ME39	38×34	44.6	261.1	
413	MD・ME39	47×46	30.1	253.5	
414	ME40	27×24	24.4	233.2	
415	ME40	25×32	49.8	277.2	
416	ME40	28×23	36.4	255.8	
417	MD41	47×21	21.5	229.5	
418	MD41	39×34	32.9	246.3	
419	MD39	26×16	23.4	262.5	
420	MD39	30×23	46.7	285.7	
421	MD39	34×35	39.9	267.2	
422	MD39	31×28	18.2	258.2	
423	MD39	22×19			
424	MD39	25×25	17.2	246.0	
425	MD39	25×24	30.7	261.0	

柱穴	位置	規模	深さ①	深さ②	備考
426	MD39	39×43	31.7	254.7	
427	MD39	33×40	56.7	281.7	
428	MD39	34×32	28.2	256.2	
429	MC40	26×37	25.6	259.1	
430	MC40	26×20			
431	MC41	28×32	20.4	263.0	
432	MC43	22×22	16.6	193.6	
433	MC43	18×20	22.4	192.7	
434	MC43	22×16	16.9	180.6	
435	MC43	22×20	35.3	180.0	
436	MC43	18×19	13.6	151.1	
437	MB42	28×26	18.6	298.4	
438	MB42	11×16			
439	MA42	28×24	11.6	298.5	
440	MA42	40×27	15.7	311.7	
441	MA42	24×24	24.5	303.0	
442	MA42	24×23	24.8	278.1	
443	MA42	28×24	18.0	270.5	
444	MB43	14×14			
445	MB43	26×34	20.4	185.5	
446	MC41	32×33	26.5	263.2	
447	MC41	31×24	28.4	271.2	
448	MC40	23×18	33.4	288.7	
449	MC・MD41	52×50	38.1	267.8	
450	MD47	22×22			
451	MD47	45×28			
452	MD46	28×26			
453	LP49	61×81			

第5表 柱穴(4)

(深さ①は地山上面から。  
深さ②は標高113.0mからの深さ。)

なおS B 03・04は、一応二つの建物を想定したが、柱の並びが通る所があること、またこの建物の間にも柱穴があることから一つの建物である可能性もある。

S A 05 整地範囲の北東側で、S D 41と並ぶ位置にある。P 342・355・356・371・372からなる柱列である。

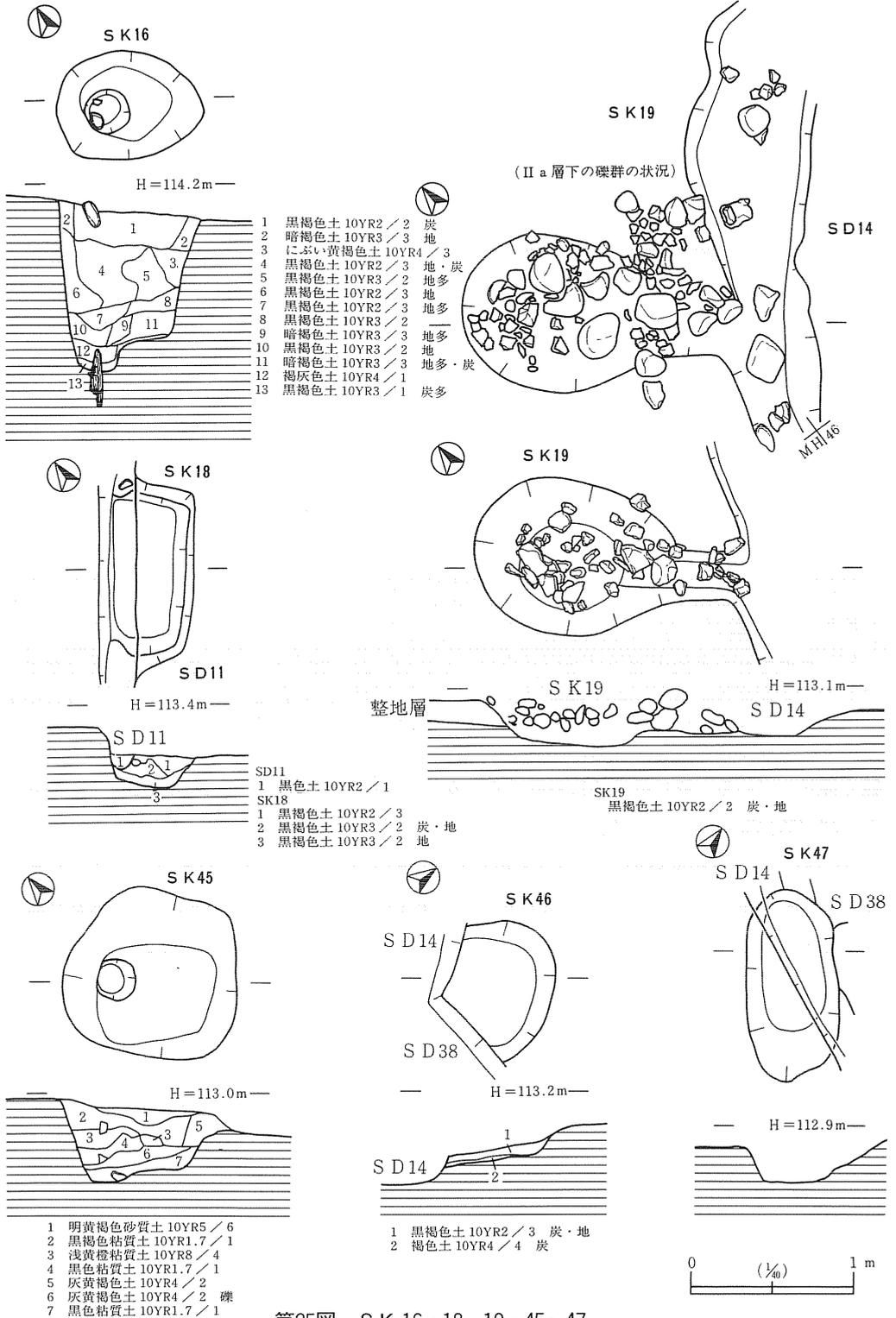
(5) 土坑

S K 16 (第25図)

S D 11の屈曲部北側の、IV層上面で検出された。整地のために削平された部分より北側で、斜面の上方向にある。確認面での平面形は長径90×短径67cmの楕円形を呈する。長軸方位はN-65°-W、深さ88cmである。底面は一辺40cm前後の不整形を呈する。壁はほぼ直角に立ち上がり、開口部に向けて僅かに外傾する。覆土は10層に分けられる。なお、底面付近では常に水がしみ出ている。底面の西側に径27cm、深さ18cm程のピットがあり、その中に杭状の材(第29図136)が残っていた。材質はコナラ亜属である(第5章参照)。

S K 18 (第25図)

整地範囲の北西辺に接する位置のIV層上面で検出された。このため上部の北西がS D 11に切られている。平面形は長辺100cm、短辺53cmの長方形を呈する。長軸方位はN-35°-E、深さは19cmである。床面は平坦である。覆土は1層で黒褐色を呈する。遺物は出土しなかった。



第25図 SK 16・18・19・45～47

S K 19 (第25図)

S D 11の屈曲部内側で検出された。削平した整地範囲の北西隅にあたる。a層下の盛土整地面で礫群が集中しており、盛土整地面下で本土坑を確認した。平面形は長軸125cm、短軸90cmの楕円形を呈する。長軸方位N-50°-Wで、深さ28cmである。底面は中央部が緩くくぼむ。壁は緩く外傾して立ち上がる。覆土は、黒褐色を基調とした混土の1層で、多くの礫とともに埋め戻されたものと考えられる。土坑の南東側は幅30cmの溝で、S D 14に続いている。このため、S D 14と一連で機能したことが推定される。また、この土坑が埋め戻された時の礫が、S D 14の縁に並ぶ形となっており、S D 14の1時期とのみ併存したものと考えられる。遺物は出土しなかった。

S K 45 (第25図)

S D 13の北東端に取り付いた土坑で、層上面で検出された。平面形は一辺105cm前後の略方形を呈し、深さは42cmである。底面は西側に僅かに傾斜し、壁は直線的に外傾する。覆土は6層に分けられる。黒褐色土と黄褐色土が互層をなし、埋め戻された状況が顕著である。底面付近では常に水が湧いている。底面西側に、径25cm、深さ11cm程のピットがある。S D 13との新旧関係は、同時か若しくはS D 13が新しいものと考えられる。遺物は出土しなかった。

S K 46 (第25図)

削平整地された範囲の北辺に近い部分で、S D 14・37・38に囲まれた所の層上面で検出された。この部分は南向きに緩く傾斜している。遺構はS D 14と38に切られており、南半は不明である。遺存する部分の平面形は方形を呈している。深さは11cm。底面は地形に対応して、緩く傾斜している。壁は直線的に外傾する。覆土は2層に分けられる。遺物は出土しなかった。

S K 47 (第25図)

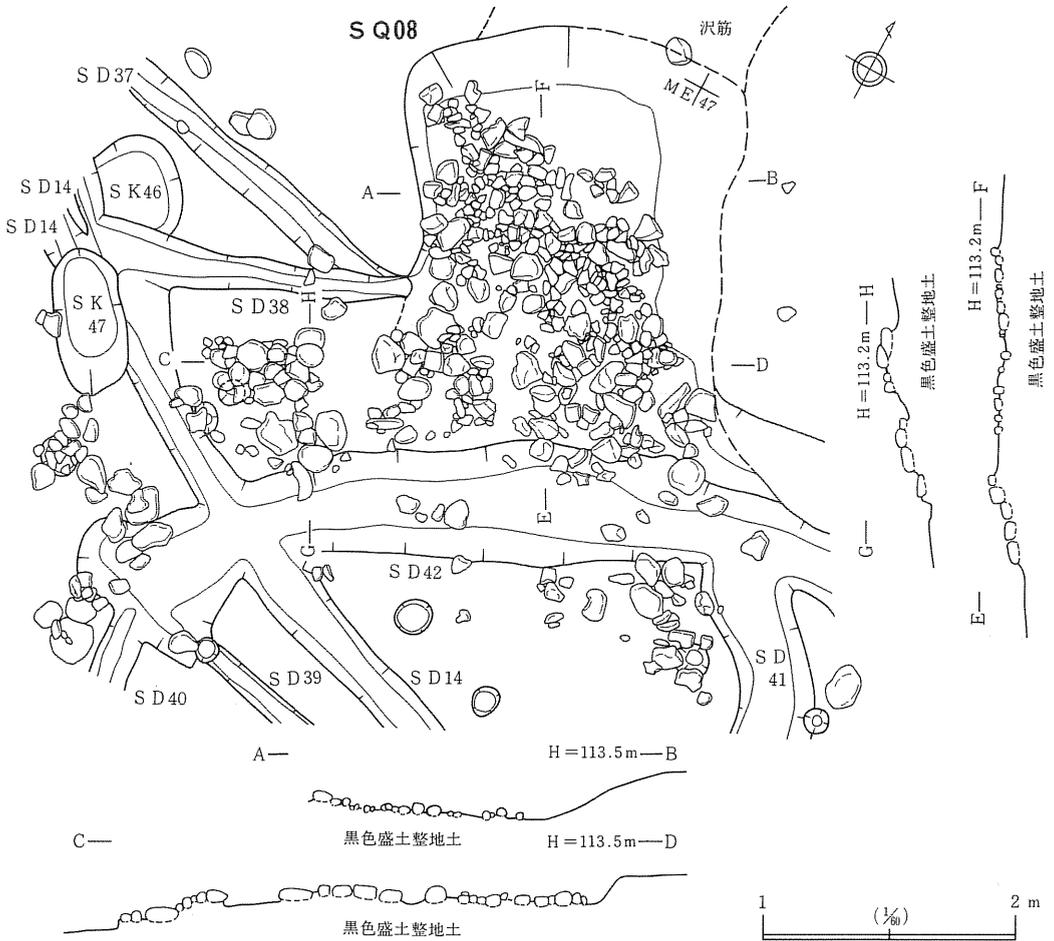
SD14北辺中央部で部分的にSD14と重複する形で検出された。重複部分ではSD14の底面で遺構プランを検出したことから、SD14と同時か、本遺構が古い。平面形は長径117×短径57cmの楕円形を呈する。長軸方位N-35°-Wである。重複しない部分では層を24cm掘り込んでいる。土層図は作成できなかった。遺構内から遺物は出土しなかった。

(6) 石敷遺構

S Q 08 (第26図)

整地地業地の北側斜面には、幅1.6mほどの埋没した沢がある。本遺構はこの沢が整地地業地に開口する、M D・M E 46グリッドで検出された。層掘り下げによって石敷状の礫群が露出し、また層上面まで掘り下げて、この部分が方形に掘り込まれていることが判明したため石敷状の礫群と一連の遺構と判断した。

石敷状の礫群には10~30cm前後の河原石が用いられており、その上面は非常に平坦である。



第26図 S Q08

石敷は沢と接する北東部分を除き、北東-南西方向に2.2m、北西-南東方向に2.1mほどの広がりがあり、南側はS D42に接している。河原石を敷いた掘り方は、北東-南西方向が2.4m、北西-南東方向が3m程であるが、東側は沢の肩を利用しており、西半を掘り込んだものである。礫群の下部には礫を敷く段階で黒色土を盛っている。

遺構が沢の開口部にあること、また石敷の状態から本遺構は沢水を利用する作業場の性格をもつものと考えられる。また、遺構としては取り上げなかったがC区M E 50グリッドの沢中に径50cm前後、高さ49cmの巨大な河原石が置かれており、本遺構と関連する可能性がある。

### (7) 集石遺構

礫の集中した遺構を一括した。5基あるが、集石の形態には3種類ある。S Q02・04は積石塚状を呈し、S Q03・28は上部が平坦となるように組まれている。S Q05は広い範囲に、多くの礫が検出されたが、明確なまとまりなどはなく、整地地業に伴って廃棄された地山礫である。

S Q 02 (第21図)

S B 01の北側に分布し、礫の上部は現地表面に露出していた。また、礫の最下部がS Q 09 bにかぶさっている部分があることからS Q 09より新しい。また、S B 01の柱穴は礫を除去して後に検出されたため、S B 01より新しい。5~35cm大の河原石を集めて積み上げたものであり、中央部が僅かに高い。遺構の精査は礫面の写真撮影後に礫を除去しながら進めたが、確認当初から3面の礫面を検出した。第21図は、確認当初の状態であるが、エレベーション図に下面の礫を補足している。平面形はほぼ円形を呈し、径3.2m程である。礫上面から遺構下面までの高さは47cmである。南側に方形に張り出す部分があり一辺90cmである。またこの部分は礫の上面がほぼ平坦である。使用された礫中には第20図111や剥片1点が含まれる。また、礫群中下部からは第28図119の陶磁器破片と東北地方産と見られる近世陶器の小破片1点が出土しており、それ以降に構築されたものと考えられる。

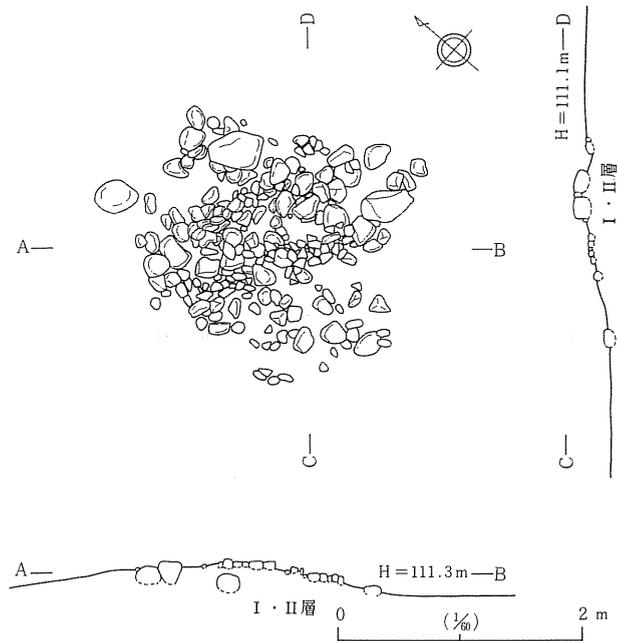
S Q 03 (第21図)

S Q 09中央部やや北西側で検出された。これも礫の一部が現地表面に露出していた。位置的にはS Q 09に接する部分であり、S Q 09はこの部分が僅かに途切れているため、S Q 09と一連のものである可能性も考えられる。ただし礫の下面はS Q 09の西に広がる盛土整地面より僅かに高く、一応本遺構が新しいものと考えておく。15~30cm前後の河原石を並べた遺構であり、礫の上面は平坦になっている。平面形はほぼ円形を呈し、径120cm程である。遺構の東側でS Q 09の上に堆積した土層中より第28図124が出土している。

S Q 04 (第27図)

A区南西端中央部のMG40グリッドに検出された。礫の一部は現地表面に露出していた。径5~20cmの河原石・地山礫を積み上げたものであり、中央部が僅かに高くなる点でS Q 02と類似するが、用いられた礫の大きさや、全体の規模が小さく、礫面は2面確認されただけである。平面形は径2.5mの円形で、礫上面から遺構下面までの高さは35cmほどである。

使用された礫に混じて剥片1点とすり鉢の破片1点(第20図113)が



第27図 S Q 04

出土した。すり鉢は17～18世紀に位置付けられるため、それ以降に作られたものと考えられる。

#### S Q 05 (付図1)

A区中央南西部のMG42・43グリッドを中心に、黒色土中で検出された地山礫群である。礫群の出土範囲は直径約12mほどである。この範囲の地山面の地形は周囲より僅かにくぼむ部分にあたる。礫は数多く出土しているが、部分的なまとまり、上部及び下部に続く掘り込みなどは認められない。またこの礫群を含む黒色土は整地地業地内に建てられたS B 04などの建物の柱穴に切られている。これらのことからこのS Q 05は削平地業によって出土した地山礫を、地形的にくぼんだこの部分に入れた礫群と考えられる。

#### S Q 28 (第21図)

MC41グリッド、S Q 02の南端で検出された。礫の一部は現地表面に露出していた。径25cm前後の河原石を用いており、平面形は楕円形を呈する。礫群の上面は平坦で、S Q 03と類似した形態である。長径125cm、短径98cmで、長軸方位N-43°-Eである。使用された礫に混じって第20図112の打製石斧が出土している。

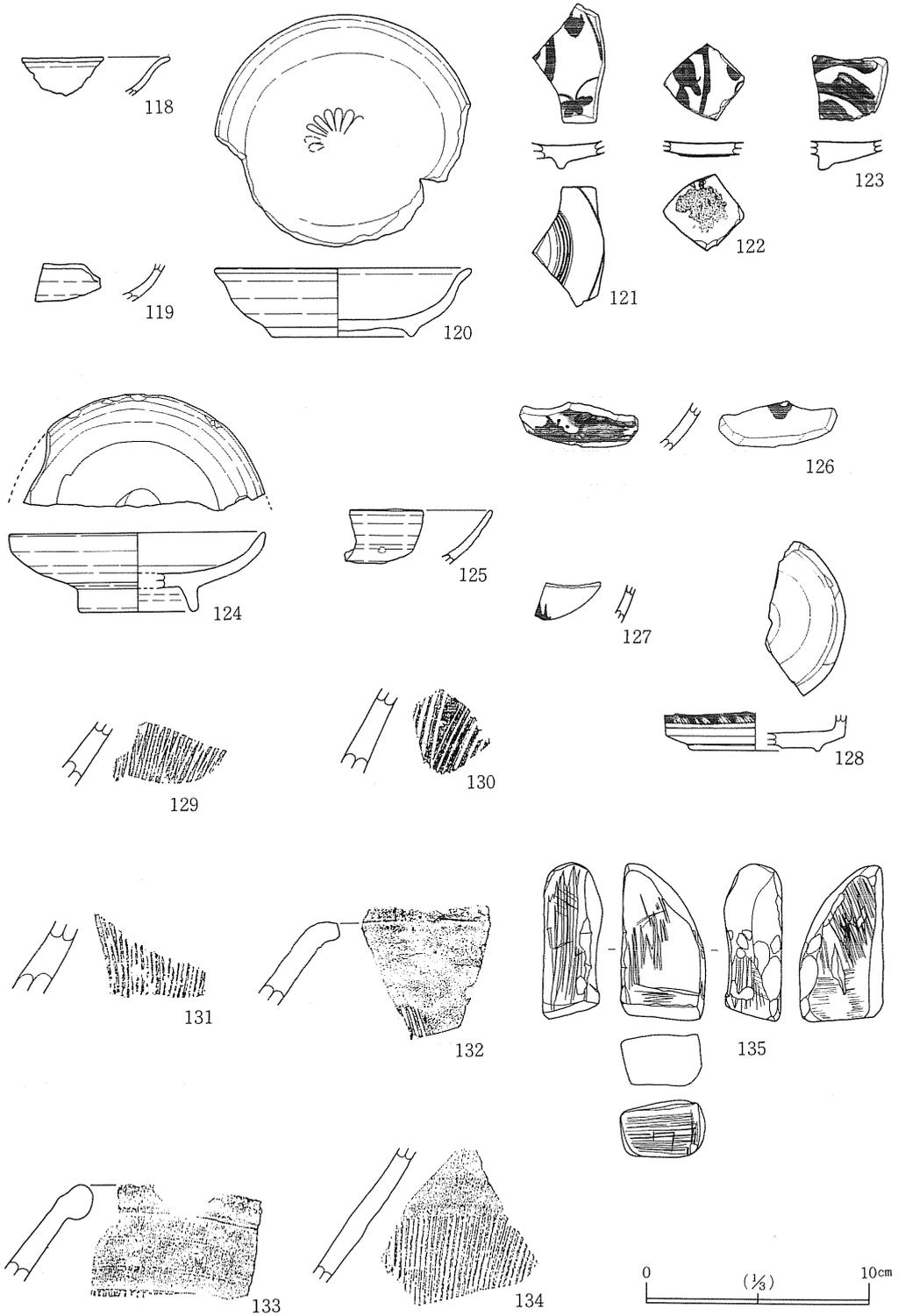
## 2 出土遺物

### (1) 陶磁器

遺構内外から22点出土した。そのうち小破片の5点を除く17点を図示した。年代的に16世紀以前のもの、17世紀代のもの、18世紀代のものがある。16世紀以前のものには118～120の3点である。118は中国系の白磁・皿である。119はS Q 02の礫群の下部から出土した。119は江戸後期のものである可能性もあるが、李朝の皿ないしは椀と考えられる。120は瀬戸産の端反皿である。見込みにキク判がある。法量は推定口径11.5cm、底径6.3cm、器高3.6cmである。17世紀代ものは5点ある。肥前産の染め付けのある7～9と、肥前産かと考えられる129・130のすり鉢である。18世紀代と考えられるものは6点である。124は東北地方産の皿である。見込みは蛇ノ目釉ハギされている。法量は推定口径11.5cm、高台部径3.5cm、器高5.0cmである。125は肥前産の白磁、126・128は肥前産の染め付け磁器である。また132～134のすり鉢のうち、132は肥前産の可能性はあるが、他は東北地方産かと考えられる。なお127は肥前産で染め付けのある椀の破片であり、131は備前系と考えられるすり鉢の破片であるがともに17～18世紀に位置付けられる。

### (2) 砥石

MG43グリッドから1点出土した。非常に良く使い込まれており上下両面まで含めた6面を使用している。



第28図 出土遺物(1)陶磁器・砥石

No	出土位置	産地	種別	器種	形態の特徴	技法の特徴	時期	備考
118	MC40 I	中国系	白磁	皿			16C前～中	
119	SQ02下部	李朝	陶	碗か皿			15C～16C?	江戸後期のものとの関連に曖昧さが残る。尻八箇に類例あり
120	P144掘形	瀬戸・美濃	陶	皿	キク判	ワドチという工具で重ね焼	16C前～中	弘前や浪岡城等に類例
121	MG43 II	肥前	染付	皿	見込内に区画し蝶蝶と草花文	畳付釉ハギ	1640～1650	123より高台の整形が丁寧
122	MF44 II	肥前	染付	皿	草花文	砂の溶着	1640～1650	
123	MC41 II	肥前	染付	皿	高台部のケズリ甘く幅が広い。牡丹様の文様?	畳付釉ハギ	1620～1640	
124	SQ03・09間	東北地方	陶	皿	見込み蛇ノ目釉ハギ	わら灰釉	18C	
125	MF42 II	肥前(波佐美)	白磁	皿	見込み蛇ノ目釉ハギ		18C	日常雑器 低部無釉のものが多い
126	MF41 II	肥前	染付	碗	腰部。草花文、菊花?		1640～1660	
127	MF41 II	肥前	染付	碗			17C後～18C	
128	MF42 II	肥前	染付	蓋物?	腰部で区画し蓮弁文の一種を巡す	蛇ノ目凹形高台。高台釉ハギ部に焼むら	18C代	火入れであれば内面が無釉
129	MF42 II	肥前?	陶	播鉢		胴部無釉	17C	
130	MG42 I	肥前?	陶	播鉢		胴部無釉	17C	
131	SQ04礫中	備前系	陶	播鉢			17C～18C	
132	MF43 I	肥前?	陶	播鉢		口縁部のみ施釉	18C位	
133	MF42 II	東北?	陶	播鉢		施釉と目のつまり具合に特徴	18C位?	
134	MF42 II	東北?	陶	播鉢		施釉と目のつまり具合に特徴	18C位	

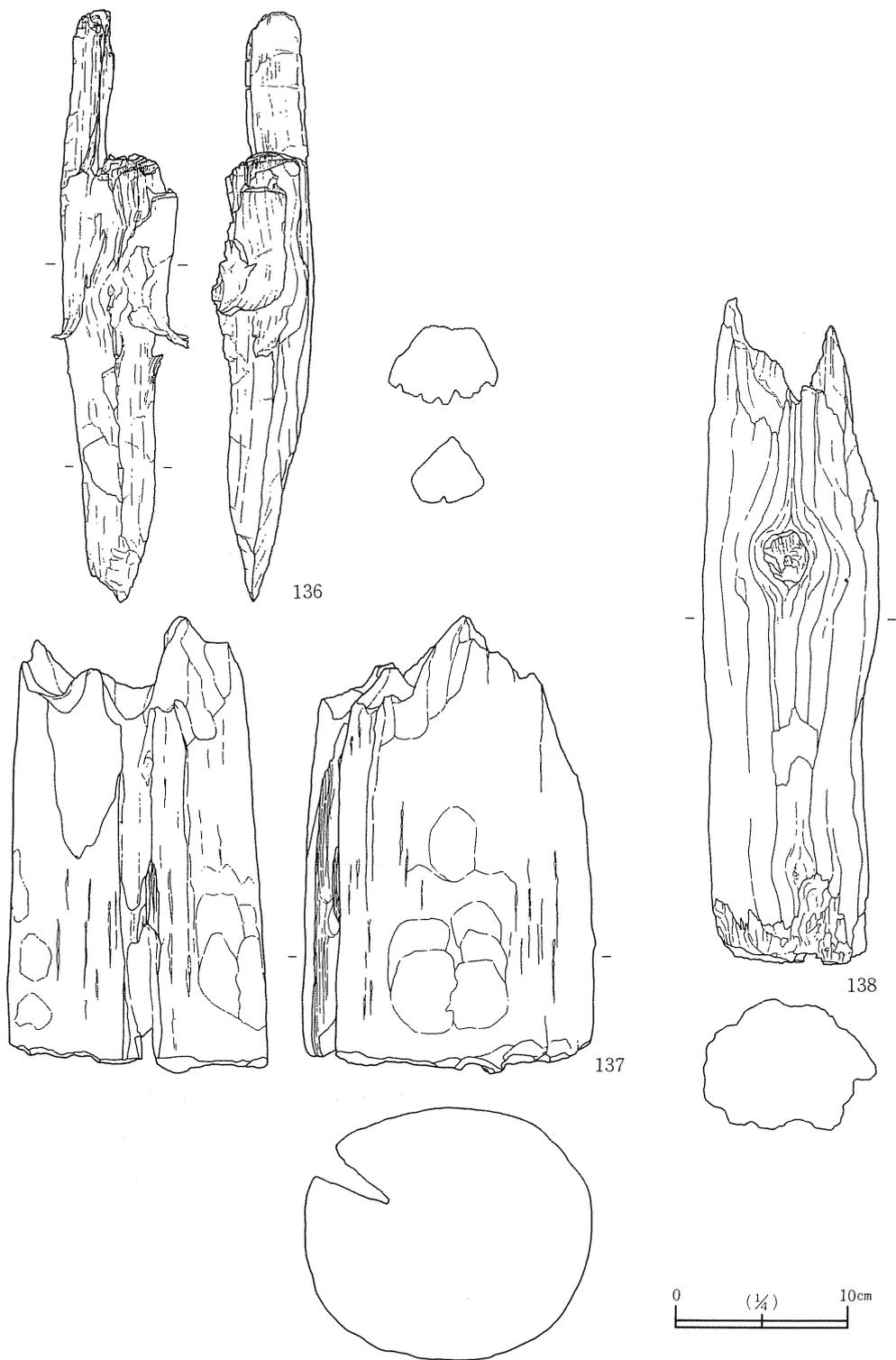
第6表 陶磁器観察表

## (3) 柱材 (第30図)

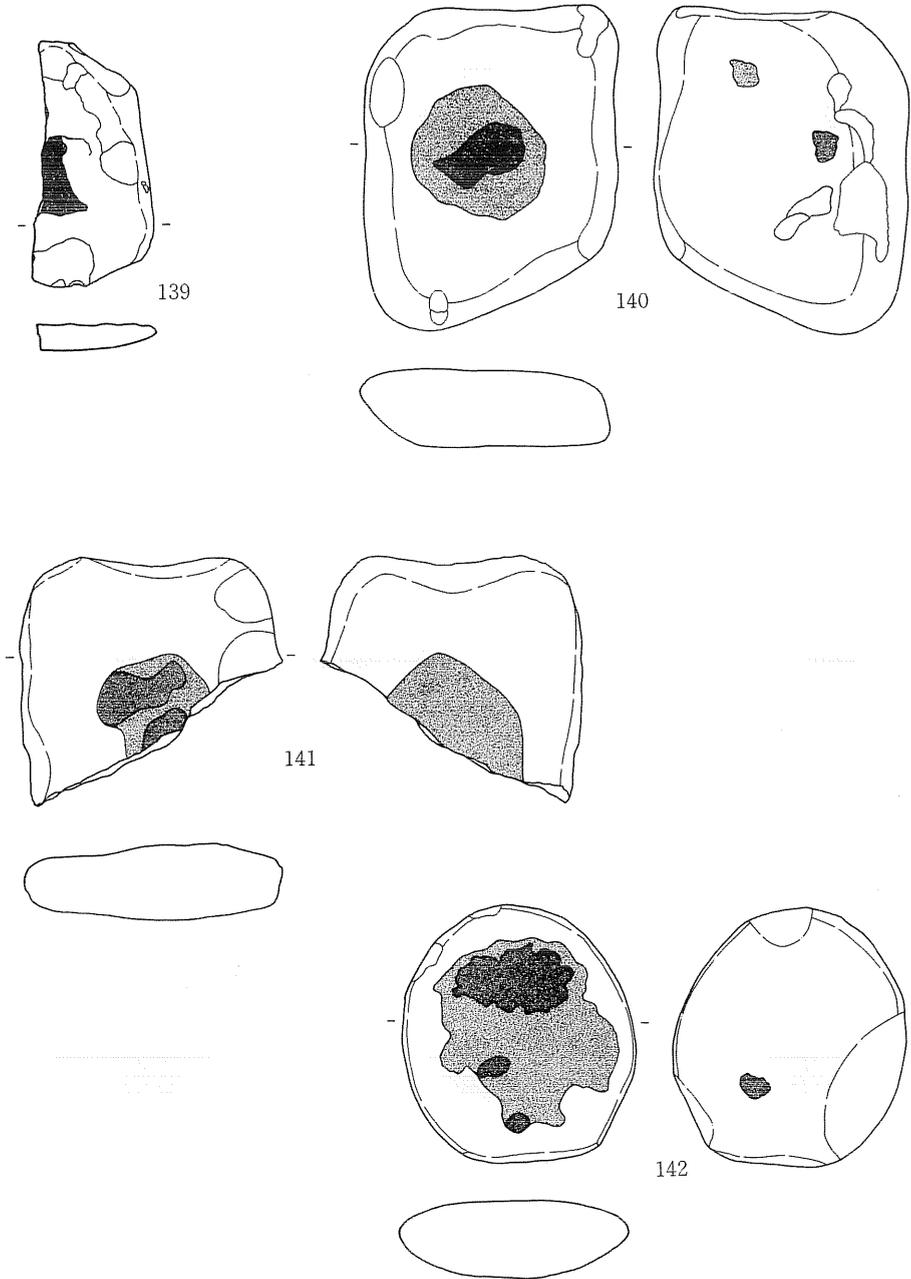
S K 16・P44・198から各1本の計3本出土した。S K 16から出土した136は、先端部の断面形が三角形であり、杭材と考えられる。残存する長さは35cmであり、材質はコナラ亜属コナラ節と同定された。138はP44、137はP198から出土した柱材である。138は表面の腐食が著しくやせており、現存する部分は径9cm前後、長さ39cmである。137は遺存が良く、表面には製材時の痕跡と思われる部分がある。径17cm前後、長さ27cmである。材質は138がクリ、137がモクレン属である。(材質は第5章参照)

## (4) 礎石

礫の中央に残る黒斑により、礎石ととらえたものが11点ある。P239(第24図)のように、本来は柱穴の底部に置かれ、柱材の礎石として使用された礫である。長径14～26cm前後の偏平な礫が多い。139～142は柱穴の底部あるいは覆土中から、143～149は遺構外から出土した。



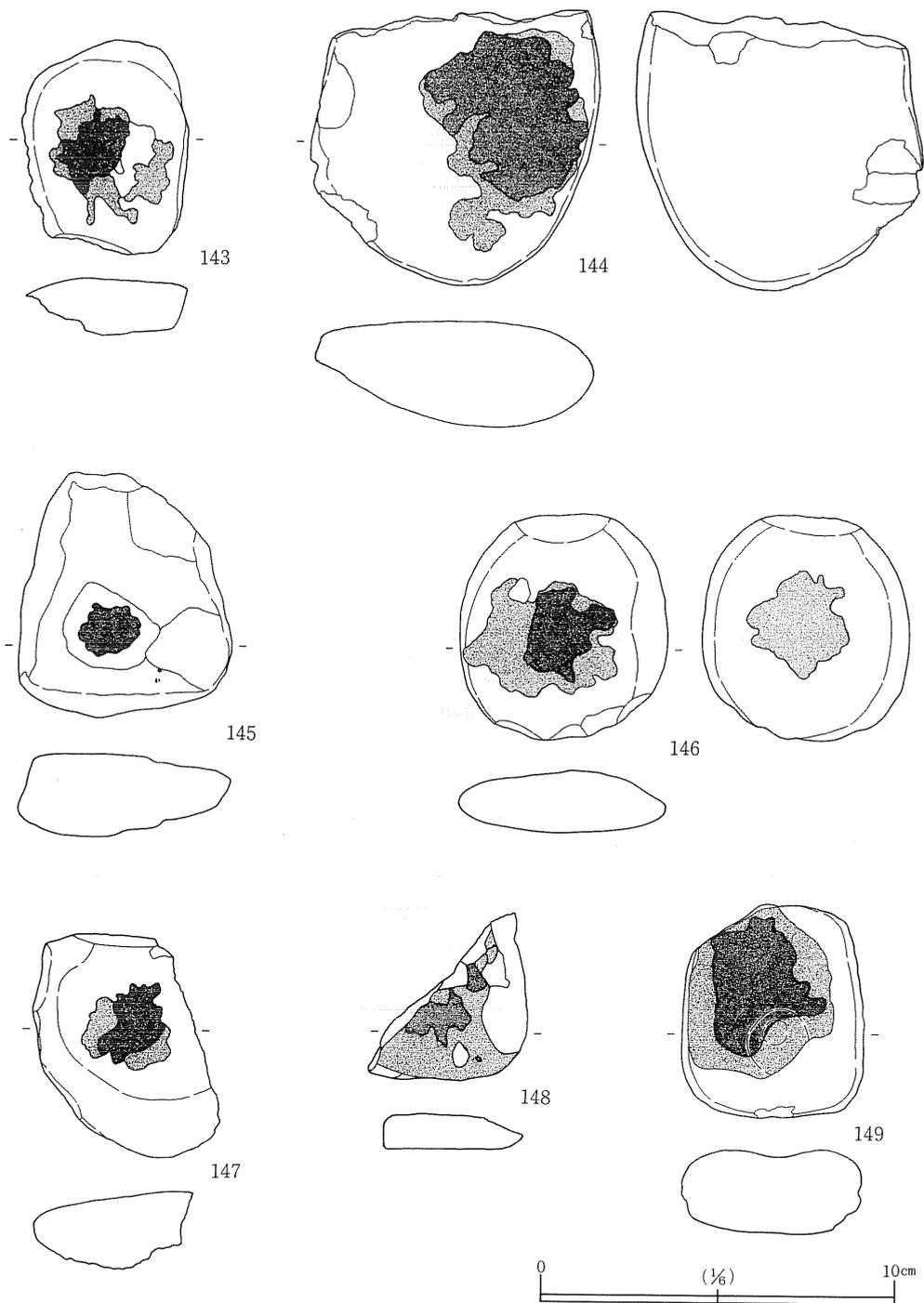
第29図 出土遺物(2)杭・柱材



0 (1/6) 10cm

番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
139	S K P 38	ラテ主	礎石	20.0	9.5	2.1	500.0	安山岩	141	S D 42	確認面	礎石	20.1	20.3	6.12	500.0	安山岩
140	S K P 41	確認面	礎石	19.85	26.5	6.45	750.0	安山岩	142	S K P 50	底面	礎石	21.0	18.3	6.43	219.0	安山岩

第30図 出土遺物(3)礎石 1



番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	番号	出土地区	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
143	MH45	II	礎石	18.1	14.3	4.81	594.0	安山岩	147	MG45	II	礎石	19.55	15.9	6.92	335.0	安山岩
144	MB41	II	礎石	24.1	24.0	9.27	500.0	安山岩	148	ME46	II	礎石	14.2	13.8	3.1	631.0	安山岩
145	MC41	II	礎石	21.3	17.9	7.23	850.0	安山岩	149	MD41	II	礎石	18.1	15.8	7.13	311.0	安山岩
146	MF45	II	礎石	19.3	17.9	5.32	354.0	安山岩									

第31図 出土遺物(4)礎石2

## 第5章 自然科学分析

### 第1節 放射性炭素年代測定

#### 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

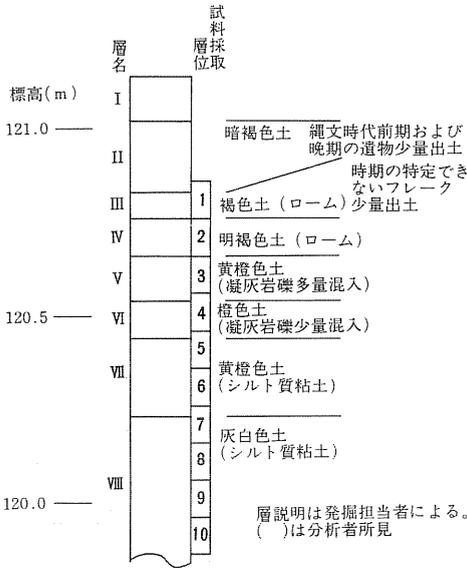
1991年12月24日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告いたします。なお年代値の算出には $^{14}\text{C}$ の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は $\beta$ 線の計数値の標準偏差 $\sigma$ にもとずいて算出した年数で、標準偏差 (ONE SIGMA) に相当する年代です。また試料の $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときは $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値 (B. P.) として表示してあります。また試料の $\beta$ 線計数率と現在の標準炭素 (MODERN STANDARD CARBON) についての計数率との差が $2\sigma$ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

#### 記

Code No.	試料	年代 (1950年よりの年数)
GaK-16150	Wood Charcoal from 茂竹沢遺跡 No. 1 8 S T Z S I 06	2450 $\pm$ 80 500 B. C.
GaK-16151	Charcoal from 茂竹沢遺跡 No. 2 8 S T Z S I 22	3840 $\pm$ 100 1890 B. C.
GaK-16152	Charcoal from 茂竹沢遺跡 No. 3 8 S T Z S X 27	3140 $\pm$ 110 1190 B. C.
GaK-16153	Soil from 茂竹沢遺跡 No. 4 8 S T Z Skp36	2840 $\pm$ 110 890 B. C.
GaK-16154	Charcoal from 茂竹沢遺跡 No. 5 8 S T Z S P 199	1050 $\pm$ 170 900 A. D.

### 第2節 指標テフラの検出

茂竹沢遺跡は、横手盆地東縁に広がる山地を蛇行して流れる旭川左岸の段丘に位置する。遺跡では、縄文時代および中世～近世の遺構・遺物が検出されているが、縄文時代の遺物の下位より時代の特定できないフレイクも検出されている。したがって、遺跡周辺での人間の活動がいつ頃から始まったのかは、今後の発掘成果によるところが大きい。この問題を考える際に前



第32図 L S53グリッド杭付近テフラ検出資料採取地点の模式柱状図

掘調査担当者により地表から下位に向かってI層からⅧ層まで区分された。I層は地表直下の表土層、II層は暗褐色土層とされ縄文時代前期および晩期の遺物が少量出土、III層は褐色土層とされ時期の特定できないフレイクが出土、IV層は明褐色土層、V層は黄橙色土、VI層は橙色土、VII層は黄橙色土、VIII層は灰白色土とされている。このうち、分析時の観察により、III層およびIV層はかなり粘土質の褐色火山灰土いわゆるローム層であり、V層およびVI層はやや円磨した黄灰色の凝灰岩礫（添付された層相記載には軽石とされていた）を多量あるいは少量含むシルト質粘土層であり、VII層およびVIII層も記載にある色を呈する粘土層であることがわかった。試料は、III層からVIII層まで厚さ10cmで連続して試料番号1から10までの10点が採取された。各試料の採取層準を第32図に示す。

## 2 分析方法

適量の試料を蒸発皿にとり、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返し、得られた砂分について実体顕微鏡下で観察し、テフラ本質物質である軽石、スコリア、火山ガラス、遊離結晶などの産状を調べる。さらに、ガラス質のテフラが検出された場合、火山ガラスの屈折率を測定する。測定方法は新井（1972）の浸液法による。以上の結果より試料となったテフラの同定を行う。

## 3 分析結果

### (1) 各試料の砂分の状況

試料番号1および2には、中量の火山ガラスが含まれる。火山ガラスは、淡褐色を呈するあまり気泡を持たない塊状の形態のものが多く、他に発泡した軽石状のものや薄い板状のいわゆ

提となるのは、遺跡の立地するところの地形発達史である。遺跡のあるところは、現在では河床よりも高い段丘上にあり、洪水時にも冠水することはないが、このように段丘化した年代を知ることが遺跡周辺の人間活動の歴史を考察する上での一つの指標となる。

本報告は、段丘上に堆積する地層より降灰年代の知られている指標テフラを検出することにより、地層の堆積年代を推定し、段丘形成を考察する際の情報を提供する。

## 1 試料

試料は、L S53グリッド杭付近に作成された地層断面より採取された。作成された地層断面は発

るバブル型のものが混在する。これらの試料中には、多量の長石粒が含まれる火山ガラスと同じテフラに由来する長石粒を区別することはできない。また重鉍物の遊離結晶もほとんど認められない。

試料番号3と4には、上記と同様の火山ガラスが極めて微量含まれるほかは、上記の試料とほぼ同様の状況を示す。さらに試料番号5～10までの6点は火山ガラス、軽石、スコリアが全く含まれず、ほとんど長石粒から構成される。

## (2) 屈折率の測定

試料番号1および2より、火山ガラスを手選し、測定を行った。測定結果は両試料とも同様の値を示し、測定レンジは $n_{1.501} \sim 1.507$ 、モードは $n_{1.503} \sim 1.505$ であった。

## 4 テフラの固定

試料番号1および2に含まれる火山ガラスは、同一のテフラに由来する。このテフラは、遺跡の地理的な位置、火山ガラスの産出層位と形態および屈折率から、十和田八戸テフラ(To-HP：町田ほか，1984)である可能性が高い。

To-HPは、今から約1.0～1.3万年前に十和田カルデラより噴出したとされている。このテフラの噴火は、はじめは湖水を巻き込んだ火山灰や軽石を噴出する大規模な噴火であったが、やがて大規模な火砕流噴火へと移行した。これまでに確認された火山灰や軽石などの降下火砕物の分布は、十和田カルデラから広く南北方向に広がっているが、東に主軸があることから遺跡付近ではまだ確認されていない(日本第四紀学会，1987)。しかし、本遺跡のように土壤中に混交してしまうような細粒物は確認が困難であるし、また同著にある火砕流の分布範囲は遺跡より北へ約30Kmのところまできており、火砕流が発生した際に舞い上がった細粒物が本遺跡までおよんでいることも十分に考えられるのである。したがって、これまでの分布範囲からはずれる本遺跡からTo-HPに由来する火山ガラスが検出されてもよい。

## 5 遺跡の載る段丘の形成年代について

本遺跡周辺の旭川沿いには、最終氷期に形成された段丘が分布するという記載がある(日本第四紀学会)。しかし、ここで引用した最終氷期の年代は約6万～1万年前という設定がされていることから、それ以上の詳細な段丘の形成年代についてはほとんどわかっていない。

本分析で対象とした地層断面の層相から、本遺跡の載る段丘は、多量の凝灰岩礫が堆積するようなV層が形成されるまでは河川による影響を受けていたが、IV層以降は次第に乾陸化して増水時にも冠水することがなくなったと考えられる。To-HP火山ガラスは、IV層中に含まれ、それより下位にはほとんど含まれないことから、IV層の堆積年代は、To-HPの降灰年代に近いと考えられる。したがって、遺跡の載る段丘が河川の影響を受けなくなったのは古くとも1万3千年前以降であると推定される。また、時期の特定できないフレイクが検出されたIII層にもTo-HPの

火山ガラスが含まれることから、この遺物の年代もTo-HPの降灰年代の頃であろうと考えられる。

### 第3節 樹種の同定

中世末～近世に作られたと考えられている建物に使用された柱材の樹種鑑定を行う。

#### 1 試料

試料は、中世末～近世と見られるS K 16から出土した坑材（試料番号11）と、P 198・44から出土した建物の柱材（試料番号12, 13）と考えられる3点である。

#### 2 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口・柀目・板目の3断面の徒手切片を作製、ガム・クロラールで封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。

#### 3 結果

試料は、試料番号11がコナラ属コナラ亜属コナラ節の一種、12がモクレン属の一種、13がクリにそれぞれ固定された（第7表）。固定根拠とした主な解剖学的特徴及び一般的特徴などを以下に記す。なお、一般的特徴などについては「木の事典第2巻、第4巻」（平井、1979-1980）を参考にした。

番号	検出遺構	用途	樹種名
11	S K 16	坑材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
12	P 198	柱材	モクレン属の一種
13	P 44	柱材	クリ

第7表 材固定結果

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.）  
ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接戦状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループでモンゴリナラ（*Quercus mongolica*）とその変種ミズナラ（*Q. mongolica* var. *grosseserrata*）、コナラ（*Q. serrata*）、ナラガシワ（*Q. aliena*）、カシワ（*Q. dentata*）とい

くつかの変品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹羽地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ（*Q. acutissima*）に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

・クリ (*Castanea crenata*)           ブナ科

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、ともに管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道西南部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、櫛木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタンニンが採られ、果実は食用となる。各地の遺跡からの出土例の多い樹種の一つである。

・モクレン属の一種 (*Magnolia* sp.)       モクレン科

散孔材で管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は段階状～対列状に配列、放射組織との間では網目状～階段状となる。放射組織は異性Ⅱ型、1～2細胞幅、1～40細胞高。柔組織はターミナル状。年輪界は明瞭。

モクレン属は、ホオノキ (*Magnolia obovata*)、オオヤマレンゲ (*M. sieboldii*)、タムシバ (*M. salicifolia*)、コブシ (*M. kobus*)、シデコブシ (*M. stellata*) の5種が自生する。ホオノキ・コブシは北海道から九州の適潤～湿性地に生育するが、コブシは西日本にはやや少ない。タムシバなどは産地が限られたり、稀であったりする。ホオノキの材は軽軟で、割裂性が大きく、加工は極めて容易で欠点が少ないことから、器具・建築・家具・建具材などのほか、指物・木地・下駄歯・刃物鞘など特殊な用途がいられている。また木炭は金・銀・銅・漆器の研磨に用いられた。

コブシの材は、ホオノキに似るがやや硬く、ホオノキより劣るものとされ、ホオノキに準じた使われ方をする。

#### 4 考察

杭材はコナラ節、柱材はモクレン属とクリであった。このうち、クリは耐朽性が高いため、柱穴等にそのまま埋めても腐りにくい。また耐久性等の強度も高いため、柱材としては優れた材と言える。出土例も多く、東北地方では黒石市板留遺跡（嶋倉，1978），八戸市葦窪遺跡（嶋

倉, 1983) 等で大量にクリが出土している。今回の結果は、青森県で行われてきた結果とは一致している。秋田県ではこのような調査例が少ないため、青森県の傾向がそのまま秋田県にも当てはまるのか明確ではない。今後さらに資料を蓄積していくことが必要であろう。また、花粉分析等を用いた周辺植生の検討も併せて行う必要がある。

モクレン属は、これまでに柱材としての出土例が少ない樹種である。島地・伊東 (1988) の統計によると、モクレン属の柱材は青森県黒石市高館遺跡 (島倉, 1978) で4点同定されているのみである。また、建築部材とはされていないが、黒石市板留遺跡の第7号住居跡からはホノキ?とされる丸太や板材が出土している (島倉, 1980)。これらは、同じ東北地方ということで共通性があるが、これらの例は、いずれも平安時代とされており、中世～近世とされる茂竹沢遺跡よりもやや古い。したがって、両者を比較することは簡単にはできず、モクレン属の柱が東北地方において一般的な用材であったのか、それほど一般的な用材ではなかったのか現段階では判断できない。秋田県では材同定の資料がまだ少なく、今後さらに資料数を増やし検討する必要がある。

杭材はコナラ節であった。島地・伊東 (1988) をみると、コナラ節の杭材は時代、地域を問わず出土例が多い。杭材のような木製品に使用される木材は、はるばる遠方から運ばれてきたことは考えにくく比較的遺跡周辺で入手し易い樹木の中から選択したと考えられる。コナラ節の樹木は現在二次林として九州～北海道まで見ることができ、武蔵野の雑木林のように古くから薪炭林として維持・管理されてきたものもある。本遺跡周辺で武蔵野のような維持・管理が行われていたかは断言できないが、少なくとも遺跡周辺で普通に見ることができた樹種であったと思われる。

引用・参考文献

- 1 新井房夫 「斜輝石・角閃石の屈折率によるテフラの固定-テフロクロロジーの基礎的研究」『第四紀研究』11 p254-269 (1972)
- 2 平井信二 『木の事典』第2・4巻 かなえ書房
- 3 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 「テフラと日本考古学-考古学研究と関係するテフラのカタログ-」 (1979-1980) (1984)
- 4 渡辺直経編 『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』 p865-928
- 5 日本第四紀学会編 『日本第四紀地図』 東京大学出版会 (1987)
- 6 島地 謙・伊東隆夫編 『日本の遺跡出土木製品総覧』 p296 雄山閣 (1988)
- 7 島倉巳三朗 「昭和51年度青森県内の遺跡から出土した炭化材の樹種」 『黒石市高館遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第40集 p313-322 青森県教育委員会 (1978)  
\*原著が入手できなかったため、島地・伊東 (1988) を参照した。
- 8 島倉巳三朗 「板留 (2) 遺跡から出土した炭化材の樹種」 『板留 (2) 遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第59集 p1-2 青森県教育委員会 (1980)
- 9 島倉巳三朗 「韭窪遺跡出土木炭の樹種調査報告書」 『韭窪遺跡-東北縦貫自動車道八戸線関係文化財調査報告書Ⅶ-』青森県埋蔵文化財調査報告書第84集 p392-393 青森県教育委員会 (1983)

## 第6章 まとめ

調査では縄文時代の12遺構と、中世から近世の486遺構を検出した。後者には削平・盛土による整地地業跡や453基の柱穴を含んでいる。また、それぞれの時代の遺物が合わせてコンテナで15箱出土した。

縄文時代の時期が明らかな遺構としては、後期の竪穴住居跡が2軒検出されており、この時期に小さな集落が形成されている。2軒の竪穴住居跡はともに作り替えが認められ、また出入り口施設と考えられる楕円形のピットも検出されている。遺物は少量ずつではあるが前期以降晩期までの各時期の土器が出土しており、またB区ではまとめて出土した剝片や石核に接合資料もある。この剝片の出土層位の一部は褐色で地山と判別の難しい所もあるが、こうした状況は近年同じ原因で発掘調査されている山内村内の小田Ⅳ・虫内Ⅲ遺跡などと共通した特徴であり、石器群についても遺跡間での遺物の接合関係の調査などを含めて今後検討されなければならない点である。

中世から近世の遺構には整地地業跡、石垣状遺構3基、溝跡14条、柱穴453基及びそれから想定される建物跡4棟、柱列1条、土坑6基、石敷遺構1基、集石遺構5基がある。これらの遺構のうち、石垣状遺構は盛土地業南端の土留用として、溝跡は主に排水用として直接的に整地地業に関連すると考えられる遺構である。またこの整地地業地には453基の柱穴による建物や柱列があり、石敷遺構や土坑のいくつかについてもこの建物と関連した遺構と考えられる。5基の集石遺構の内、S Q 05は地山礫の集石遺構であり整地地業に伴うものと考えられた。また残る4基は河原石を用いた遺構であり、積石塚状のS Q 02・04と礫の上面が平坦になるように組まれたS Q 03・28がある。前者は礫群に混じって出土した陶磁器やS Q 09との重複状況から建物跡より新しく位置付けられる。また、後者のS Q 28についてもS B 01との重複から建物より新しい遺構と考えられる。以下では整地地業と関連の深い石垣状遺構と溝跡の変遷を整理することを通して、整地地業地の変遷を検討しまとめとする。

### 整地地業地の変遷

石垣状遺構はS Q 09・10・26と3基検出されたが、S Q 09・26には違いが明瞭に識別される盛土層が各々に伴っている。この盛土層と遺構との関係から、S Q 26よりもS Q 09が新しい。またS Q 09は3カ所の部分からなるが、S Q 09 a・bとはややズレるS Q 09 cがあることからS Q 09内にも変遷のあった可能性がある。S Q 10と他の2基との関係は不明瞭であるが、S Q 10がS Q 09の北側を補うような位置にあることから、S Q 10がS Q 09と同時かもしくは新しい段階のもので

ある事を示唆している。なお、溝跡ではあるがS D44もS Q09・26と平行する遺構で、S D44が盛土整地層の下で検出されたことから、S Q09・26より古い同様の性格の遺構であった可能性もある。以上のことから、整地地業地の南東側はS D44→S Q26→S Q09・10という変遷がとらえられ徐々に南東方向に整地範囲を広げていることがわかる。またS Q26からS Q09への変遷は、その盛土層の厚さと広さから大規模な削平を伴っていたものと考えられる。

溝跡は14条検出されている。斜面途中や整地地業地の縁辺に設置されたこの遺構は、浸み出てくる水に対する手だてとして構築された遺構と考えられる。切り合いから変遷のとらえられるのは5カ所である。整地範囲の北西側のS D12・13ではS D12が新しい。S D14はMF・MG46グリッド付近では3時期あり、S D14e→c→dの順に新しい。S D37・38ではS D38が新しい。S D42は、ME45グリッドでS D39・40を、MD46グリッドでS D41・43を切っている。また、黒色の盛土整地土と溝の縁石から整地範囲の北西辺では、最終的にS D11・13よりS D14が新しく、MG46グリッド付近ではS D14がS D15より新しい。以上のことと全体の配置を考え合わせると、整地地業地の北半では、Ⅰ期：S D15・40から、Ⅱ期：S D13・14c・39・14東端・41南半、そしてⅢ期：S D11・14e・37・41・43、さらにⅣ期：S D14西側・14d・38・42という変遷が考えられる。なおS D12についてはⅡ・Ⅲ期間に、またS D43はⅢ・Ⅳ期間のものと考えられる。この溝跡のⅠ～Ⅳ期と南東側の変遷との対応はⅠ期とS D44、Ⅱ期とS Q26、Ⅲ・Ⅳ期とS Q09・10と考えられる。以上の整地範囲全体の変遷を第33図に示す。

この整地地業地に建てられた建物については、整地地業に変遷のあること、柱穴に切り合いがあることから建物にも変遷があったものと考えられる。しかしここでは柱穴の多さから十分な検討ができなかった。付図1には推定される建物4棟と塀と考えられる柱列1条を示した。SB01・02は位置とS Q09との関係から門になるものと考えられる。また、SB04は地業地内の中心となる建物である。建物の南西側は調査区外に伸びているが築行4間、桁行5間を中心とする立派なものである。柱穴の掘り方内から出土した陶器が16世紀前半～中頃のものであり、この建物より新しい集石遺構が18世紀以降に位置付けられる事から、この建物の年代については16世紀の中頃以降18世紀の間と考えられる。また建物自体の性格については、出土遺物等にも検討する手掛かりがなく、不明である。しかし遺跡の位置から、この建物跡が菅江真澄の指摘する「寺ノ跡」にあたるものと考えられ、真澄が19世紀の初めに山内村を訪れた際には「いかなる寺とも古老の伝えもなし」となってしまったのであろう。

柱穴から推定される建物とその性格については今後さらに検討される必要があるが、中世末から江戸時代に位置付けられるこの遺構群については、戦国時代に県南部に勢力をもった小野寺氏との関係も含め、当該時代の歴史を具体化していく良好な資料である。



第33図 整地地業地の変遷



1 調査区遠景 上空から (南→北)



2 調査区全景 上空から (南→北)



1 S I 06 調査状況 (南西→北東)



2 S I 06 完掘状況 (南西→北東)



3 S I 22 完掘状況 (南→北)



4 S Q 01 検出状況 (南東→北西)



1



10

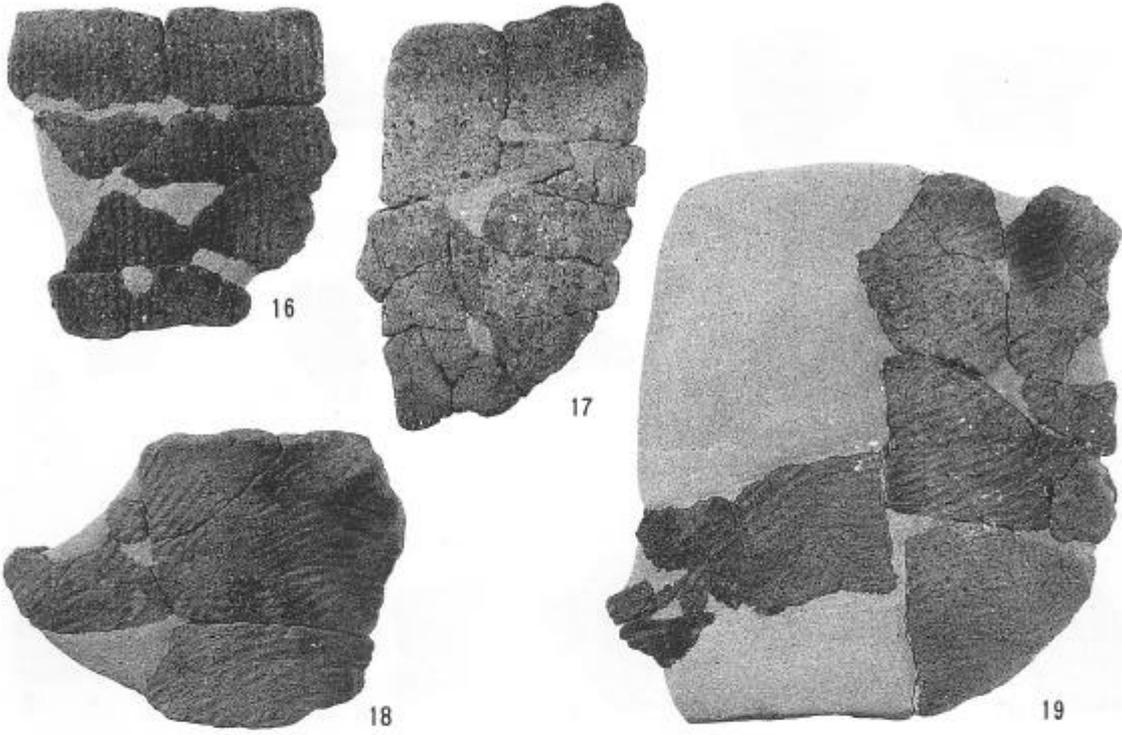


6

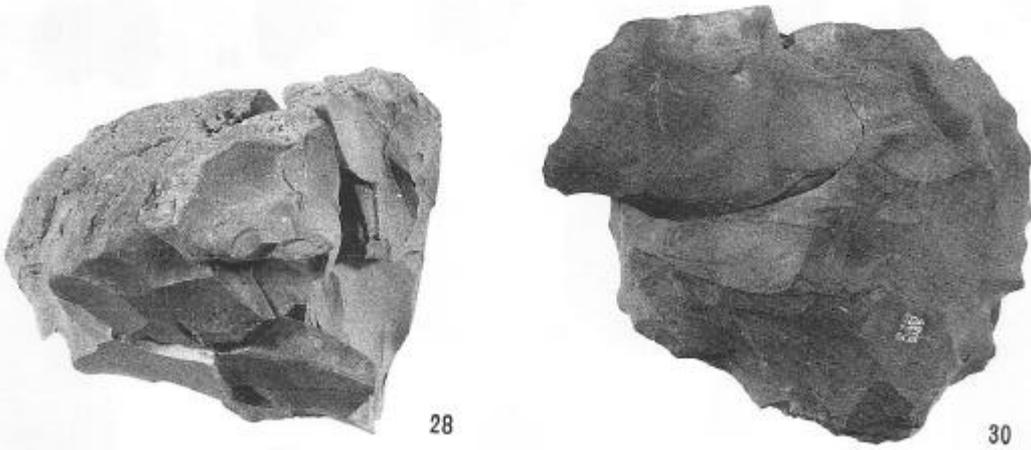


7

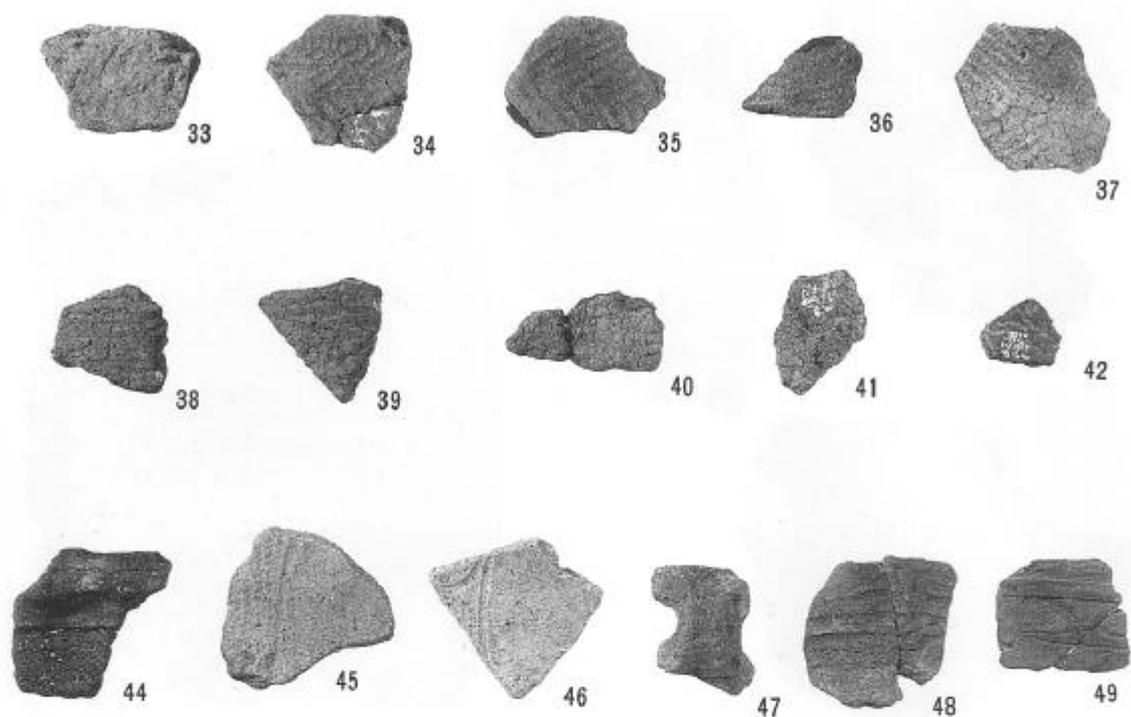
5 遺構内出土遺物 (1)



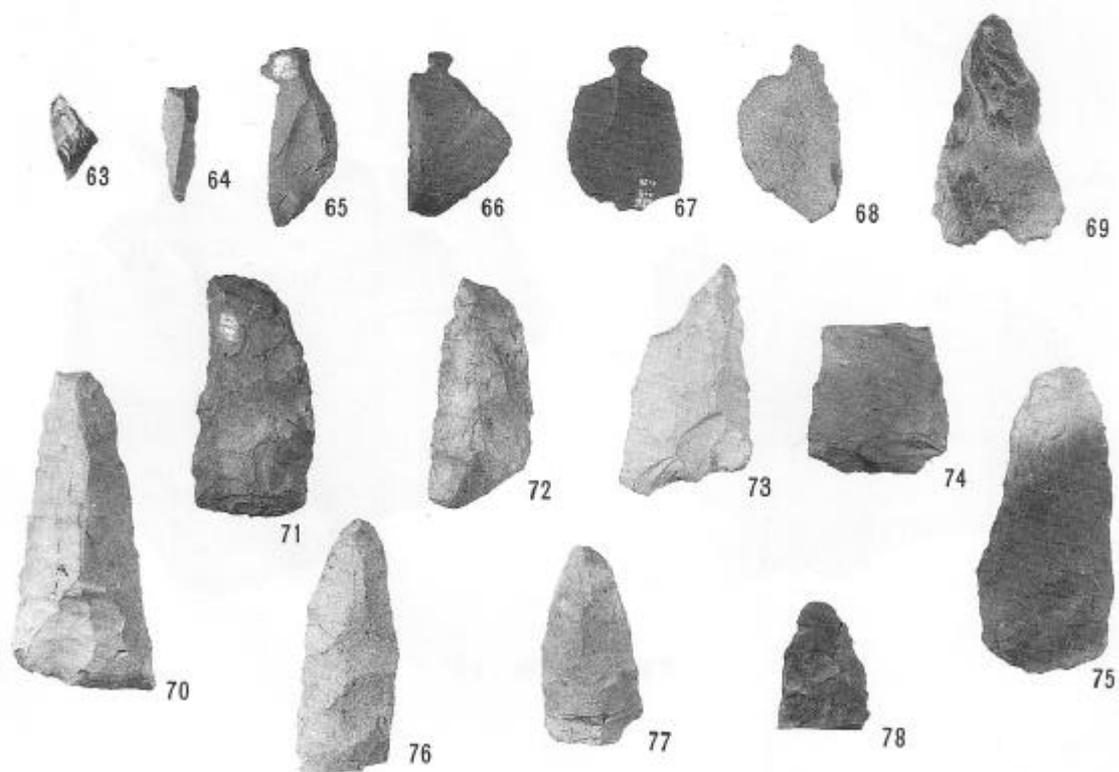
1 遺構内出土遺物 (2)



2 遺構内出土遺物 (3)



1 遺構外出土遺物 (1)



2 遺構外出土遺物 (2)



1 石垣状遺構と整地地業地 (南東→北西)



2 整地地業地全景 (南東→北西)



3 S Q09・26 石垣状遺構とS Q05集石遺構  
(南東→北西)



4 S Q09 出入口部分 (南東→北西)



5 S Q09・26 石垣状遺構 (北→南)



6 S Q10 石垣状遺構 (北→南)



7 S D07 溝跡 (南西→北東)



8 S D13 溝跡土層断面 (南西→北東)



1 黒色土中での柱穴検出状況（南東→北西）



2 陶磁器出土状況（南→北）



3 柱穴内の柱材出土状況（南→北）



4 柱穴内の柱材出土状況（南→北）



5 柱穴・溝跡の精査作業（北西→南東）



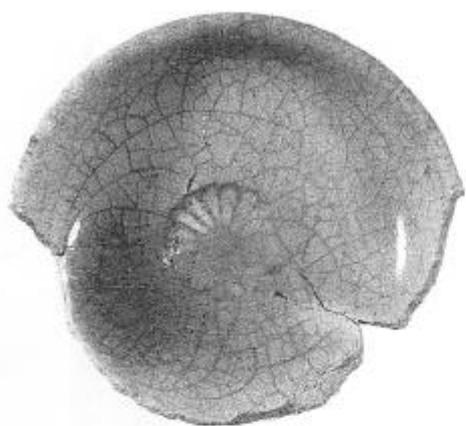
6 SQ 08 石敷遺構（南→北）



7 SQ 02・28 集石遺構（南→北）



8 SQ 03 集石遺構（南東→北西）



120



124



125



121



122



123



126



127



118



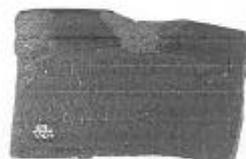
129



130



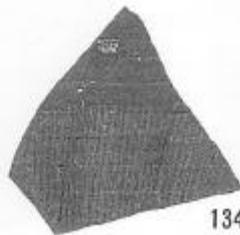
132



133



131



134

出土陶磁器



136



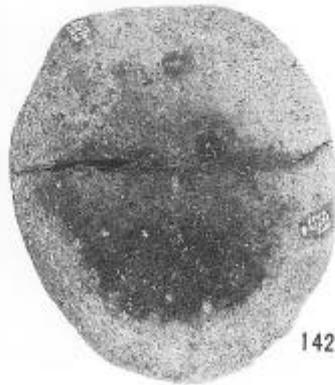
138



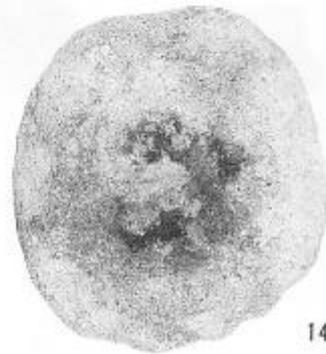
137



143



142



146

遺材・礎石

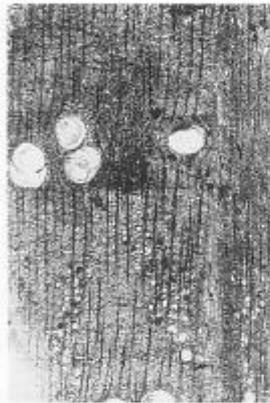


1



2

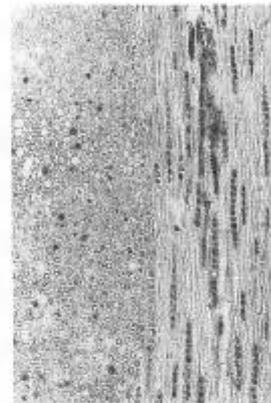
- 1 資料番号1の火山ガラス
- 2 資料番号2の火山ガラス
- 3 コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (No11)
- 4 クリ (No13)
- 5 モクレン属の一種 (No12)
- a : 横断面, b : 放射断面
- c : 接線断面



3 a



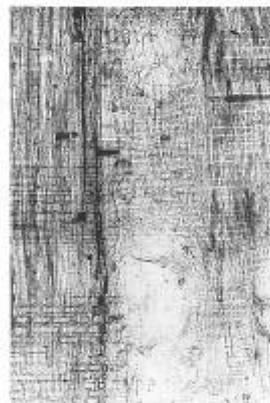
3 b



3 c



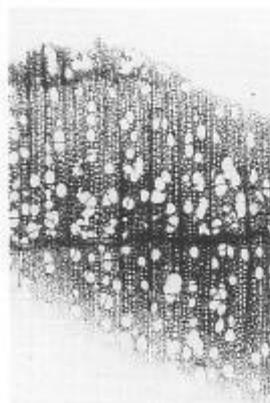
4 a



4 b



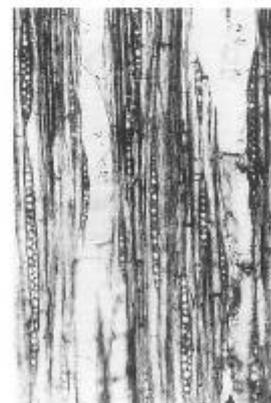
4 c



5 a



5 b



5 c

テフラ検出試料・材の顕微鏡写真

## あとがき

調査では、菅江真澄の記述にある建物跡が検出された。この建物跡は出土遺物などから中世末～近世前期のものと考えられる。中世の横手・平鹿地方には戦国大名の小野寺氏がいた。本遺跡の東側には皿木館があり、本遺構も小野寺氏に関連したものである可能性がある。本報告書では建物自体の検討が不十分であり、具体的な建物の性格や小野寺氏との関連については今後の検討課題である。

調査を行ったのは平成3年夏から秋であるが、翌年の3月には秋田大学で中世史を教えてこられた遠藤巖先生が宮城教育大学へ転任された。遠藤先生が秋田の中世史研究に指導的役割を果たされた19年間は、秋田県の中世史研究にとっては一つの画期となるできごとであるように思われる。私は大学時代に遠藤先生に歴史学を指導していただいた。自分の努力不足で、指導していただいたことを十分に身につけているとはいえないが、先生が秋田を去られる年にこの遺跡の調査にあたったのも不思議な巡り合わせのように思われる。

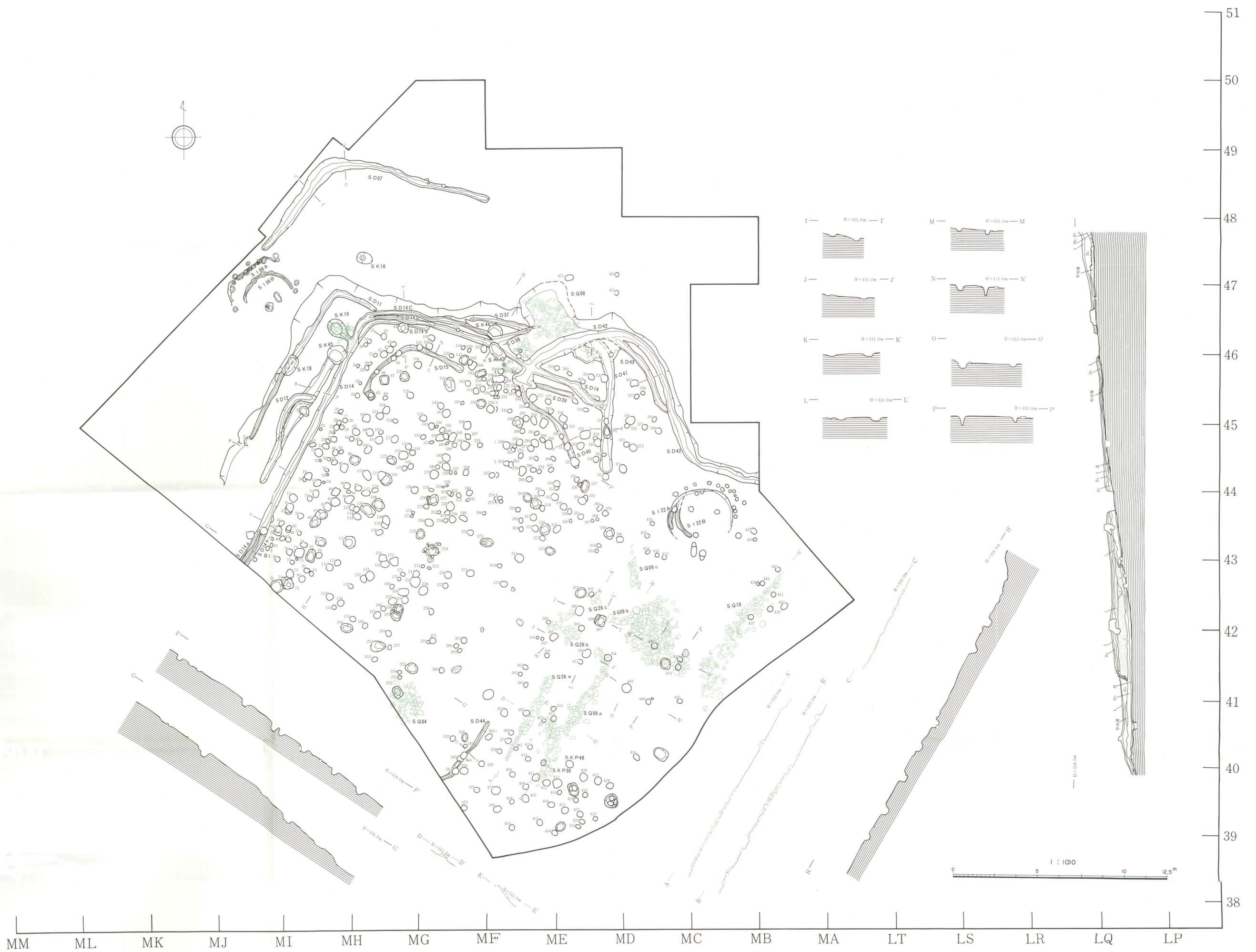
発掘調査から整理作業をとおして報告書という形になるまでの間には実に多くの人々がかかわっている。調査区の草刈や切り株の除去に始まり、報告書の原稿・版下が割り付けされるまでには様々な苦労や工夫がある。今回は、特に報告書の版下の作成にあたって、整理作業員の方々に主体的に取り組んでいただいた。作業に係わったすべての方々の代表として、報告書作成作業に携わった整理作業員さんの名前を掲載し、皆様に心から感謝申し上げる次第です。

報告書作成に携わった整理作業員さん

佐藤せい子・鈴木孝子・町田京子・森元京子



付 図 1 遺構配置図



付図2 A区遺構配置図